

田野口・籠町遺跡Ⅲ

— 中町東線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2008年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会

田野口・篔町遺跡Ⅲ

— 中町東線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2008年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会

序 文

田野口・笹町遺跡は2006年度より、中町東線建設事業に伴い3ヵ年にかけて発掘調査が行われてまいりました。

調査の結果、弥生時代から近世に至る、連綿と続いてきた私達の祖先の足跡の一部が明らかとなりました。

近年、マスコミ等を通じて、華やかな発掘調査の成果がよく報道されております。しかしそうした成果は、各地域で行われています大小の発掘調査成果の積み重ねがあって、初めて意義を持つものとなります。多可町の歴史は多可町にしかないものであると同時に、多可町で完結するものではありません。北播磨の歴史、播磨の歴史、兵庫県の歴史ひいては日本の歴史へとつながっていくものであります。

また、こうした一つ一つの発掘調査の積み重ねにより、各種データを蓄積していくことが、地域の歴史や文化の解明につながり、それらを活用していくことによって、住民の方々の郷土に対する愛着や誇りを醸成していくものであると考えます。

本書をはじめ、出土した資料が広く活用され、多可町の歴史、文化の再構築、さらには未来への糧の一助となることを期してやみません。

最後になりましたが、発掘調査作業及び整理作業にあたり、多くの方々にご協力・ご指導いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

2008年3月

多可町教育委員会

教育長 小林 紀之

例 言

- 1 本書は兵庫県多可郡多可町中区田野口字窺町に位置する田野口・窺町遺跡第6区の発掘調査報告書である。
- 2 調査は多可町教育委員会が主体となり、安平勝利が担当した。
- 3 現地での遺構実測は内橋志郎、神月さやか、早崎喜代美、藤田侑子、松田優子、吉田麻美、宮原文隆、安平が行い、遺構及び遺物写真と遺物実測は安平が行った。
- 4 本書で示す標高地は多可町建設課設定のB.Mを使用した値である。方位は座標北（第V系）で示している。
- 5 本書記載の土器実測図断面は、土師器・弥生土器一黒、須恵器・陶器一白抜き、磁器一網目とした。
- 6 遺物には通し番号を付し、図面、写真、表の番号は一致する。
- 7 遺物実測図は基本的に3次元デジタイザーを使用して行い、すべてデジタルデータとして保管している。
- 8 遺構の表記に際しては、次のように略したものがある。
 竪穴住居跡－SB 溝－SD 土坑－SK 柱穴・柱穴状遺構－P
- 9 本書の執筆・編集は安平が行った。
- 10 本書にかかる資料は、兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 那珂ふれあい館（多可町ビクターセンター）で保管している。

本文目次

序文

例言

I はじめに

1. 地理的環境…………… 1
2. 歴史的環境…………… 2
3. 調査に至る経緯、調査体制…………… 5

II 発掘調査の概要

1. 上層遺構面…………… 9
2. 下層遺構面…………… 24

III まとめ…………… 59

表目次

土器観察表

報告書抄録

挿図目次

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 第1図 多可町位置図 | 第2図 中区北部平野遺跡分布図 |
| 第3図 調査位置図 - 1 | 第4図 調査位置図 - 2 |
| 第5図 田野口・笹町遺跡第6区遺構配置図 | |
| 第6図 掘立柱建物01・02 (SB01・02) | |
| 第7図 掘立柱建物01・02・03出土遺物 | 第8図 掘立柱建物03 (SB03) |
| 第9図 掘立柱建物04 (SB04) | 第10図 掘立柱建物04・その他柱穴出土遺物 |
| 第11図 土坑01 (SK01) | 第12図 土坑02 (SK02) 及び出土遺物 |
| 第13図 土坑03 (SK03) 及び出土遺物 | 第14図 土坑04 (SK04) |
| 第15図 土坑05 (SK05) 及び出土遺物 | 第16図 土坑06 (SK06) |

- 第17図 土坑07 (SK07)
 第19図 溝01出土遺物
 第21図 上層包含層出土遺物②
 第23図 上層包含層出土遺物④
 第25図 竪穴住居址出土遺物
 第27図 土坑08出土遺物
 第29図 土坑10 (SK10)
 第31図 溝05・06・07 (SD05・06・07)
 第33図～第37図 溝05上層土器群①～⑤
 第41図～第43図 溝05中層出土遺物①～③
 第44図～第49図 溝05下層土器群①～⑥
 第54図 溝05出土遺物
 第56図～57図 下層包含層出土遺物①～②
- 第18図 溝01・02・03 (SD01・02・03)
 第20図 上層包含層出土遺物①
 第22図 上層包含層出土遺物③
 第24図 竪穴住居址 (SB05)
 第26図 土坑08 (SK08)
 第28図 土坑09 (SK09) 及び出土遺物
 第30図 溝04 (SD04)
 第32図 溝05上層土器群出土状況と断面土層
 第38図～第40図 溝05上層出土遺物①～③
 第50図～第53図 溝05下層出土遺物①～④
 第55図 溝06・07 (SD06・07) 出土遺物

図 版 目 次

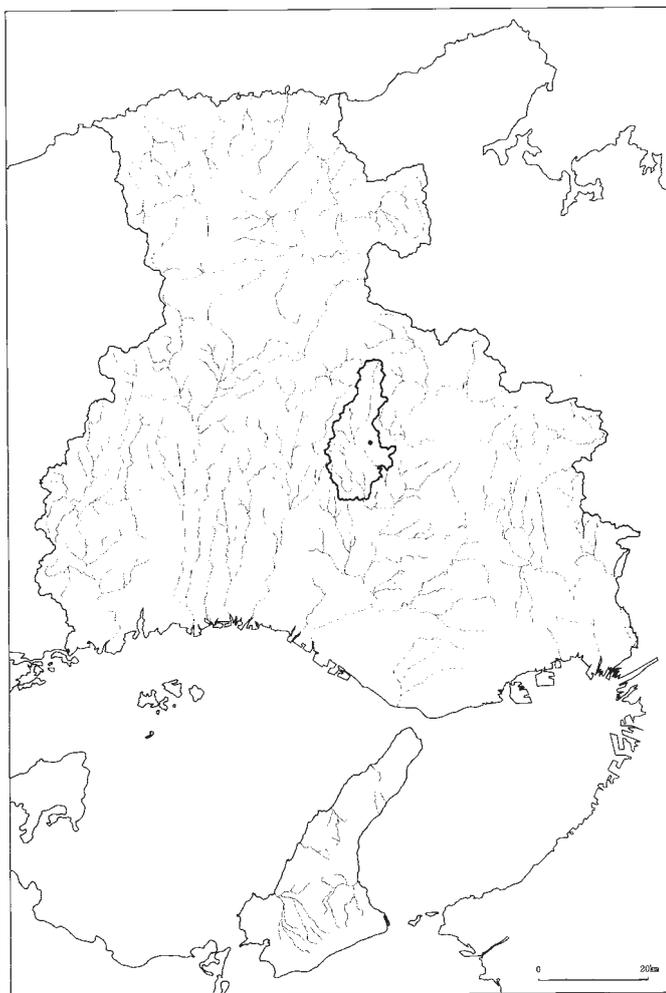
- 図版 1 多可町中区北部平野航空写真 (南から) 調査前全景
 図版 2 第 I 遺構面全景 (西側) 第 I 遺構面全景 (東側)
 図版 3 掘立柱建物01・02・03 掘立柱建物04
 図版 4 掘立柱建物各柱穴
 図版 5 掘立柱建物各柱穴 土坑01 (全景 土層)
 図版 6 土坑02 (全景 検出状況 土層 遺物出土状況①・②)
 図版 7 土坑03 (全景 土層) 土坑04
 図版 8 土坑05 (全景 土層 遺物出土状況) 土坑06 土坑07 (全景 土層)
 図版 9 溝01・02・03 溝01
 図版10 溝01土層 溝02土層 溝03土層
 図版11 第 2 遺構面全景 (西側) 第 2 遺構面全景 (東側)
 図版12 竪穴住居跡 (全景 遺物出土状況)
 図版13 竪穴住居跡 (遺物出土状況①・② 土層①・②)
 図版14 土坑08 (遺物出土状況 完掘状況) 土坑09 溝05・06・07全景
 図版15 溝05 (土層①・②・③)
 図版16 溝05 (上層土器群①・②・③)
 図版17 溝05 (上層土器群細部①・② 下層土器群全景 下層土器群細部①・②)
 図版18 溝06土層 溝07土層 溝06・07全景
 図版19～図版49 出土遺物

I はじめに

1 地理的環境

多可町は、平成 17 年 11 月 1 日に旧中町、加美町、八千代町が合併して誕生した新町である。

当町から南方の神戸市沿岸部までは約 50 km、北方の豊岡市沿岸部までは約 70 km の直線距離にあり、兵庫県のほぼ中央部、播磨最北端に位置する。行政境は、北は丹波市、朝来市、東は丹波市、南は西脇市、加西市、西は神崎郡神河町、市川町にそれぞれ接しており、東西約 13 km、南北約 30 km、総面積 185.15 km² の町域を有する。町域の約 79.8% を山林地帯が占めており、特に町北部には標高 692.6m の妙見山、939.4 m の笠形山、1005.2 m の千ヶ峰など 600 ～ 1000 m 級の山々がそびえる山間地帯である。町内は三国岳を源とする杉原川が加美区、中区の中央部を貫流し、笠形山を源とする野間川が八千代区の中央部を南流して谷底平野を形成している。



第1図 多可町位置図

気候は、瀬戸内気候の影響下にあるが、内陸性気候の影響も受け、寒暖の差が比較的大きい。

主な産業は、古くから農林業、繊維産業を中心として発達してきたが、近年の経済、社会状況の変化、人口構成年齢の高齢化、過疎化など、農山村地域を取巻く状況が厳しい中であって、新たな産業の導入・振興が模索されている。

田野口・笠町遺跡は、中区にあり、中央を流れる杉原川によって、大きく北部平野、中央平野、安田平野に分けられるうちの北部平野北側に位置し、北方にそびえる妙見山の山裾、標高 108.00 m 付近に広がる。

2. 歴史的環境

町内には旧石器時代から近世期にかけての遺跡が、約600ヶ所近く確認されている。

ここでは、中区北部平野を中心とした遺跡について、時代を追って概観する。

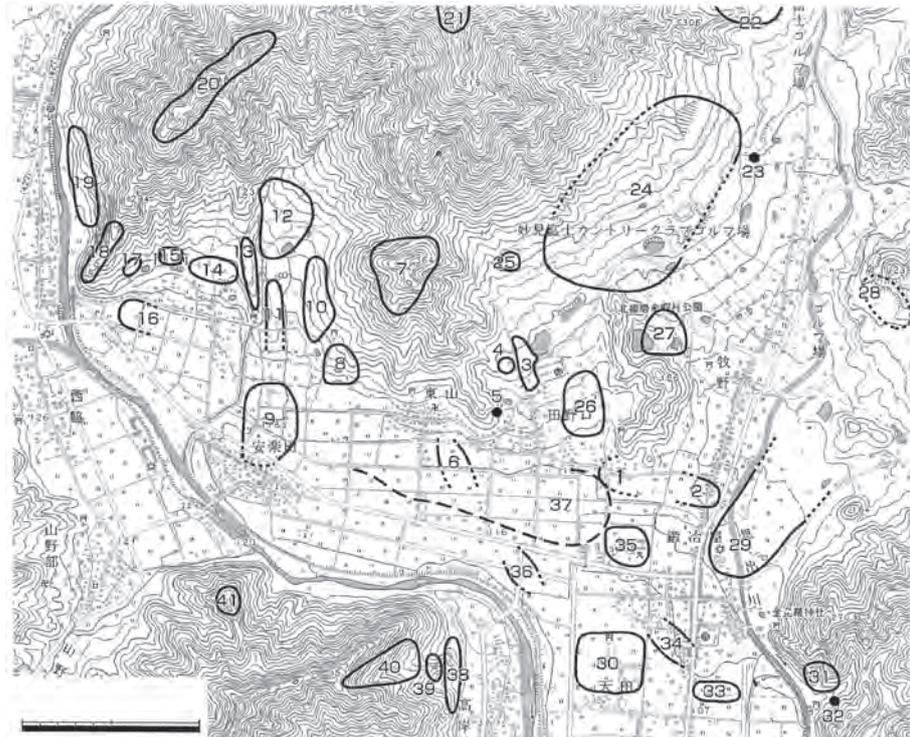
旧石器時代の遺構、遺物は現在、多可町内では確認されていない。

縄文時代早期～前期は、明確な遺構は確認されていないが、早期の撚糸文土器、押型文土器が出土している

安楽田・夫婦岩遺

跡、思い出遺跡、貝野前遺跡、市原・寺ノ下遺跡や、チャートを石材とする大量の石器を出土した前期の曾我井・野入遺跡がある。縄文時代中期になると、熊野部遺跡において中期後半と考えられている竪穴住居址が検出されている。縄文時代後期になると確認されている遺跡数は増加する。溝から大量の後期前半を中心とする土器を出土した思い出遺跡、炭化種子が充満した土坑が検出された貝野前遺跡があるほか、加美区熊野部西田遺跡、豊部井杉遺跡などで遺物が出土している。千葉豊氏は中区の当期の遺跡分布状況の検討のなかで、『同一の集団によって選択・移動が繰り返し行われた結果残された遺跡群との理解』を示されている。縄文晩期には貝野前遺跡で遺構が確認されているほか、加美区市原・寺ノ下遺跡において、竪穴住居址や大量の土器が検出されおり、当期の土器編年を考える上でも貴重な資料となっている。

弥生時代にはいと、発掘調査数の違いにもよるが、中区を中心として多くの遺跡が確認されている。前期では、遺構は坂本・土井の畑遺跡で溝が確認されている程度であるが、鍛冶屋・下



- | | | |
|----------------------|-----------------|-------------------|
| 1. 田野口・窺町遺跡 | 2. 牧野・町西遺跡 | 3. 東山古墳群 |
| 4. 妙見古墳群 (仮称) | 5. 村東山古墳 | 6. 東山・前田遺跡 |
| 7. 貝野城 | 8. 荒田神社前遺跡 | 9. 貝野前遺跡 |
| 10. 安楽田古墳群 | 11. 貝野千軒遺跡 | |
| 12. 安楽田・女夫岩遺跡、女夫岩古墳群 | | 13. 門前八幡神社裏山遺跡 |
| 14. 門前・上山遺跡 | 15. 門前東古墳群 | 16. 門前遺跡 (仮称) |
| 17. 門前西古墳群、段垣内構居 | 18. 段の城遺跡下段 | 19. 築ヶ鼻古墳群 |
| 20. 段の城遺跡上段 | 21. 妙見山砦 | 22. 入角山北古墳群 |
| 23. 牧野・与兵衛池瓦窯跡 | 24. 入角山中、南古墳群 | 25. 田野口古墳群 |
| 26. 田野口・北遺跡 | 27. 牧野古墳群/石垣山遺跡 | 28. ほおの木谷古墳群 (消滅) |
| 29. 牧野・大日遺跡 | 30. 多哥寺遺跡 | 31. 妙法寺遺跡 |
| 32. 妙法寺1号窯跡 | 33. 鍛冶屋遺跡 | 34. 鍛冶屋・下川遺跡 |
| 35. 中町北小学校遺跡 | 36. 高岸・五反田遺跡 | 37. 妙見山麓南遺跡群 (仮称) |
| 38. 高岸古墳群 | 39. 高岸・コブサン遺跡 | 40. 高岸・西山遺跡 |

第2図 中区北部平野遺跡分布図

川遺跡、多可寺遺跡、奥中・三内遺跡、糍屋・土井の後、糍屋・里の垣内遺跡などで、少量ではあるが土器が出土しており、杉原川を挟んで北部平野、中央平野において弥生時代のはじまりの痕跡が確認されている。弥生中期前半では加美区熊野部遺跡で竪穴住居址、中区安坂・津ぶら遺跡で溝が確認されている程度で、前代同様広範な遺跡の広がりは確認されておらず、遺跡数が増加するのは中期後半からで、中区ではほぼ全体に遺跡の分布がみられるようになる。これらの遺跡は、大きく2タイプに分かれ、安坂城の堀遺跡や思い出遺跡のような後期まで続く拠点的な集落と、中期後半に出現、消滅する西安田遺跡群の宮ヶ谷遺跡や長坂谷遺跡、糍屋祇園神社遺跡、糍屋・土井の畑遺跡、糍屋北縄手遺跡などがある。特に、後者のタイプである西安田遺跡群の宮ヶ谷遺跡や長坂谷遺跡は、谷奥部の緩傾斜面に広がる特異な立地にあり、『隠れ里的な集落』の様相を示している。こうした中期後半から後期にかけての遺跡のあり方から、何らかの社会的変動が影響している可能性が強いことが指摘されている。後期前半では、前代から継続する安坂城の堀遺跡や思い出遺跡のほか、安楽田・夫婦岩遺跡、鍛冶屋下川遺跡などがあるが、上述のように、前代に比べ確認されている遺跡数は減少する。また、出土する土器の様相は、中期の播磨地域の特徴を持つものから丹波・丹後系の様相を示すものへ変化する。

後期後半から庄内期にかけては再び遺跡数は増加し、豊部・井杉遺跡、三谷丁田遺跡、片瀬遺跡、保木遺跡など、加美区、八千代区においても明確な遺跡の広がりが確認されるようになる。特に、この時期の土器には、後期前半にみられた丹波・丹後系の特徴を持つものに加え、山陰系の特徴を持つものが現れる。代表的なものとしては、豊部井杉遺跡をはじめ、森本・上島原遺跡、貝野前遺跡などで出土している山陰系甗がある。これらは住居址やその周辺からの出土であり、生活様式の影響を受けているものと思われる。また、一方では、高岸・コブサン遺跡や森本・上島原遺跡からは生駒西麓産の土器が、安坂城の堀遺跡では庄内式甗が出土しており、畿内的な様相もみられ、播磨と丹波、丹後地域との接点に位置する当地域の複雑な交流の様相を示している。

古墳時代に入ると、庄内期の集落は活動を停止し、確認されている遺跡数は減少する。

前期～中期では中区思い出遺跡、鍛冶屋遺跡、安坂城の堀遺跡、西安田・宮ヶ谷遺跡、加美区豊部井杉遺跡などで、八千代区では現段階では確認されていない。このことを単純に遺跡数の減少とみるか、前代に増加した遺跡が拠点的な集落への集約とみるかは今後の課題である。

一方、地域の首長墳とみられる前方後円墳、前方後方墳は多可町内では確認されていない。前期～中期の古墳と推定されている古墳はいずれも円墳、方墳で、中区12基、加美区4基を数える。そのうち発掘調査が行われた岡山1・2号墳では竪穴式石室4基、箱式石棺1基が検出された方墳で、4世紀後半～末頃の築造と考えられる。その性格は、弥生時代的な集団墓の要素を保持しているものの、当地域の小首長墓であったとみられている。

後期にはいっても確認されている遺跡は安坂・北山田遺跡のみで、その集落實態は不明であるが、中区の城山1号墳において町内最古の横穴式石室が確認されているのをはじめ、当該期と推定される古墳は徳部野16号墳、塚ヶ谷古墳群がある。

終末期に入ると、前代までの様相は一変し、中区の北部平野を中心として遺跡数は増加する。

集落遺跡では、思い出遺跡、鍛冶屋遺跡、牧野大日遺跡、貝野前遺跡など北部平野の杉原川左岸において8世紀以降まで継続する遺跡がみられ、特に思い出遺跡では回廊状の掘立柱建物や丸太割り貫き井戸などが検出され、円面硯や機内産模倣土師器などが出土しており、官衙的色彩が強い様相がみられる。また、思い出遺跡西側には、7世紀後葉の創建と考えられる古代寺院跡、多哥寺遺跡が位置する。加美区、八千代区においては当該機の集落实態は不明であるが、中区北部平野が当地域の中心的な役割を担っていたと思われる。

一方、中区北部平野の北にそびえる妙見山山麓においては、18支群、200基以上の横穴式石室を主体とする妙見山麓古墳群が築かれる。中でも、6世紀末～7世紀後葉に築造された東山古墳群は、直径15m以上の墳丘をもつ古墳16基以上で構成されており、北播磨地域の首長クラスの高墳群であると考えられている。特に、古墳群築造の嚆矢とされる東山1号墳は全長12.5m以上の石室を備え、県内でも有数の石室規模を有している。また各古墳からは、土器類、馬具、武具などの金属製品、玉類のほか、須恵質家形陶棺など、多様な遺物が出土している。これら東山古墳群以外にも、妙見山麓古墳群中には、墳丘や石室規模が大きく、首長墳に追隨する規模を持つ古墳を含む入角古墳群北・中・南古墳群、築ヶ鼻古墳群などがある。

上述の東山古墳群に続く最後の首長墳とされる古墳は、7世紀後葉に位置づけられる村東山古墳で、工事中の不時発見のため、詳細は不明であるが、石室内部から凝灰岩製の家形石棺が発見されている。この時期は平野部における多哥寺の創建と重なることから、村東山古墳の被葬者と多哥寺創建者との密接な関係が推察されている。

こうした、中区を中心とした古墳時代の集落や古墳のあり方とは対照的ではあるが、加美区、八千代区においても、数期の古墳・古墳群が確認されており、八千代区の野口古墳、ぬか塚古墳、加美区の奥豊部古墳群、三谷古墳群などがある。このうち、発掘調査が行われた奥豊部古墳群の奥豊部1号墳では、墳丘に外護列石を巡らし、全長9.4mの横穴式石室をもつ6世紀末～7世紀前半頃の古墳であることが確認されている。

律令期には、中区北部平野に古代寺院である多哥寺や官衙的色彩の強い思い出遺跡、牧野大日遺跡などが位置し、当地域が古代多可郡の中心的役割を担っていたものと考えられる。また、加美区豊部井杉遺跡では、円面硯や緑釉陶器、数棟の掘立柱建物跡が検出されており、里（郷）を治める末端行政機関の可能性も考えられている。

平安時代後期～中世期にかけては、若干の時期的な増減はあるものの、遺跡数は増加し、ほぼ現在の集落景観の原型が形成されてくる。特に、山間部である当地域で特徴的なものとしては、山岳・山林寺院と山城があげられる。

山岳寺院では、そのはじまりが古代にさかのぼると見られる円満寺遺跡、円満寺東の谷遺跡のほか、坂本・観音谷遺跡、岩座神神光寺遺跡、金蔵寺遺跡では発掘調査により、大規模な僧坊跡や多量の遺物が検出されている。また、未発掘ではあるが、中区奥中・観音寺跡遺跡、八千代区

の道脇寺跡、極楽寺跡、楊柳寺跡、加美区の西脇・西光寺跡など、多数の山岳・山林寺院推定地、遺物散布地が存在している。中世期におけるこうした多数の山林・山岳寺院の存在については、今後、各々の役割、ネットワークの存在等を含め検討課題である。

一方、山城では、赤松家臣在田氏の本拠となった八千代区の野間山城・光竜寺山城を中心とする周辺の城郭群をはじめ、中区では段の城、安楽田構居、貝野城、霞ヶ城、加美区では笛草城、門村構居、金蔵山城など、規模の大小はあるが、多くの城館跡が存在する。文献資料が少なく詳細については不明な部分が多いものの、中区段ノ城遺跡においては部分的な発掘調査が行われ、曲輪の大規模な造成や建物跡のほか、生活痕跡を示す遺物が出土しており、山城の機能を考える上で注目される。

ところで、多可町周辺は、但馬南部から播磨東北部にかけてのびる生野鉦床帯がひろがっており、周辺には多くの鉦山跡が分布し、現在でも主に近世～近代にかけての鉦山関連の生産遺跡がみられる。こうした産銅の歴史がいつからはじまったかについては現在不明であるが、加美区多田上野遺跡、中区石垣山遺跡など調査では少なくとも中世後半期～近世初頭にさかのぼる精錬等の生産活動の痕跡が確認されている。

3. 調査に至る経緯、調査体制

平成 18 年度中町東線道路建設事業に先立つ確認調査によって、工事予定区域内の約 600 m²について、上層と下層の 2 面の遺構面の存在が確認され、記録保存のための本発掘調査を行った。調査は、土置き場確保のため、調査区内を便宜的に 2 区にわけ、各区ごとに調査を行った。

【調査面積】 約 600 m²（上層、下層遺構の延べ調査面積 1200 m²）

【本発掘調査期間】 平成 18 年 8 月 22 日～平成 18 年 12 月 7 日

【整理・報告作業】 平成 19 年度

【調査体制】

〈調査主体〉 多可町教育委員会

〈発掘整理作業〉 発掘・整理担当 安平勝利 宮原文隆

調査補助員 早崎喜代美 松田優子 藤田侑子

〈発掘・整理作業従事者〉

内橋志郎 神月さやか 越川芳明 杉本正蔵 坪内梅吉 中山林次 藤井豊次 藤本敏隆

吉田麻美 吉田衣里 吉田数男

〈調査・整理作業協力者、協力期間〉（敬称略）

岸本一郎 中島雄二 森下大輔 渡部昇 山本三郎 藤本嘉信

兵庫県教育委員会文化財室 多可町役場建設課 田野口地区

西脇市・多可郡広域シルバー人材センター多可町支部 桑村建設㈱

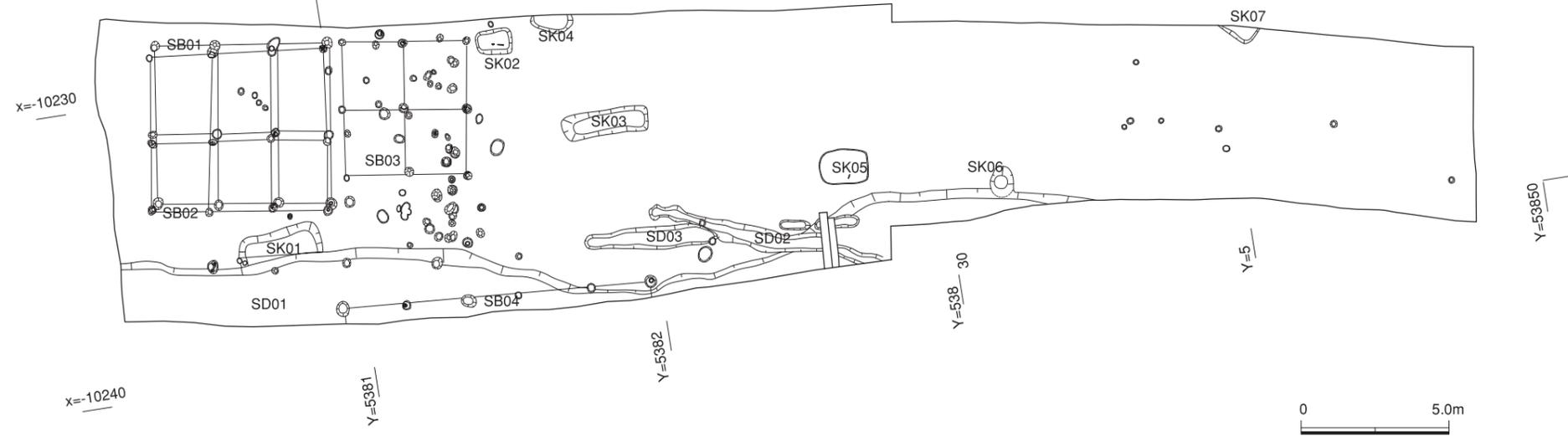


第3図 調査位置図-1

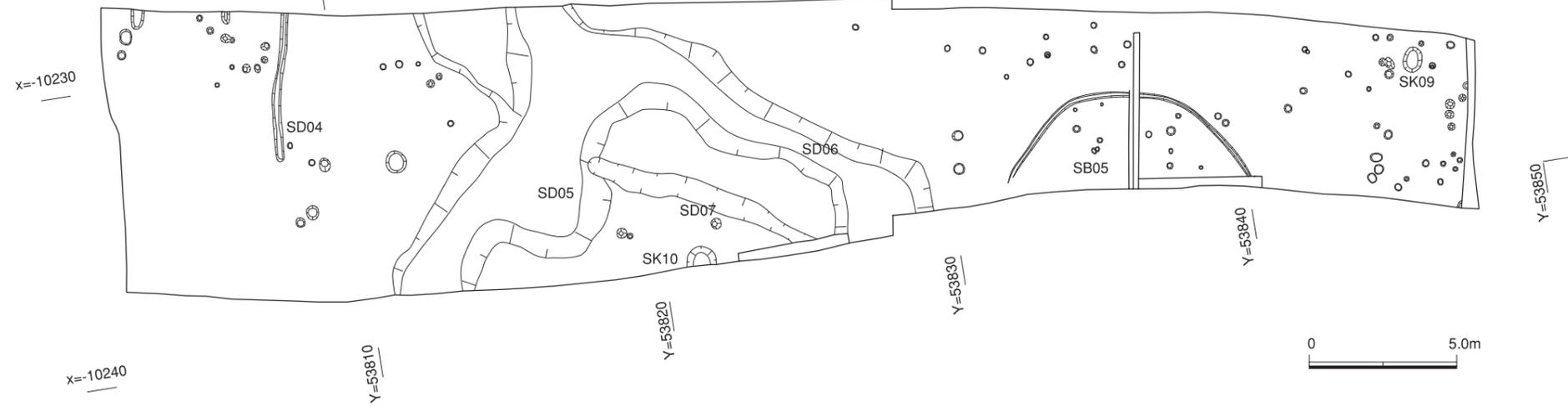


第4図 調査位置図-2

【田野口・笹町遺跡第6区 上層遺構配置図】



【田野口・笹町遺跡第6区 下層遺構配置図】



第5図 田野口・笹町遺跡第6区遺構配置図

Ⅱ 発掘調査の概要

調査は、土置き場確保のため、調査区内を便宜的に2区に分け、各区ごとに上層遺構面、下層遺構面の順で行った。ここでは2つの区を分けることなく、上層遺構面、下層遺構面の順で主な遺構、遺物について概観する。

基本層序は耕土－近世期遺構の谷川の氾濫等による砂礫層及びまちならし層－砂質系灰褐色土を中心とする中世期遺物包含層－暗茶褐色土（上層遺構面）－黒褐色土（下層遺構面）の順で堆積しており、上層遺構面は地表より約50 cm、下層遺構面は上層遺構面より約20 cm下で検出した。

1. 上層遺構面

検出された遺構には掘立柱建物(SB01～04)、溝(SD01～03)、土坑(SK01～07)、ピット群(105基)がある。また、包含層や遺構埋土には弥生時代後期から鎌倉時代後半の遺物が多く含まれる。

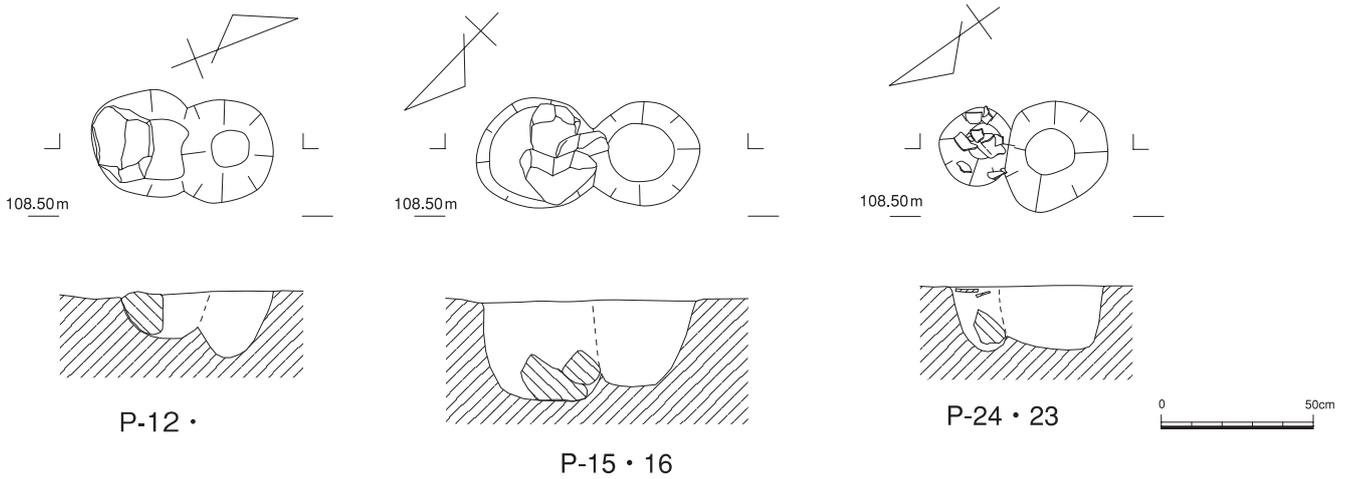
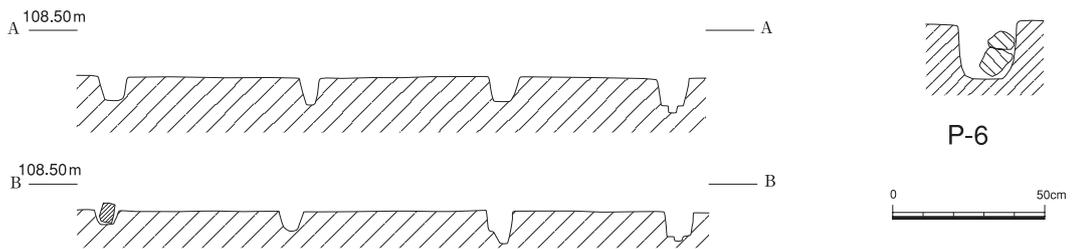
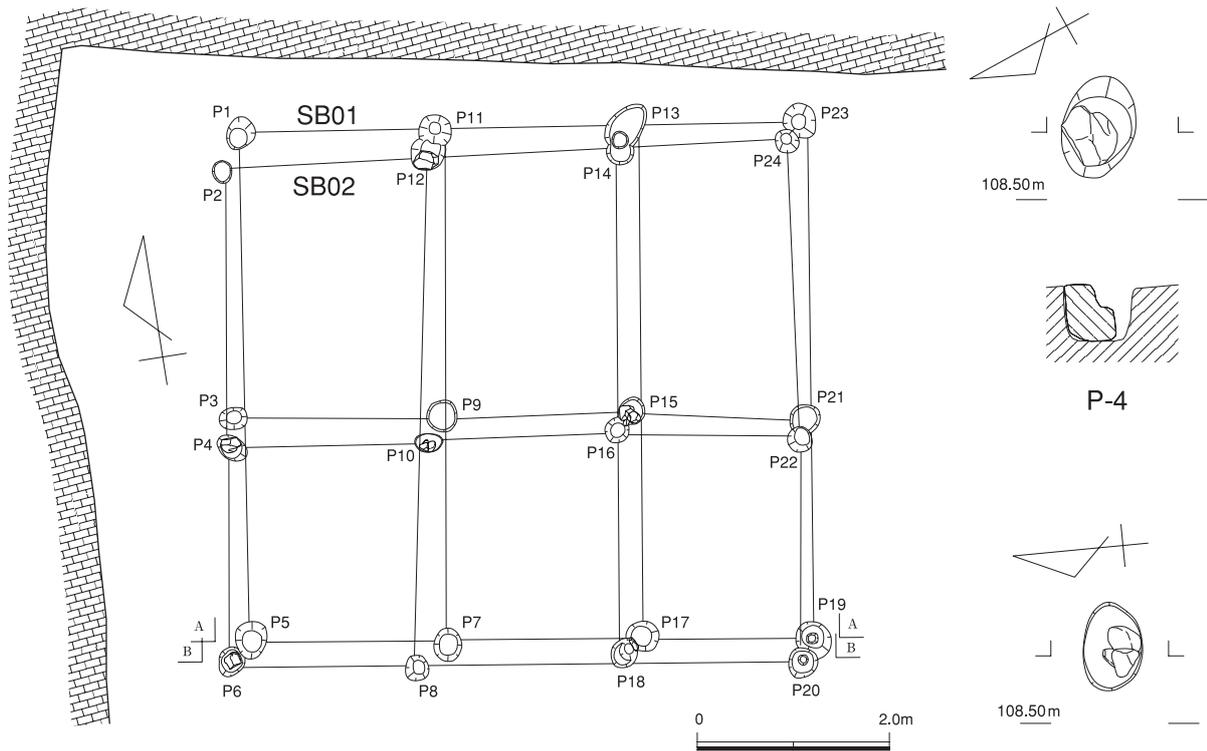
・掘立柱建物 (SB01・02)

調査区西端のほぼ同じ位置に重複してたつ総柱掘立柱建物。北側は調査区外へ広がる可能性があり、正確な規模は不明であるがいずれも2間(南北)×3間(東西)以上の規模で、検出規模はSB01が約5.8×5.4 m、SB02が5.6×6.0 mをはかる。

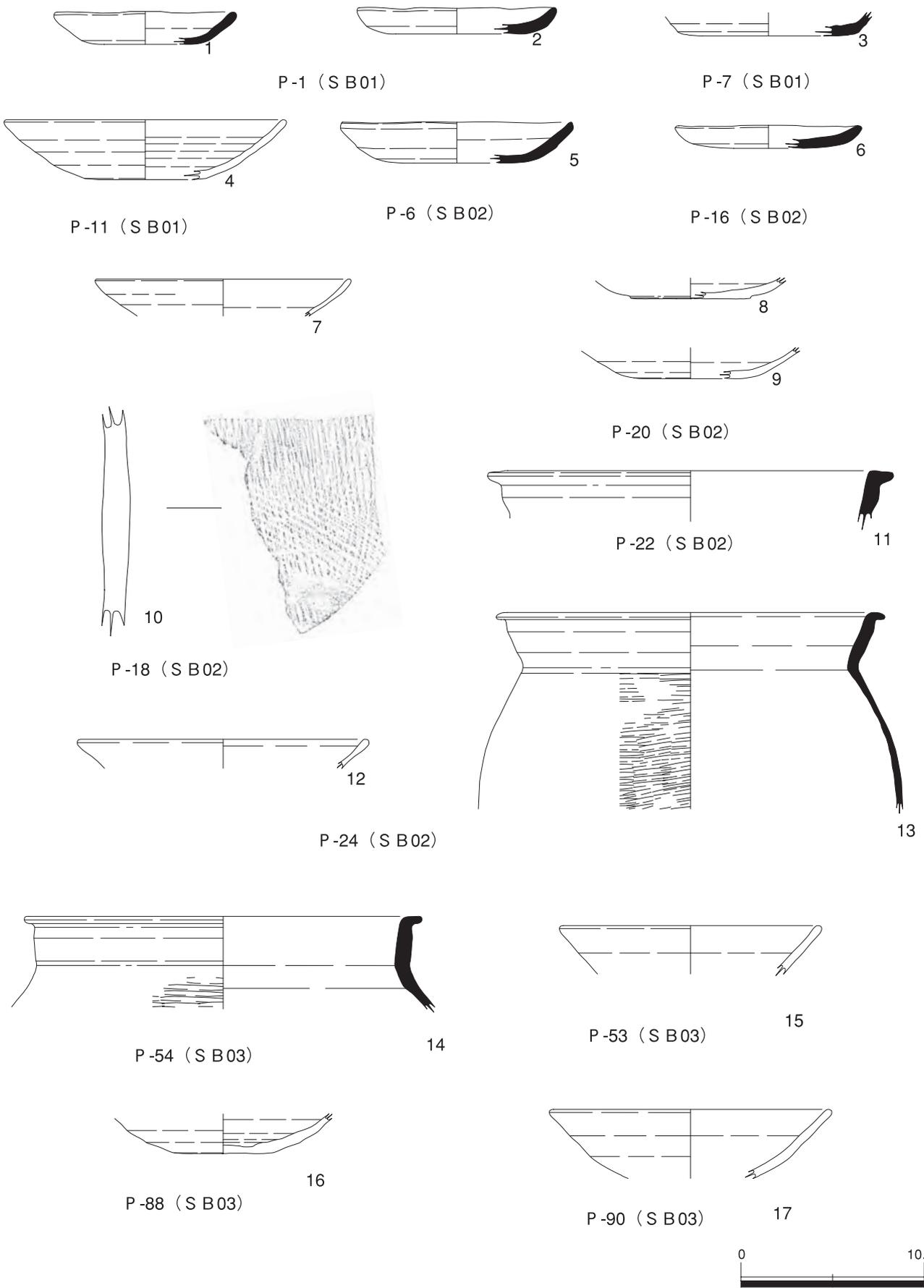
いずれも、南北柱間は南側柱間約2.2～2.4 m－北側柱間3.0 mをはかり、北側柱間が長くとられ、東西柱間はほぼ等間隔(約2.0 m)となり、やや不規則な配列となる。柱穴の切り合い関係から、SB01の柱穴の中にはSB02の柱穴にきられているものがあることから、SB02はSB01の建替えを示すものと考えられる。それぞれの柱穴は径25～35 cm、深さ20～35 cmをはかり2段掘りの痕跡を残すものもある。埋土内からは、土師器、須恵器片が出土しているが図化できたものは少ない。(1・2・5・6)は土師器小・中皿でいずれも口縁部ヨコナデ、底部外面未調整の手捏成形による。(3)は碗の底部で回転糸切による。(4・7～9)は須恵器山茶碗で、体部が湾曲気味に立ち上がり、底部との境は不明瞭であるが、内面の弱い見込み部や、低い高台が残るものがある。遺構の切りあい関係はSB01よりSB02が新しい時期であることを示すが、柱穴埋土出土遺物からは明確な時期差はみられず、いずれも12世紀後半の時期に比定される。

・掘立柱建物 (SB03)

SB01・02の東側に立つ2×2間(4.0×4.5 m)以上の総柱掘立柱建物で柱間はいずれも約2.2 mをはかり、主軸はSB01・02にそろおう。それぞれの柱穴は径21～30 cm、深さ20～30 cmをはかる。柱穴内からは、土師器塼、須恵器山茶碗が出土しており12世紀後半の時期が比定さ

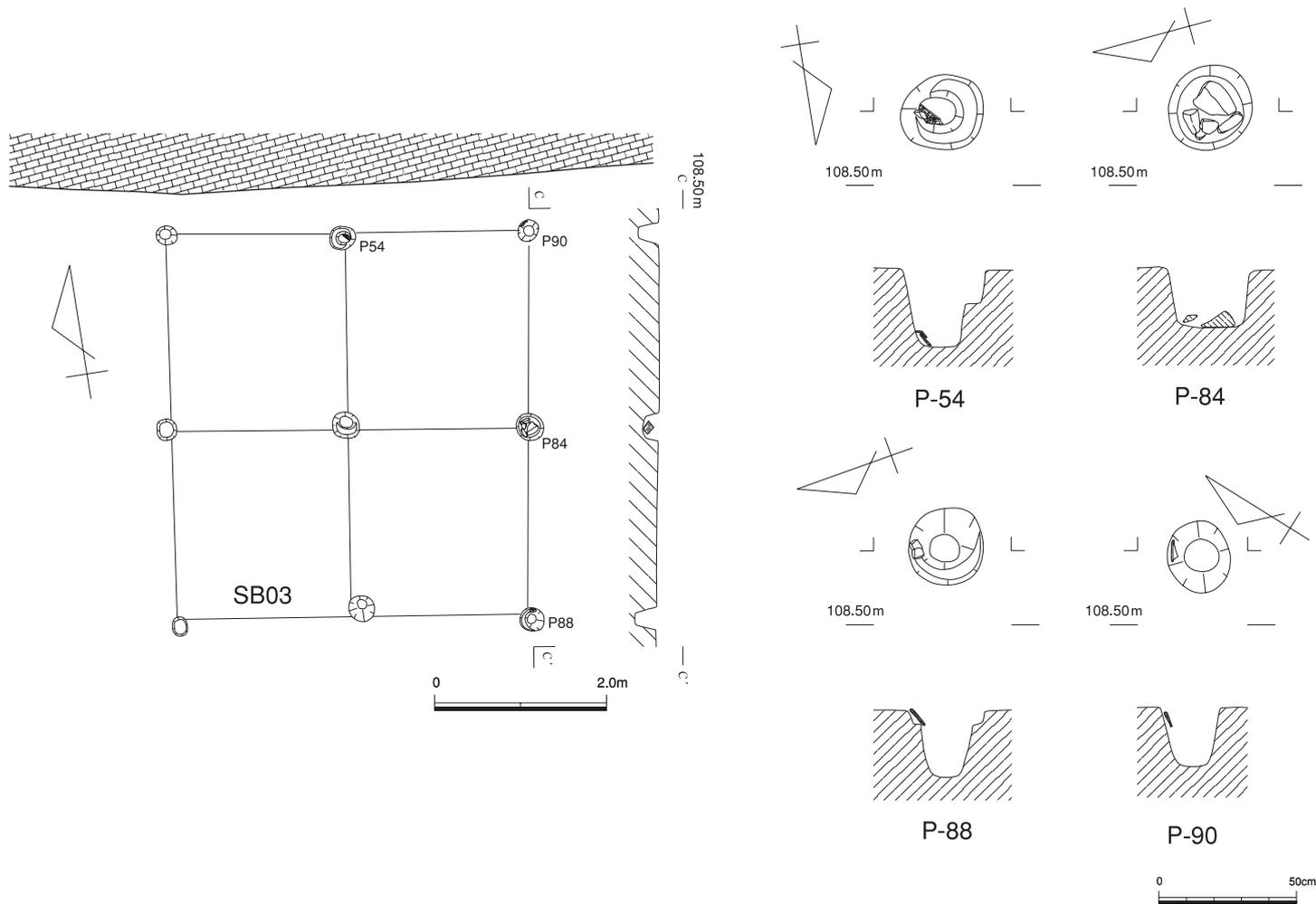


第6図 掘立柱建物01・02 (SB01・02)

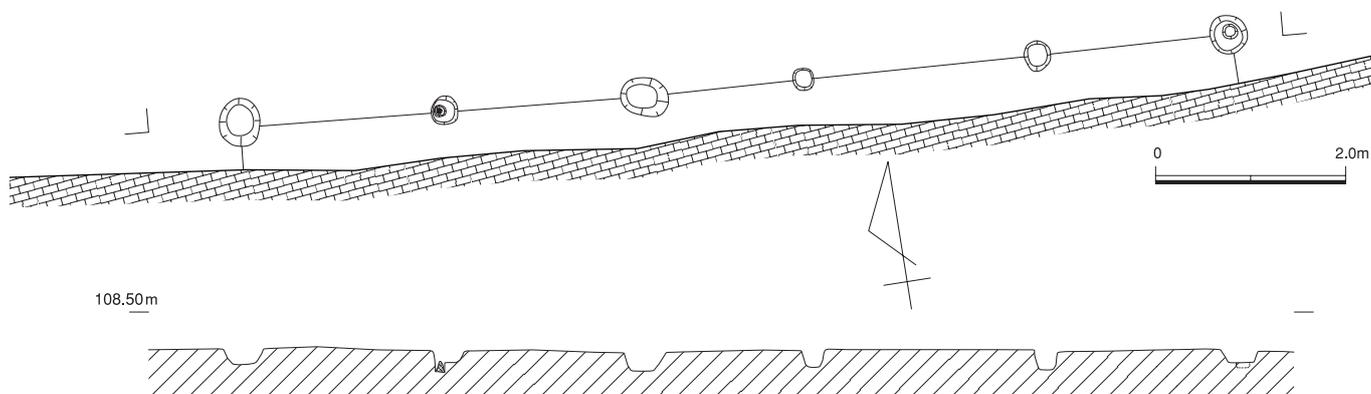


第7図 掘立柱建物01・02・03出土遺物

れる。SB01・02 には時期的に差がなく、主軸を同じくすることから、関係する建物であると
考えられる。



第8図 掘立柱建物03 (SB03)



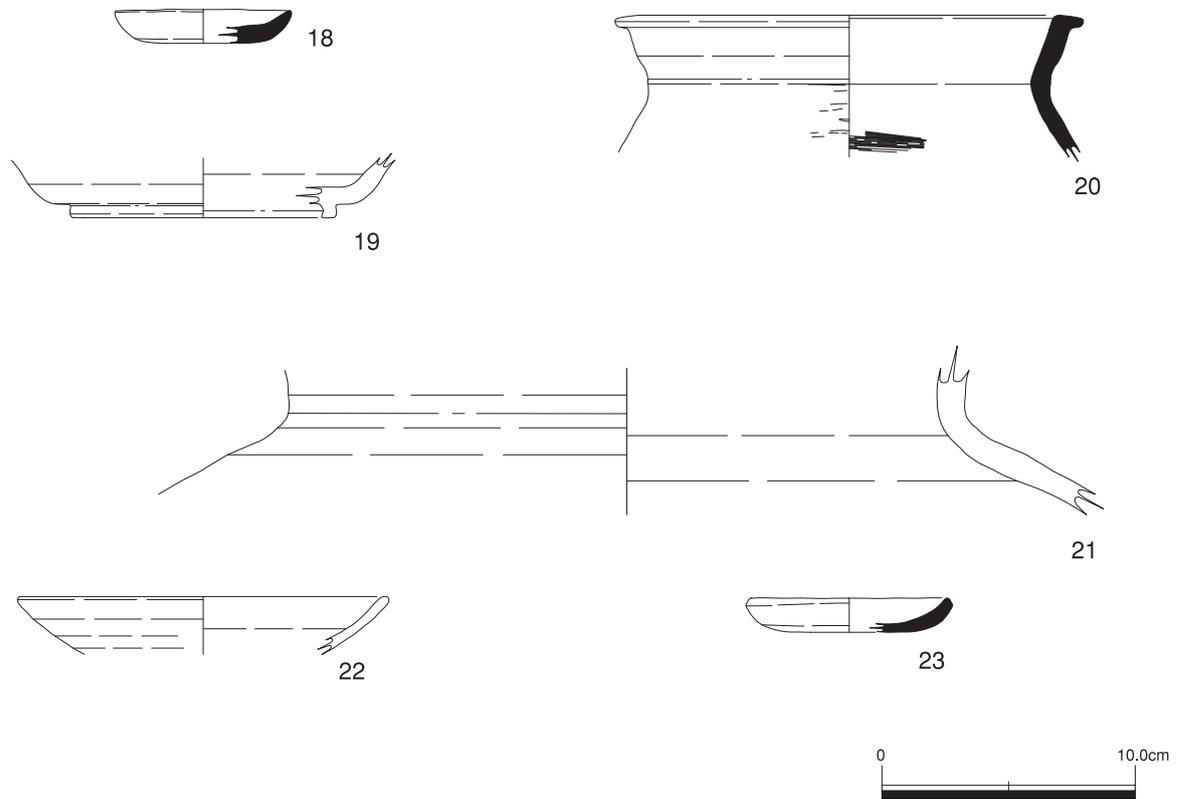
第9図 掘立柱建物04 (SB04)

・掘立柱建物 (SB04)

調査区南端において、5間(約10.5m)の東西に並ぶ柱穴列を検出した。柱穴は径21～39cm、深さ15～18cmをはかる。北側には対応する柱穴はなく、南の調査区外にのびるものと思われる。柱穴内からの遺物は少なく、土師器小皿(18)と、平安時代前半の須恵器坏片(19)のみがかるうじて図化できた。P-28には残存長約15cm、残存径約9.7cmの柱根が依存していた。柱穴埋土出土遺物からの時期比定は難しいが、遺構の切りあい関係ではSD01に切られており、新旧関係にある。

・その他の柱穴出土遺物

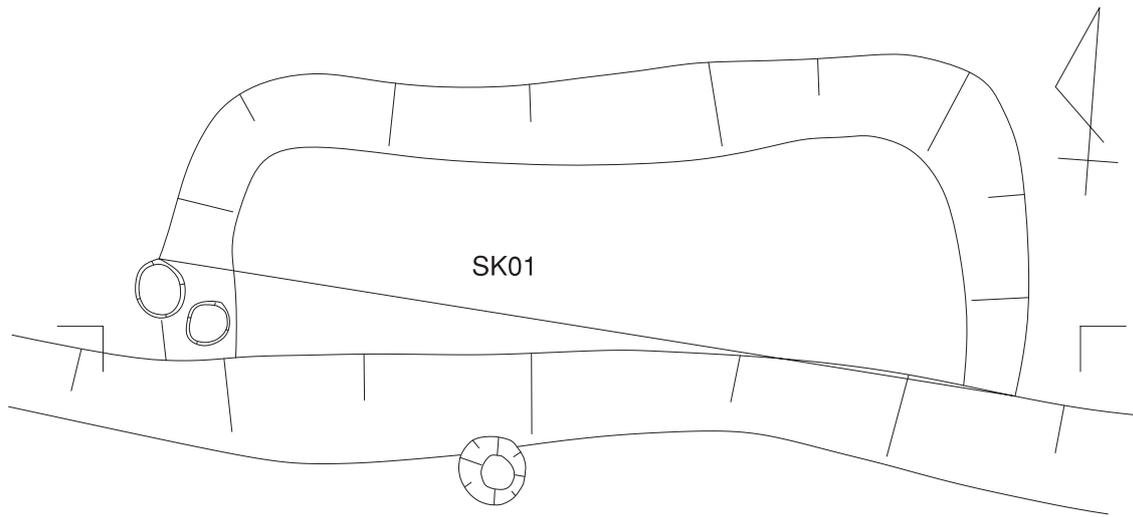
上層遺構面では、掘立柱建物を構成する柱穴を含め、104基の柱穴が検出されたが、埋土出土の遺物は小片が多く、図化できるものは少ない。



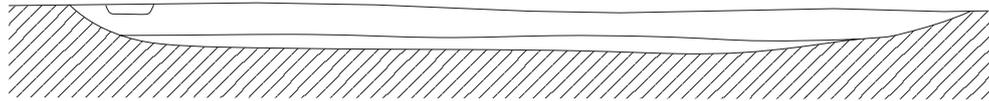
第10図 掘立柱建物04・その他柱穴出土遺物
(18-P26、19-P49、20・21-P44、22-P69、23-P80)

・土坑01 (SK01)

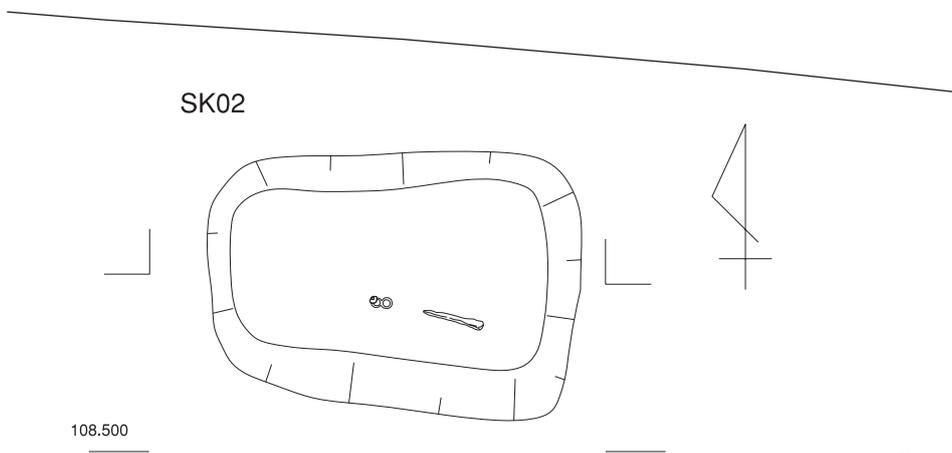
SD01に切られて検出された土坑。東西に長軸を持つ隅丸長方形で、長径約2.8m、検出幅は0.9m、深さ14.5cmを測る。土坑埋土からは須恵器、土師器小片や下層遺構面の弥生土器小片が出土しているが、図化に耐えるものはない。



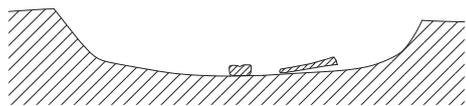
108.500m



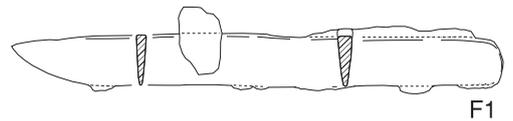
第11図 土坑01 (SK01)



108.500



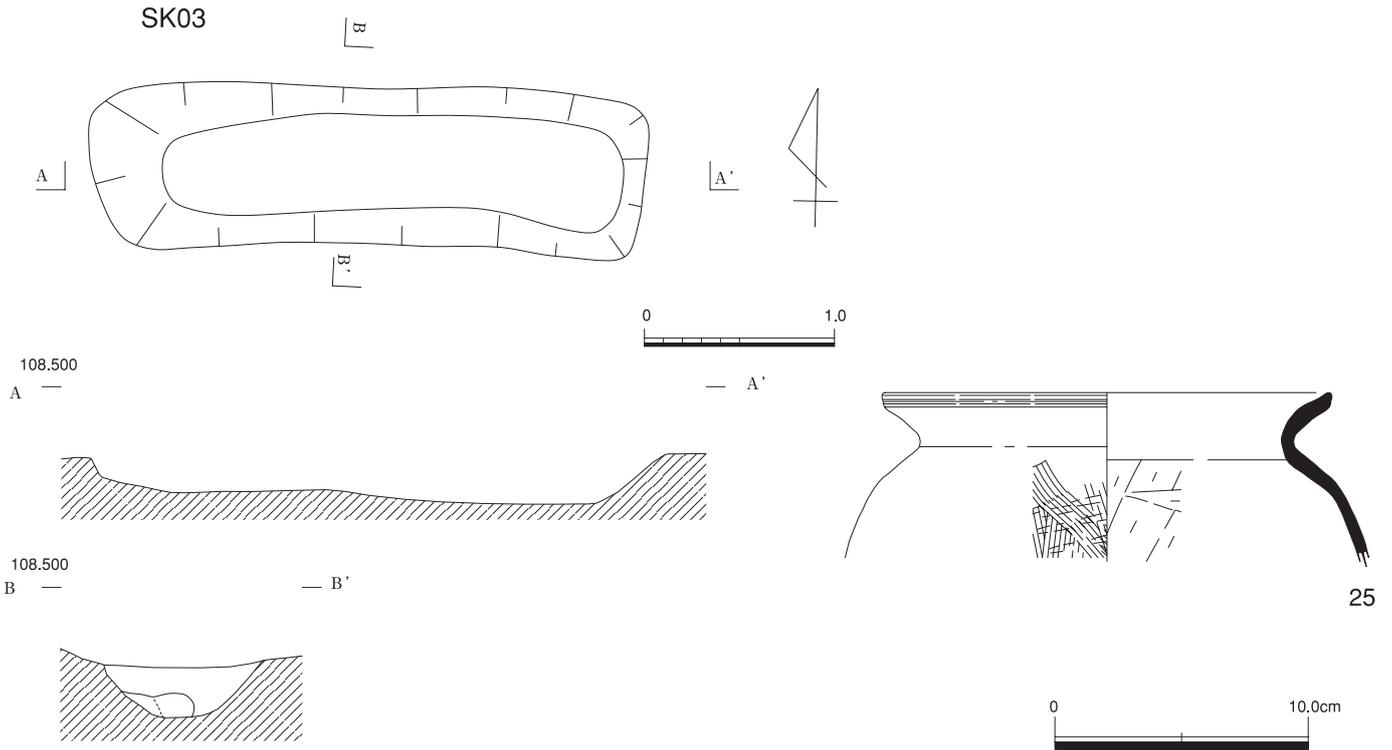
24



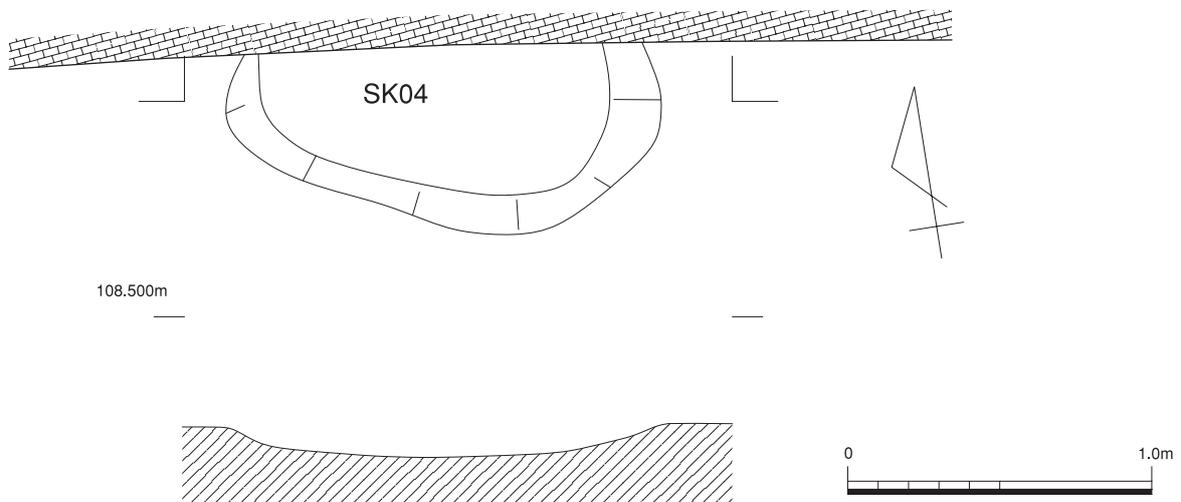
F1



第12図 土坑02 (SK02) 及び出土遺物



第13図 土坑03 (SK03) 及び出土遺物



第14図 土坑04 (SK04)

・土坑02 (SK02)

SB03 東側において、東西に主軸を持つ隅丸長方形を呈し、長径約 1.22 m、短径約 85 cm、深さ約 22 cmをはかる土坑。埋土は上層が黒褐色土、下層に砂質系の黒褐色土が堆積している。

埋土からは、12 世紀後半の須恵器、土師器の小片 (図化不可) のほか、土坑床面より小型の瓦質系製品 (24) と銅銭 2 枚、刀子 (F1) が出土している。(24) は 2 つの小坏が結合したもので、口径は 3.0 cm、3.4 cmをはかる。表面は燻した状態で瓦質状を呈し、ヘラミガキが施される。

管見では出土例を見ず、用途は不明であるが、出土状況では銅銭が口縁部にのるかたちで出土している。銅銭は2枚出土しているが腐食が進んでおり、銭種は不明。刀子は全長19.3cm、刃幅2.2cmをはかる。出土遺物等から墓である可能性が考えられるが、木棺墓の痕跡等は検出できず、墓にしては土坑の規模が小さい。(24)の出土例がないため、明確な時期は不明であるが、埋土出土遺物等より12世紀後半に近い時期が考えらる。

・土坑03 (SK03)

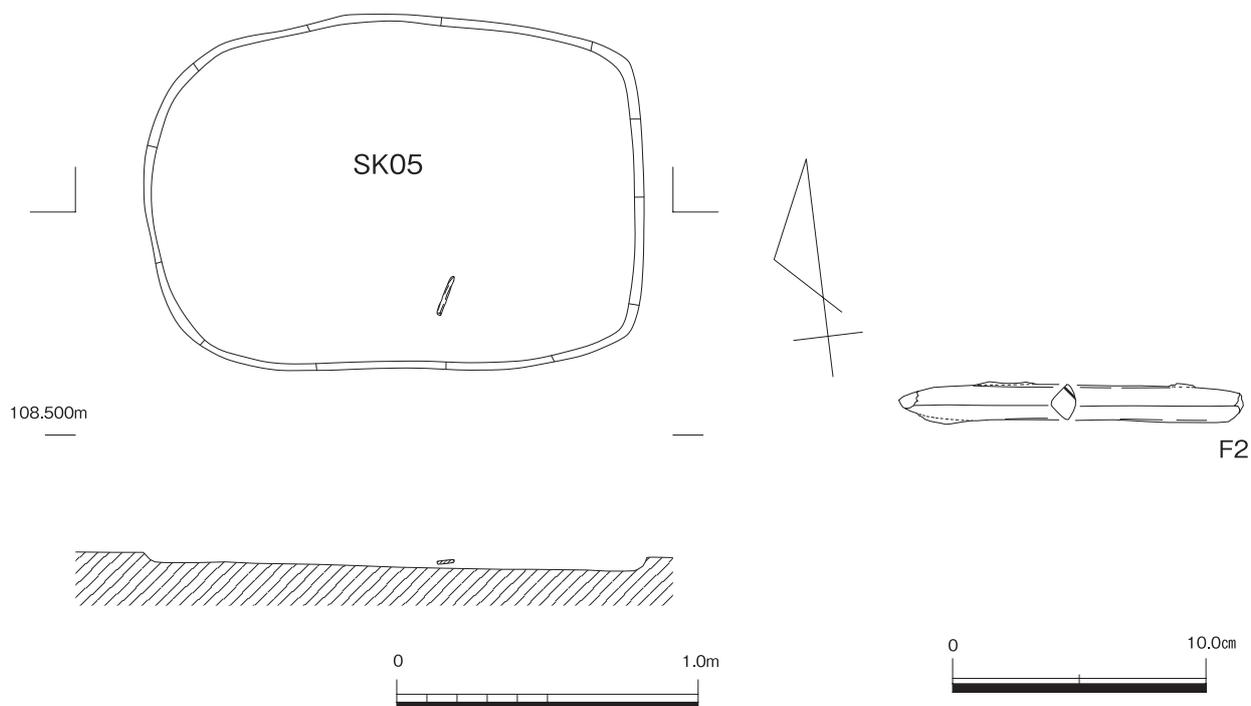
東西に主軸を持ち、径約2.9m、短径約82cm、深さ約27cmをはかる長方形の土坑。埋土からは須恵器山茶碗の小片等(図化不可)のほか、下層遺構の弥生後期の土器が出土している。

・土坑04 (SK04)

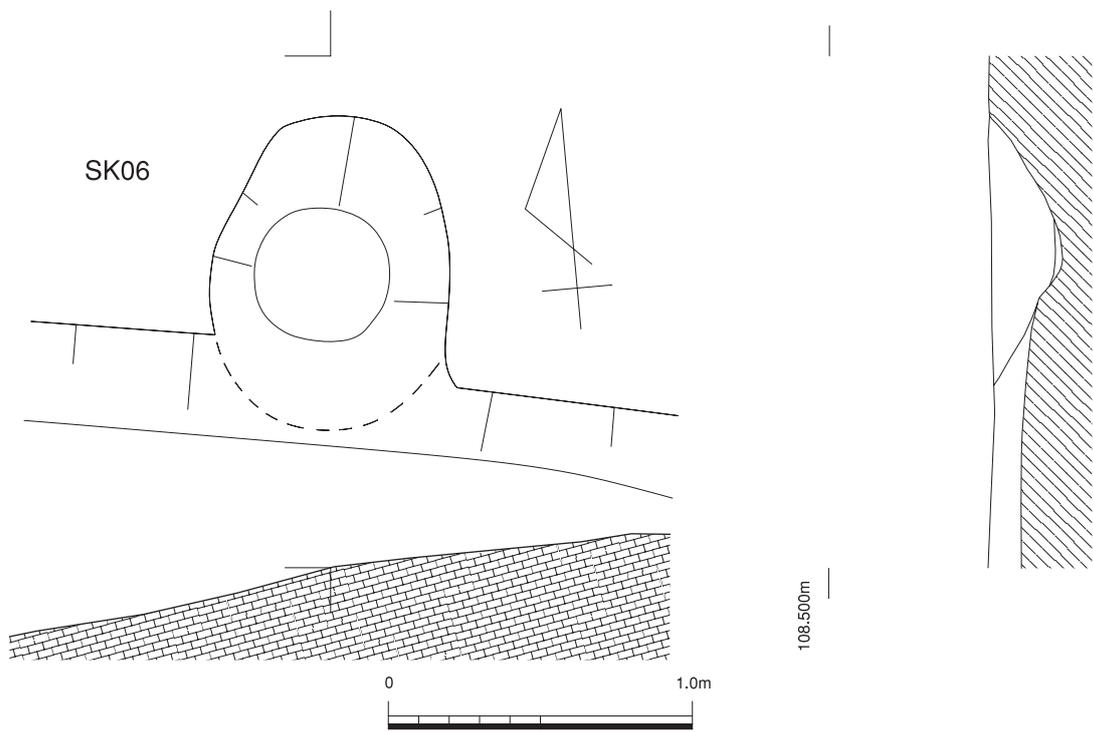
SK02東側において、半分が調査区にかかるかたちで検出した。長径約1.4m、深さ約11cmをはかる楕円形を呈する。埋土から須恵器、土師器小片が出土しているが、図化できるものはない。

・土坑05 (SK05)

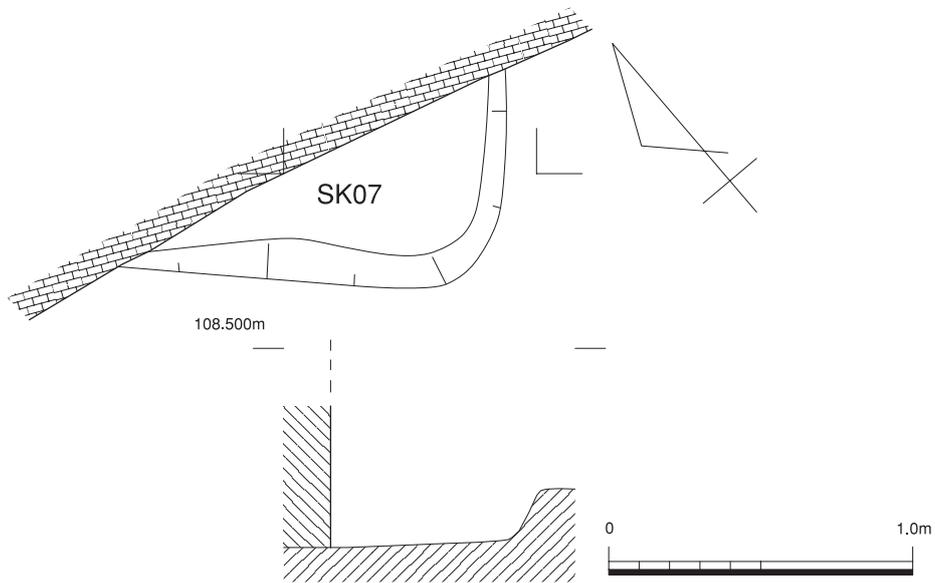
東西に主軸を持つ、長径1.6m、短径1.1mをはかる隅丸長方形の土坑。深さ約5cmで、上面がかなり削平を受けているものと思われる。埋土より不明鉄製品(F2)が出土している。(F2)は丸みを持った断面三角形で、現存長13.6cm、厚さ0.9cmをはかる。



第15図 土坑05 (SK05) 及び出土遺物



第16図 土坑06 (SK06)



第17図 土坑07 (SK07)

・土坑06 (SK06)

SD01 を切って掘り込まれた、径 77 ～ 80 cm、深さ約 23 cmをはかる楕円形土坑。上層には黒褐色粘質土、下層には薄い褐灰色砂礫層が堆積している。埋土からは土師器小片が出土しているが図化できるものはない。

・土坑07 (SK07)

調査区北側に一部がかかるかたちで検出した土坑。深さは約18 cmをはかる。埋土からは土師器小片が出土しているが図化できるものはない。

・溝01 (SD01)

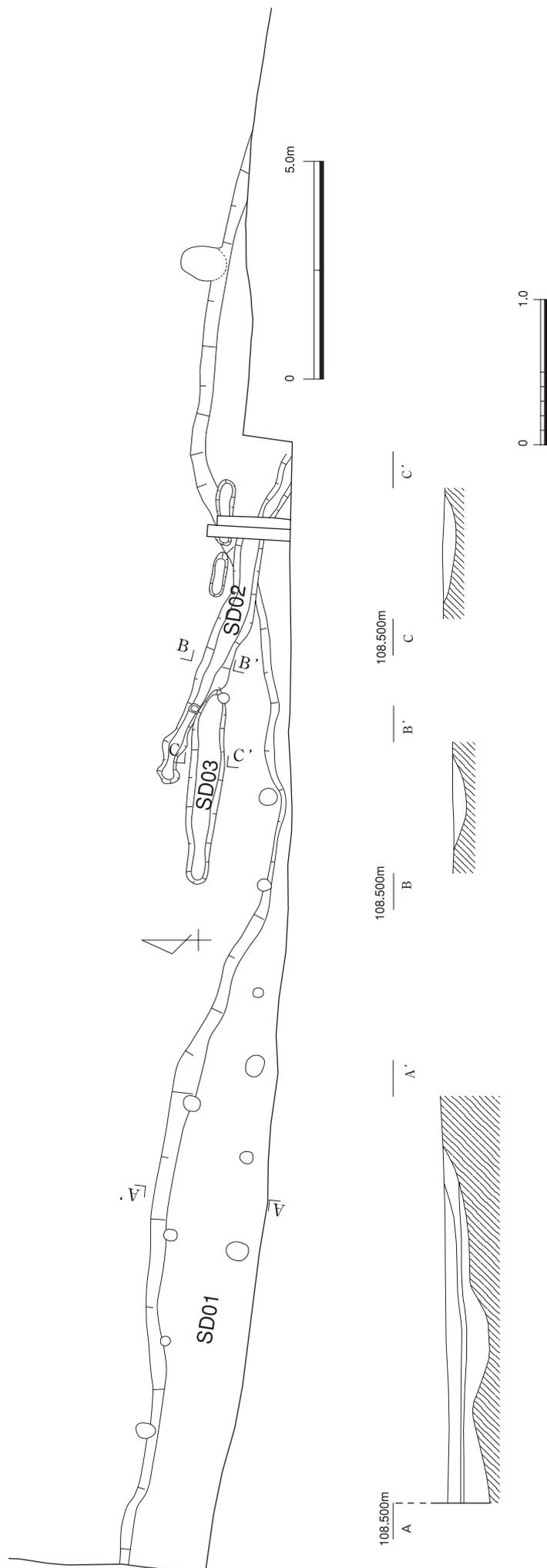
調査区南端にかかるかたちで東西に蛇行しながら流れる溝。検出長は約32.6 m、深さは約30 cmをはかる。埋土には上層に砂質系、下層にシルト質系の黒褐色土が堆積しており、古代～中世期にかけての遺物のほか、下層遺構の弥生土器片が出土しているが、小片が多く図化できたものは少ない。

・溝02 (SD02)

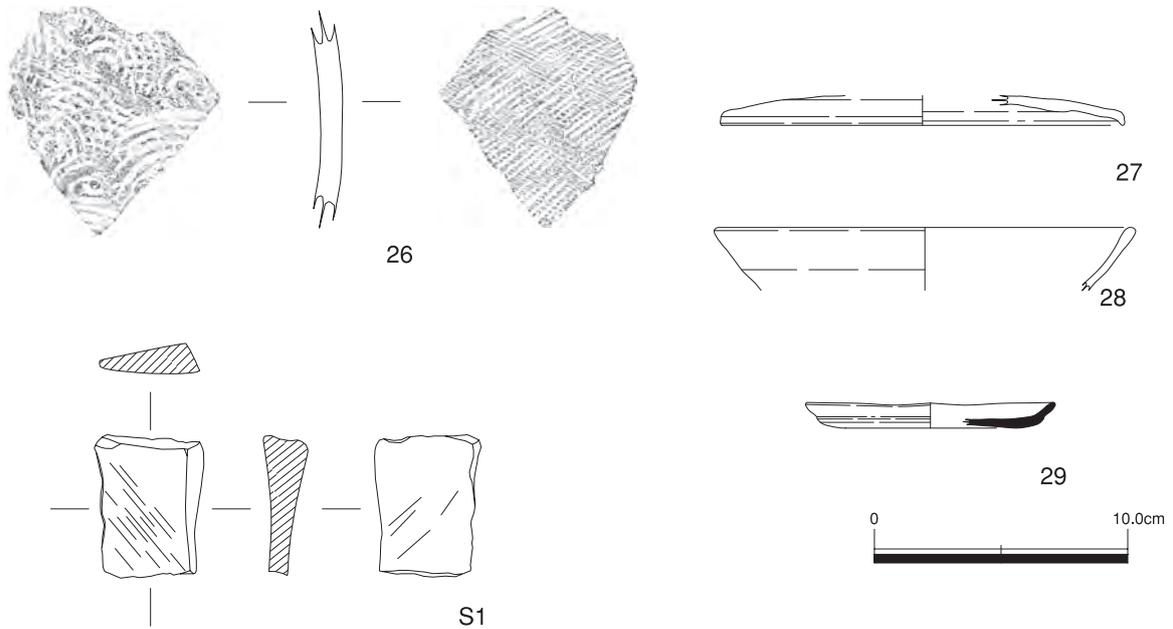
SD01 を切って北西～南東方向に流れる溝。幅約65 cm～70 cm、深さ約9 cmをはかり、延長約8 mを検出した。削平によるものと思われるが、北西端は調査区中央で終わり、南東側は調査区外へのびる。

・溝03 (SD03)

上部がかなり削平を受けており、遺存状態は良くないが、SD02 に切られた形で検出され、東西方向に流れる溝。幅は残りの良い部分で、約80 cm、深さ



第18図 溝01・02・03 (SD01・02・03)



第19図 溝01出土遺物

約8cmをはかる。埋土からは、須恵器、土師器小片が出土しているが図化できるものはない。

・その他の出土遺物

遺構面上層の包含層である褐灰色土中から出土した遺物である。弥生時代後期～15世紀代とかなり幅のある時期の遺物が含まれる。

7世紀後半に遡るものは少ないが、傘型の器形を呈し天井部回転ヘラケズリを施した(30)、底部外面ヘラ切りによる坏Ghと思われる(37)、連続列点文を胴部屈曲部に施した短頸もしくは細頸壺体部(64)がある。

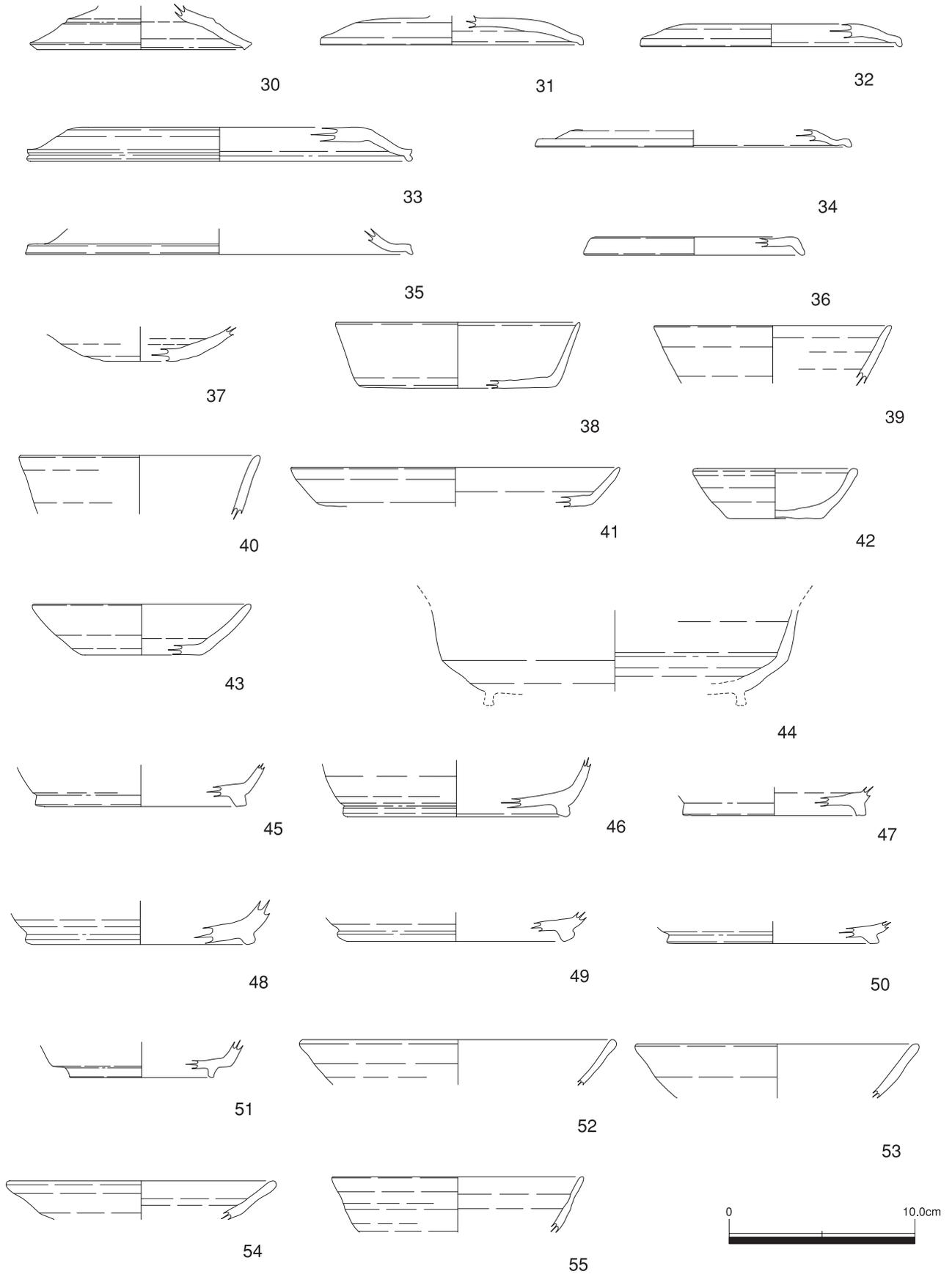
(31)～(51)は8世紀後半～9世紀前半を中心とする。蓋は、扁平な器高で、回転ヘラケズリを施した天上部から口縁部にかけて屈曲する。坏・碗は、直線的にのびる口縁部をもつ坏A(38～41)や、底部外側付近に高台をもつ坏B、底部回転糸切りを施す小碗(42、43)があるほか、稜碗の腰部屈曲部(0064)がある。

(52)～(63)、(65)～(67)は、中世東播系須恵器。

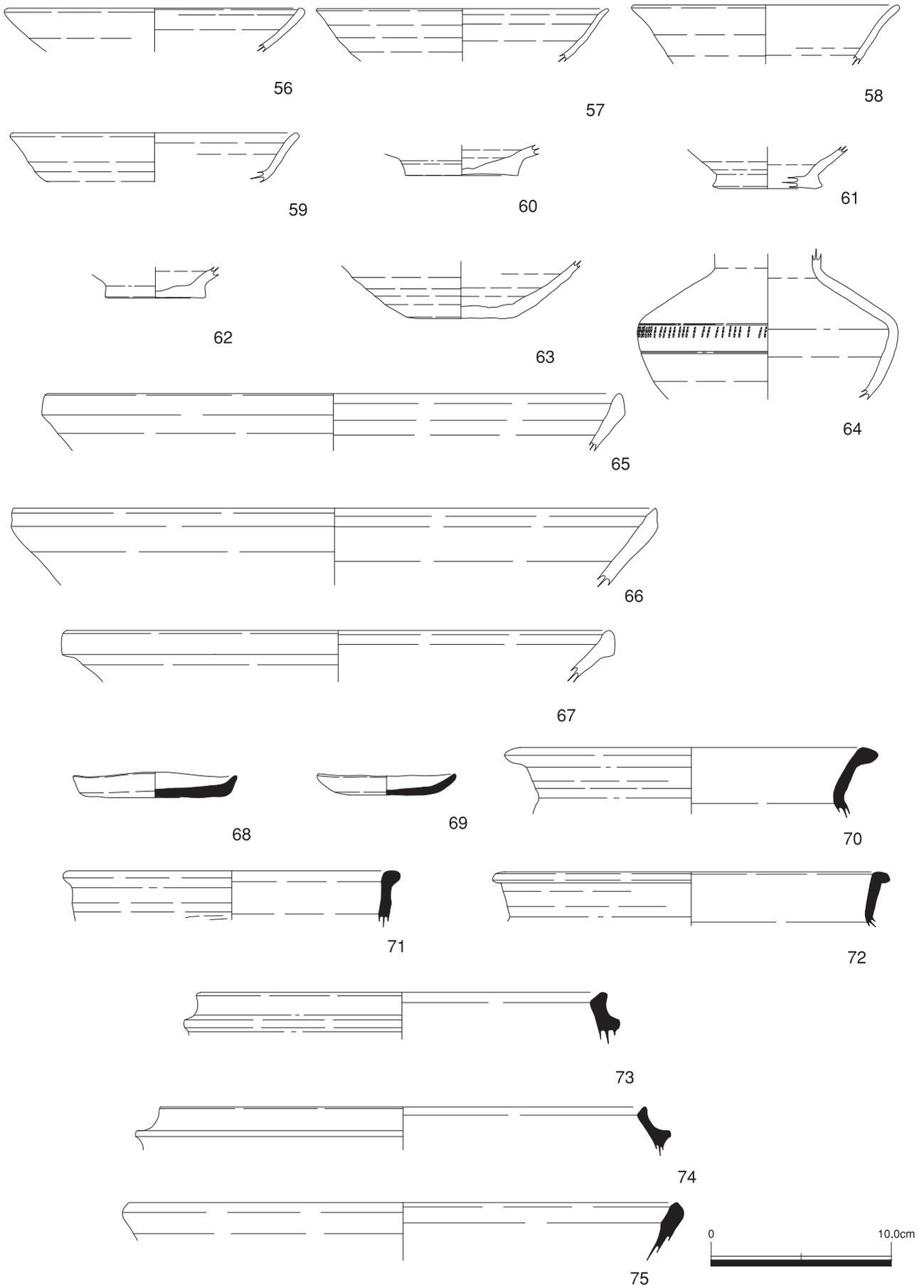
(52)～(63)は山茶碗で、しっかりした平高台部を持ち、側面まで調整を施した(60)、高台側面未調整の(61・62)、高台部が消滅した(63)がある。(65)～(67)は鉢で、口縁端部を上方もしくは上下に若干肥厚させる。これらは10世紀後半～12世紀代のものが含まれている。(68)・(69)は土師器小皿で口縁部ナデ、底部未調整の手捏ねによるもの。

(70)～(75)は土塼で、口縁端部を外側に肥厚し上方に面を持つ播但型(70～72)、鏝部分が退化した羽釜型(73・74)、口縁端部を内側に肥厚した鉄鍋型(75)がある。

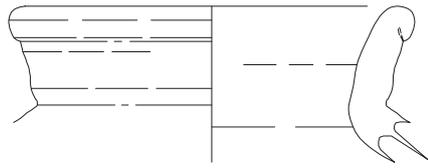
播丹型は12世紀末～13世紀代、羽釜型、鉄鍋型は15世紀代に比定される。



第20図 上層包含層出土遺物①



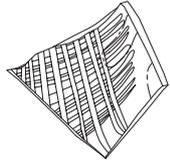
第21図 上層包含層出土遺物②



76



77



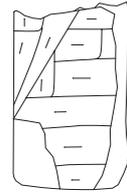
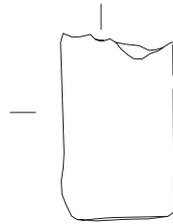
80



78

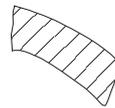


79



K1

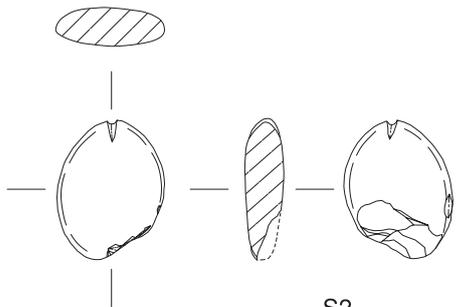
K2



K3



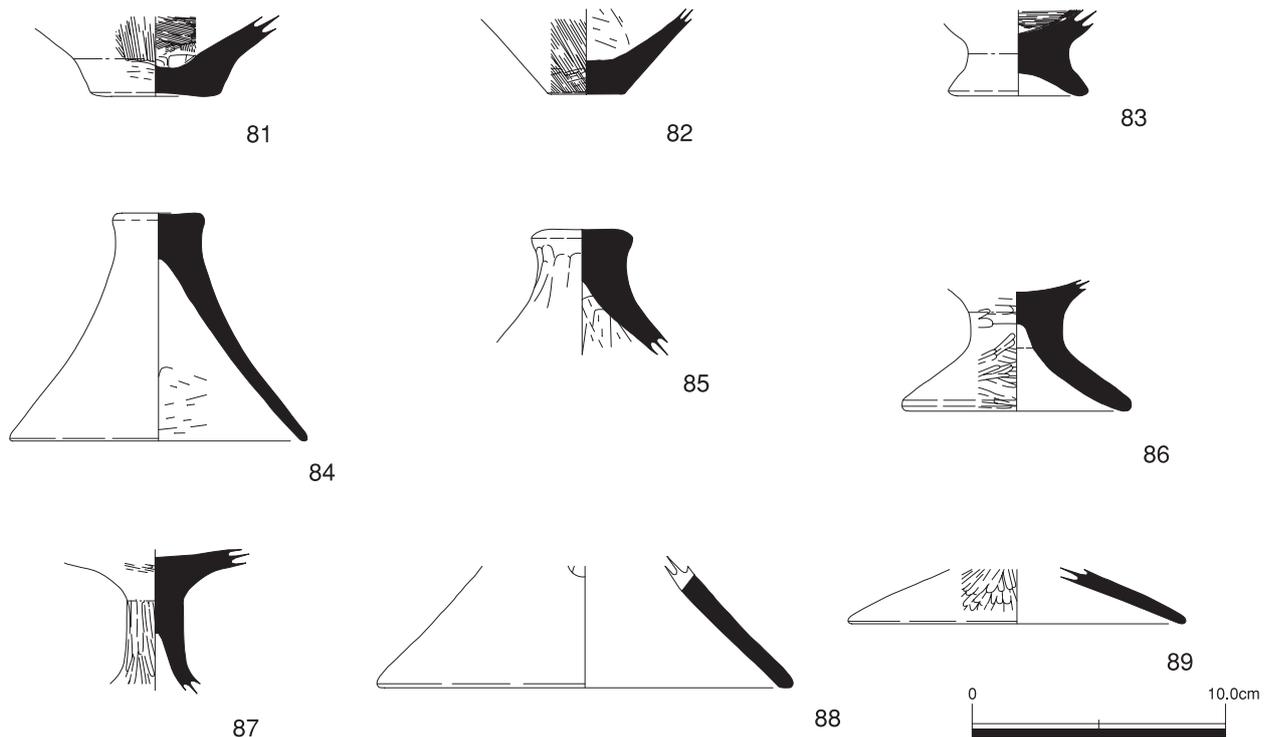
K4



S2



第22图 上層包含層出土遺物③



第23図 上層包含層出土遺物④

(76) ~ (78) は中世陶器。(76) は、口縁端部を小さく折り曲げて玉縁状にした備前焼壺で、14世紀代(備前Ⅲ期)にあたる。(77) は丹波焼播鉢で、若干目の詰まったヘラ描卸目を持ち、15世紀末~16世紀代に比定される。(78) は瀬戸美濃卸皿で、内面にヘラ描の卸目を持ち、底部は回転糸切が施される。藤澤編年古瀬戸中期に該当し14世紀前半代に比定される。

(79・80) は輸入磁器。(79) は青磁皿(碗)で内面にクシ描文を持つ。高台部外面には一部釉が垂れるが、体部下半から高台、底部にかけては露胎。(80) は白磁碗で、口縁部は小さい玉縁状を呈する白磁碗Ⅱ類にあたる。これらの輸入磁器は概ね12世紀代に相当する。

(K1) ~ (K4) は瓦。(K1) は平瓦で、凹面は丁寧にナデ調整される。(K2) は、湾曲が強く、何らかの道具瓦であろう。(K4) は凸面に、1辺5mm前後の菱形の斜格子タタキが施され、一部ナデ調整によりタタキが消される。凹面には布目が残る。多哥寺創建瓦分類D形式(7世紀後半)に類似する。(K3) は軟質で不整形な粗い格子タタキが施された平瓦で、凹面には布目が施される。多哥寺再建時(11世紀末~12世紀)の瓦に類似する。

(S2) は切目石錐。頁岩製で、現存径5.5cm×4.2cmの楕円形を呈し、長手方向の端にV字形の切目がつけられる。重量が現存重で50gをはかる。

(81) ~ (89) は下層遺構からの混入遺物で、弥生後期末~庄内期のものである。(84)・(85) は、傘型を呈し、内面は粗いヘラケズリ痕を残したままの状態であることから、蓋もしくは脚部であろう。

これらの遺物のほか、図化し得なかったが製塩土器が数点出土している。

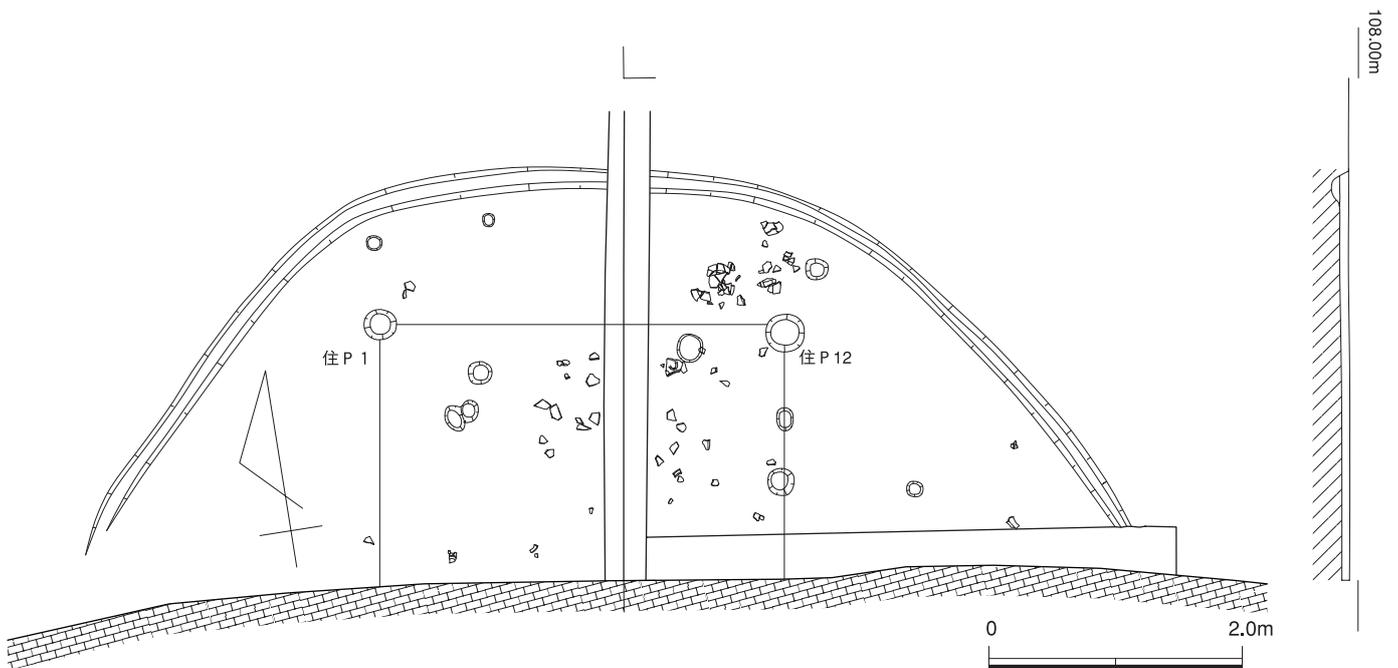
2. 下層遺構面

検出された遺構には、竪穴住居址（SB05）、溝（SD04～07）、土坑（SK08～10）があるほか、ピット状遺構が84基検出されたが、建物等の配列を構成するものは確認できなかった。包含層には、弥生後期末～庄内基を中心とした遺物が多く含まれている。

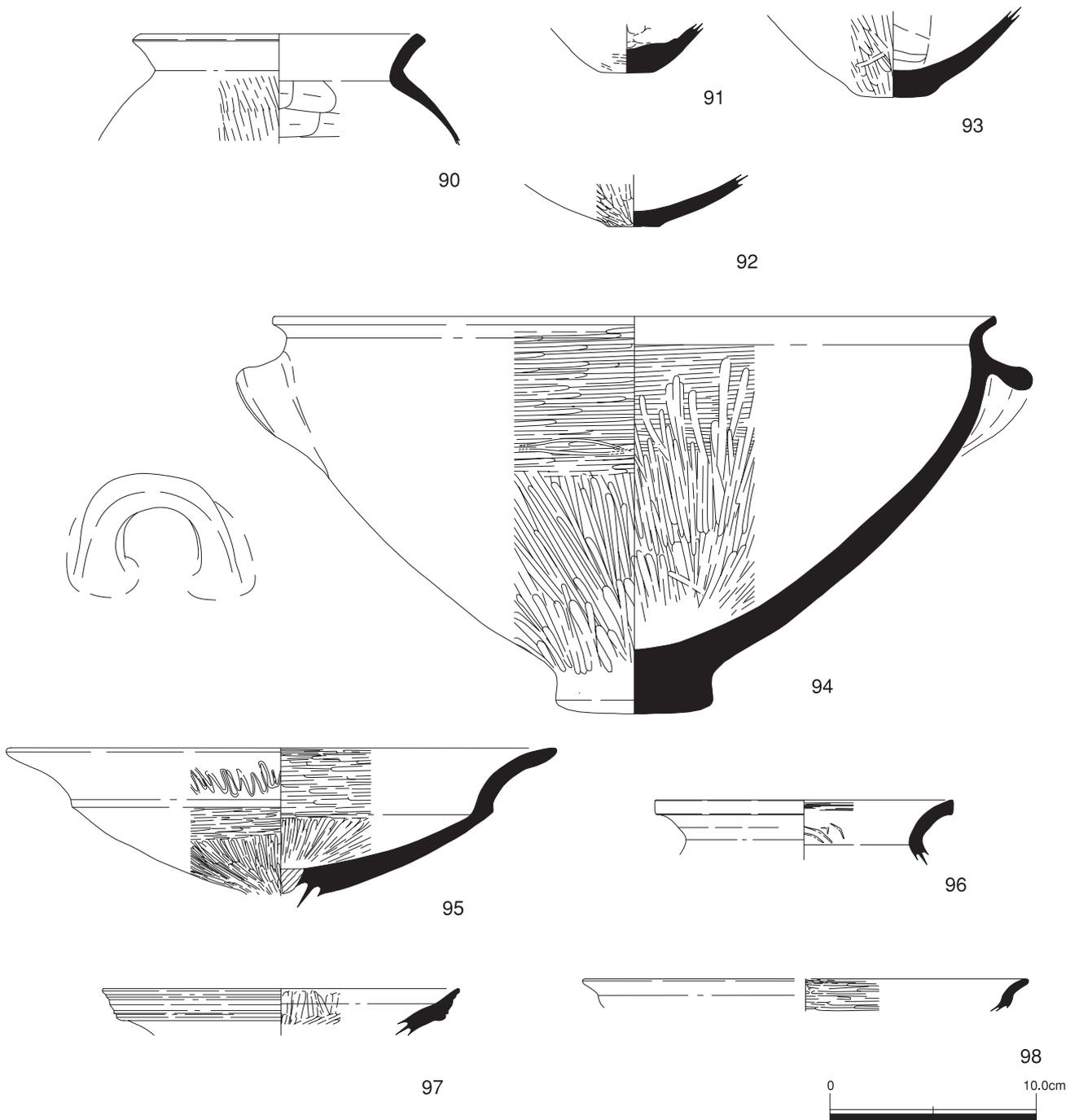
・竪穴住居址（SB05）

調査区東側において、約半分が調査区外にかかるかたちで検出された。直径約8.3mの円形を呈し、検出面から床面までの深さは約7cmをはかる。周囲には幅15～25cm、床面からの深さ約6cmをはかる周溝が巡る。位置的なものから支柱穴と考えられる柱穴は2基確認した。径は25～30cm深さは約23.0cmをはかる。中央土坑は検出できていないが、調査区外に位置する可能性がある。床面からは（90）～（95）、住居址埋土から（96）～（98）が出土している。

（90）は短く屈曲する口縁部で、端部はしっかりした面を持つ。胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整。（91）・（93）は甕底部と思われるが、いずれも外面はタタキをハケ、ナデ調整により消している。（92）は胴部のはった壺の底部で外面はヘラミガキによる。（94）は大型の鉢で、突出するしっかりした底部から、内湾しながら大きく開く体部と短く「く」字形に外反する口縁部をもち、口縁端部には面を持つ。体部上位には大型の耳状把手が貼り付けられ、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施される。（95）は浅い坏部に屈曲して大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内外面はヘラミガキ調整され、外反する口縁部外面には暗文風の波状のヘラミガキが施される。坏底部は円盤充填による。これらのほか図化できな



第24図 竪穴住居址（SB05）



第25図 竪穴住居址出土遺物

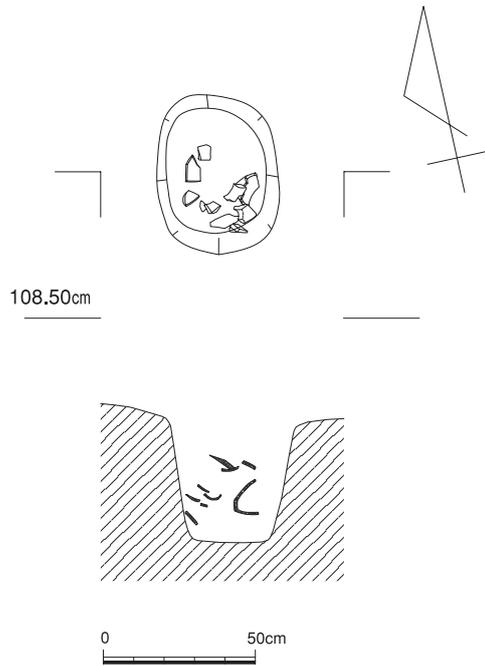
ったが、床面から（453）が出土している。胴部中位が大きく張った形状で、外面はタタキが粗いハケ調整で消され、内面はヘラケズリされる。形状から壺の胴部であると思われる。

（98）は何とか図化できる状態の小片であるが、口縁部で屈曲して外反する鉢であろう。（96）は口縁端部を若干下方へ拡張気味に面取りした甕。（97）は丹後・丹波、但馬系の器台口縁部で、外反気味に大きく拡張した口縁端部に擬凹線が施される。

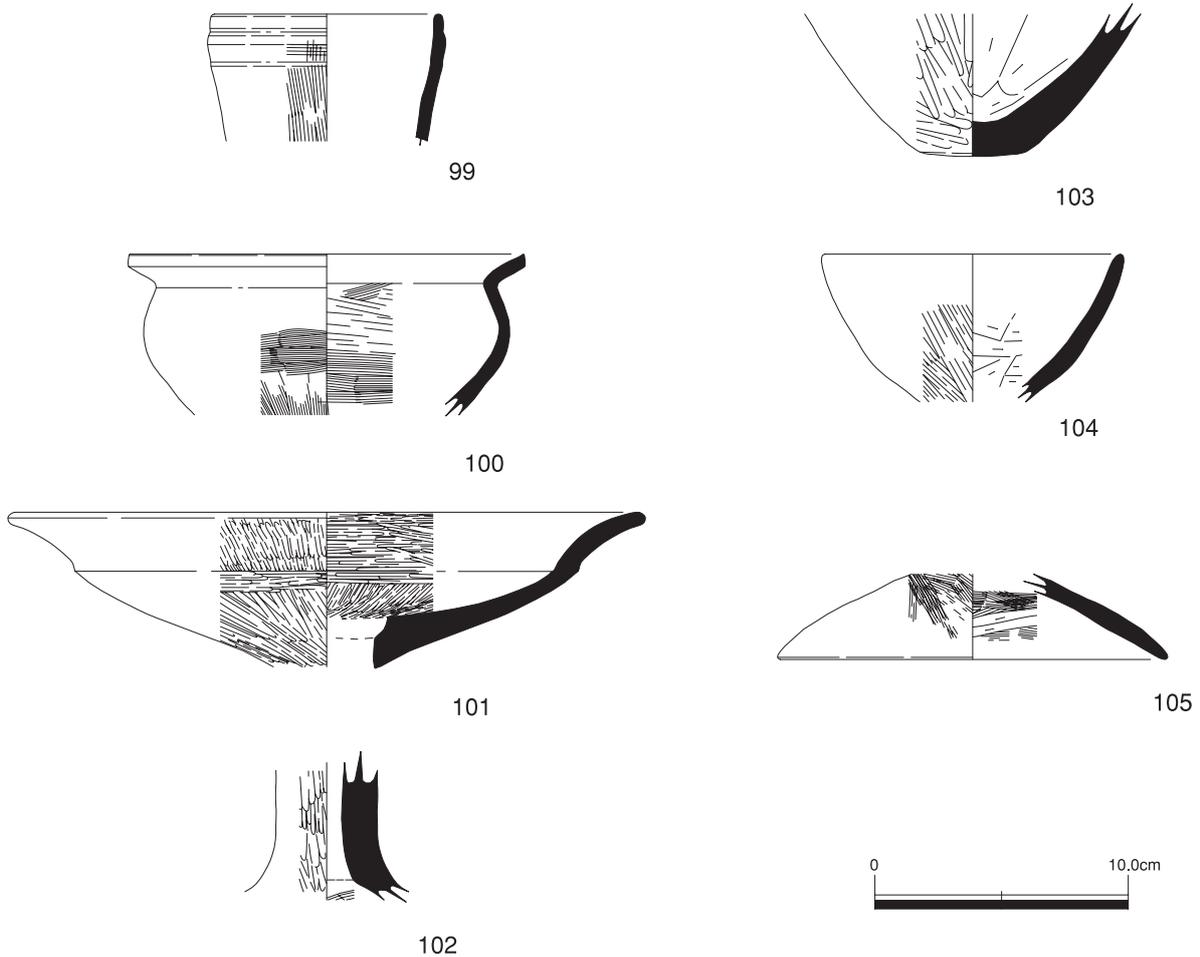
上記の床面出土土器は、弥生時代後期後半に比定される。

・土坑08 (SK08)

調査区西端で検出された土坑。南北約 52 cm、東西約 40 cm の楕円形を呈し、深さは約 40 cm をはかる。埋土からは弥生後期後半の土器が出土している。(99) は長頸壺で、口縁部に 2 条の凹線が施される。(103) は壺底部で、外面には丁寧なヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整される。(100) は扁球形の体部に「く」字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は上方につまみ上げ気味の拡張面を持つ。内外面ともハケ調整。(104) は内湾気味に立ち上がり直口する口縁部の鉢で、外面はハケ、内面は板ナデ調整される。(101) 浅い坏部から屈曲して外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。内外面ともに丁寧なヘラミガキが施される。(102) と同一個体と思われる。坏底部は円盤充填による。(105) の脚部は、内外面とも



第26図 土坑08 (SK08)

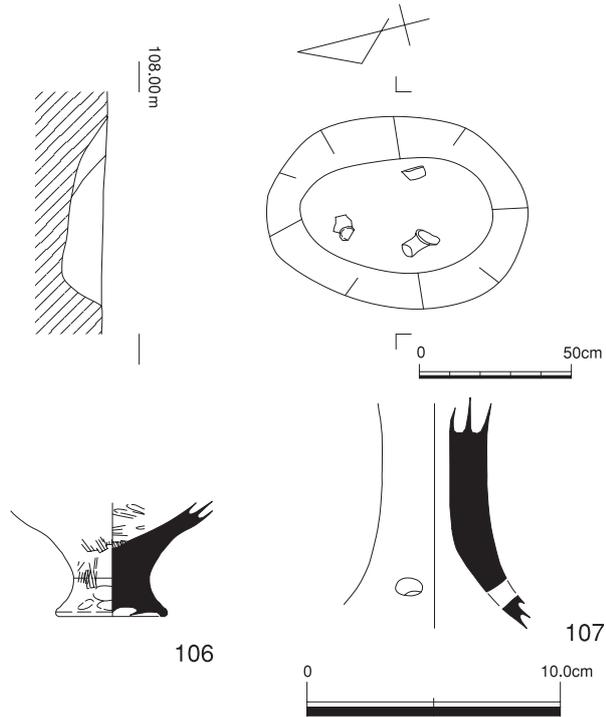


第27図 土坑08出土遺物

に粗いハケ調整が施される。

・土坑09 (SK09)

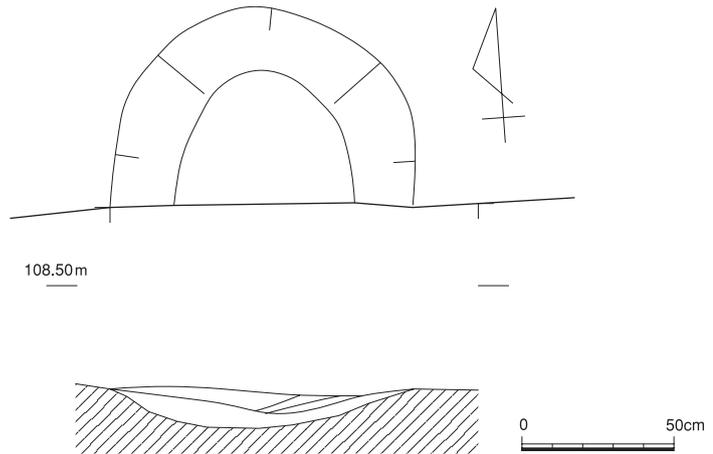
調査区東端に位置し、南北約 85.4 cm、東西約 63.5 cm の楕円形の土坑で、深さは約 12.5 cm をはかる。土坑内には上層に茶褐色土、下層に灰褐色の砂礫が堆積しており、茶褐色土中より弥生土器が出土した。



第28図 土坑09 (SK09) 及び出土遺物

・土坑10 (SK10)

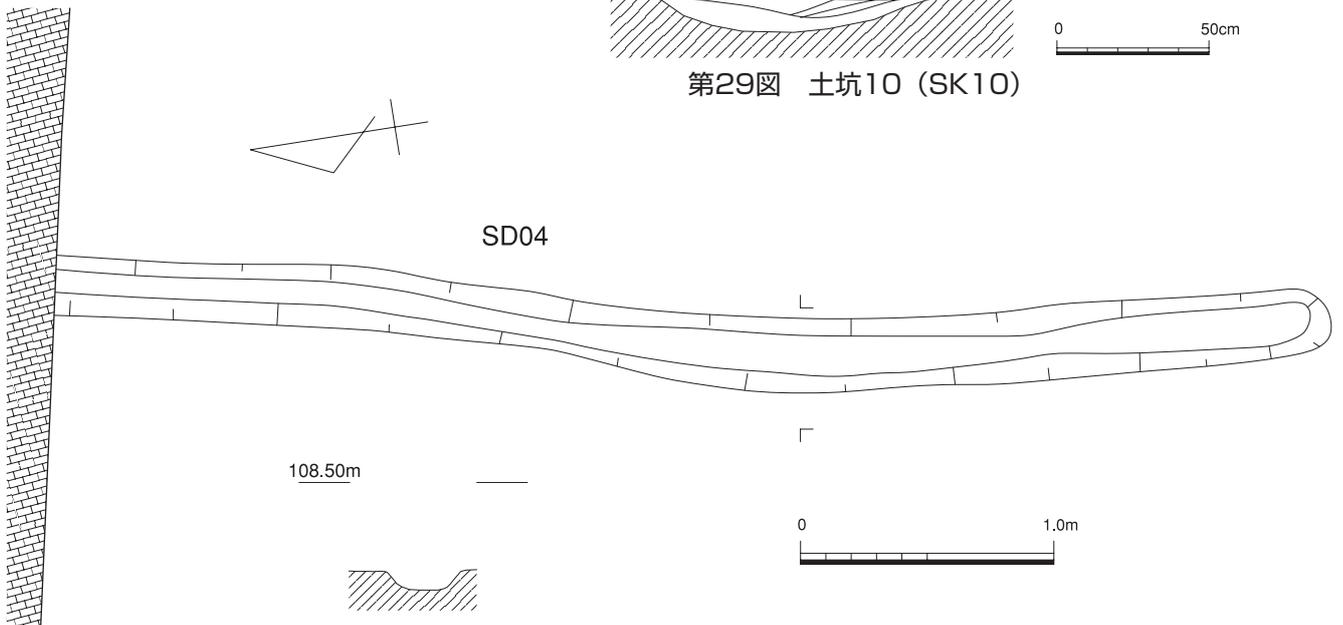
調査区南側で、一部がかかるかたちで検出した土坑。埋土は上層に砂質系、下層に粘質系の褐灰色土が堆積している。遺物には小片が多く図化できるものはない。



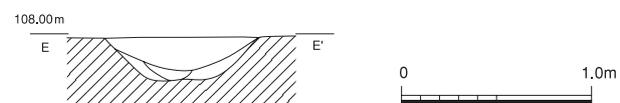
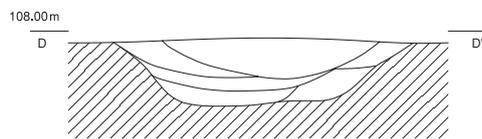
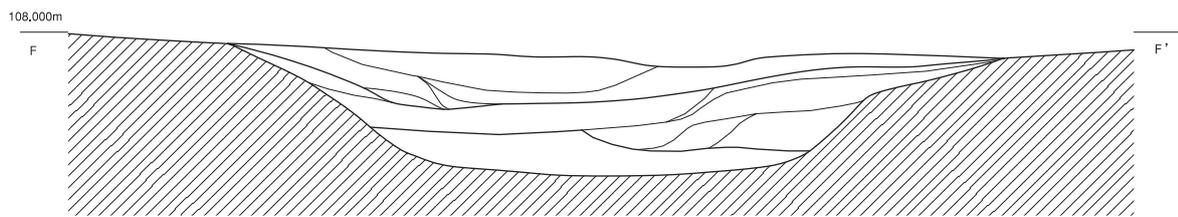
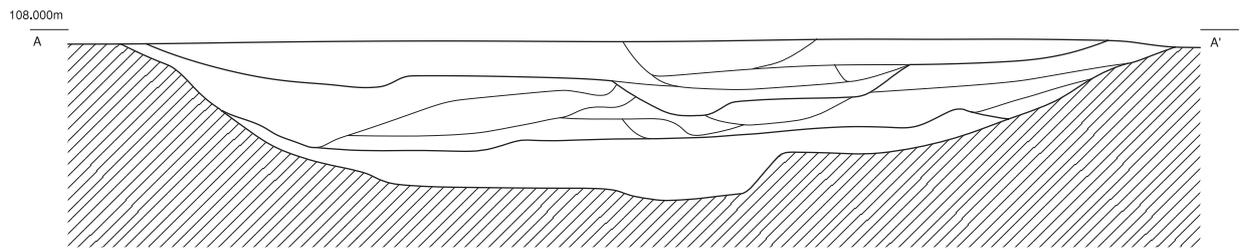
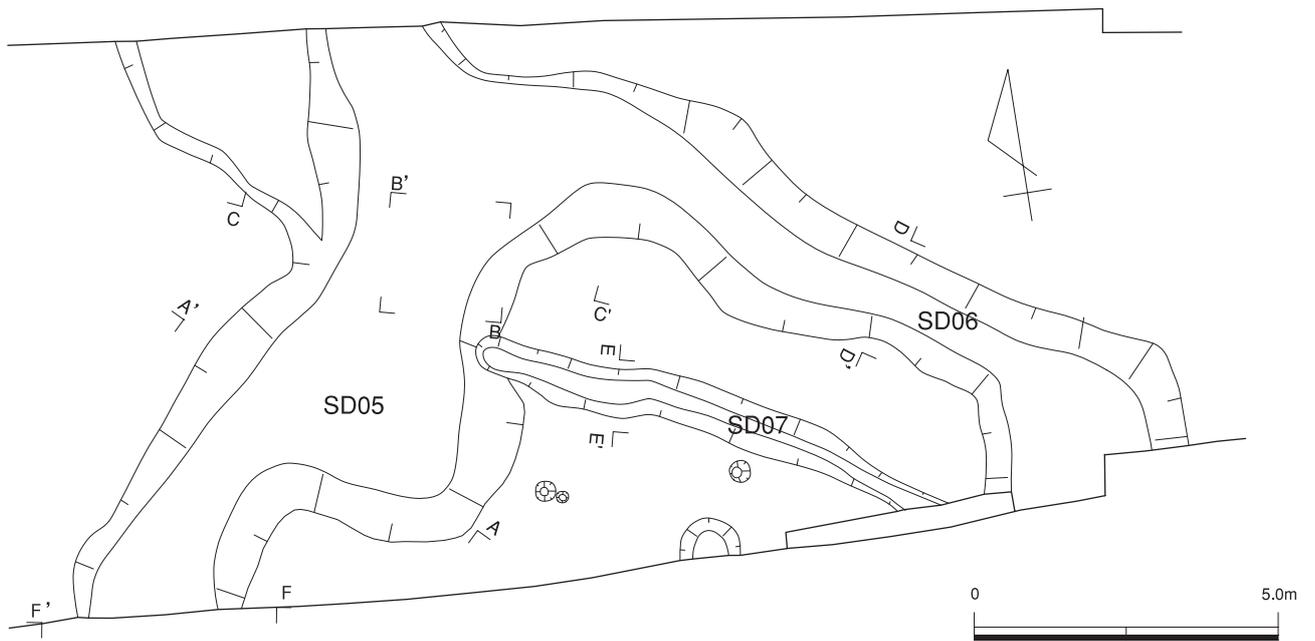
第29図 土坑10 (SK10)

・溝04 (SD04)

調査区西寄り、南北に直線的に伸びる溝。南端は調査区中央部で途切れる。検出長は約 5.0 m、幅約 29 cm、深さ約 7 cm をはかる。埋土からは弥生土器と思われる小片が出土しているが、図化しできなかった。



第30図 溝04 (SD04)



第31図 溝05・06・07 (SD05・06・07)

・溝05 (SD05)

調査区を南北に縦断する溝。北西からのび、SD06 と分岐して、「く」の字状に折れて南西に向きをかえる。屈曲部では東側溝肩部が大きく外側に膨らんで湾曲する。溝幅は狭い部分で約 2.45 m、SD06 との分流部では約 4.8 mをはかる。分流部の溝底部は、SD06 との分岐による水流の関係によると思われるが、東側が一段高くなっている。深さは 70 ～ 85 cmをはかる。

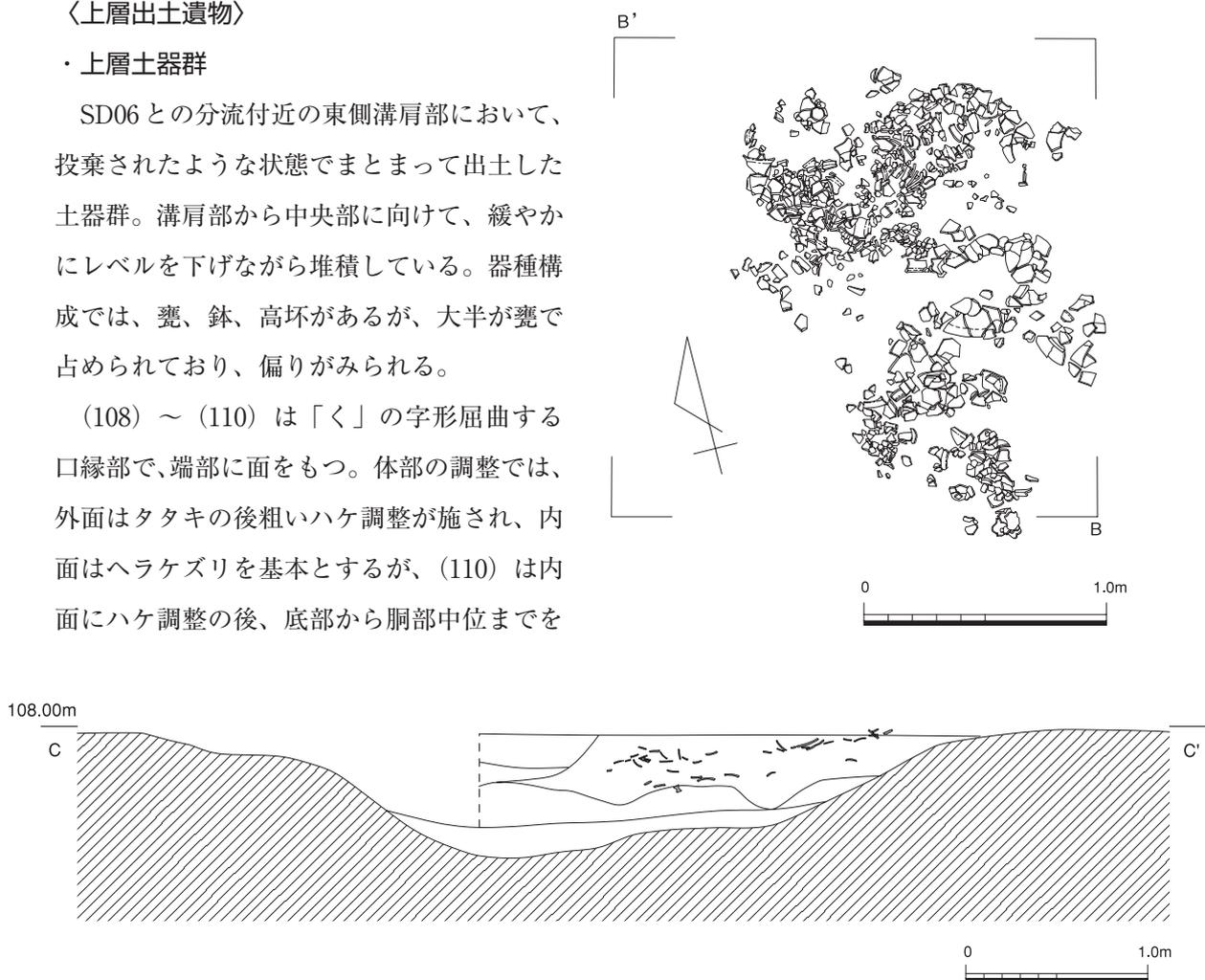
溝内の堆積状況は、暗褐色シルト、黒褐色粘質土、褐灰色砂礫土が互層となっているが、大きくは、シルト質からなる上層、薄い砂礫やシルト質層を挟むが黒褐色粘質土の堆積が中心となる中層、褐灰色砂礫層の下層の 3 層に分けられる。堆積状況の観察から、当初ある程度水流がある 5 m 前後の溝が、滞留状態となり粘質土が堆積した後、再び流れが活発となり緩急を繰り返し、砂礫を堆積しながら埋没し、最後は幅約 1 m の流れの緩慢な小溝となった変遷がうかがえる。溝内からは大量の弥生後期後半～庄内期を中心とする遺物が出土した。取り上げに際しては、上記のように大きく 3 層に分けて取り上げた。

〈上層出土遺物〉

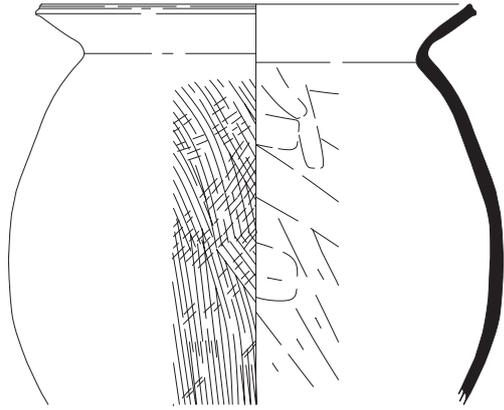
・上層土器群

SD06 との分流付近の東側溝肩部において、投棄されたような状態でまとまって出土した土器群。溝肩部から中央部に向けて、緩やかにレベルを下げながら堆積している。器種構成では、甕、鉢、高坏があるが、大半が甕で占められており、偏りがみられる。

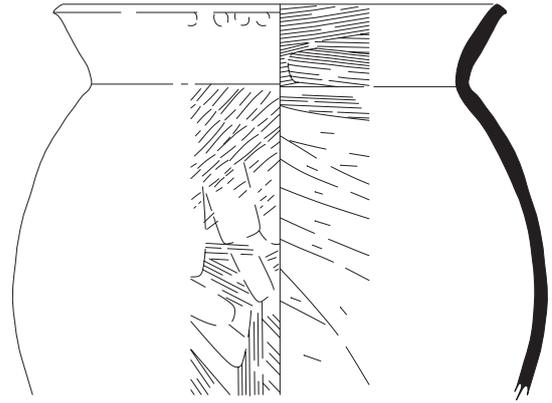
(108) ～ (110) は「く」の字形屈曲する口縁部で、端部に面をもつ。体部の調整では、外面はタタキの後粗いハケ調整が施され、内面はヘラケズリを基本とするが、(110) は内面にハケ調整の後、底部から胴部中位までを



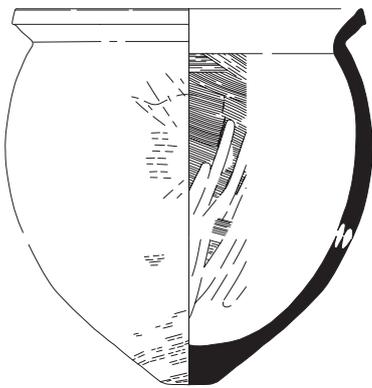
第32図 溝05上層土器群出土状況と断面土層



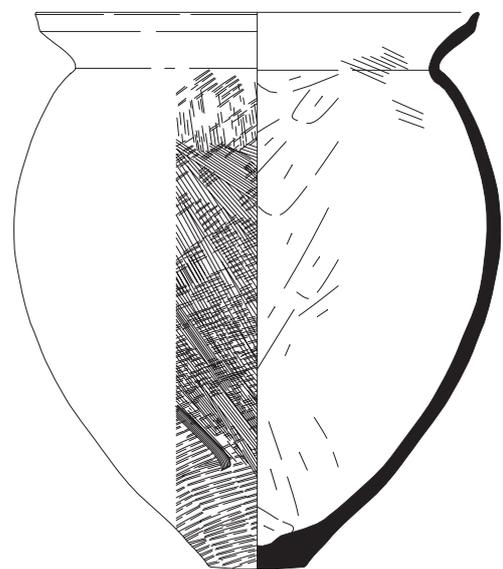
108



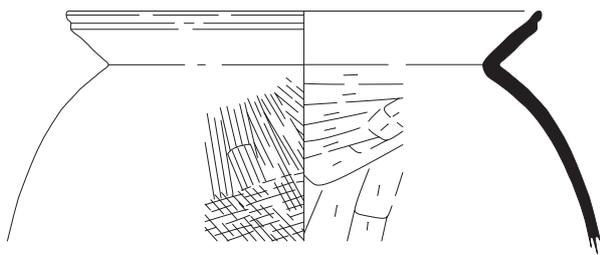
109



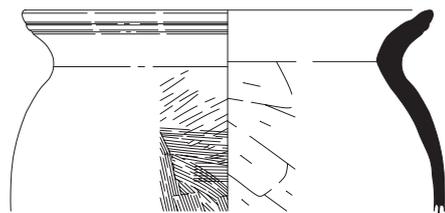
110



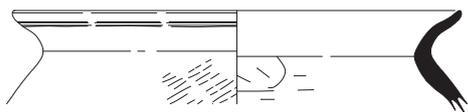
111



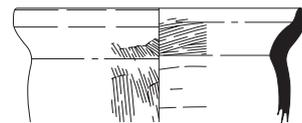
112



113



114



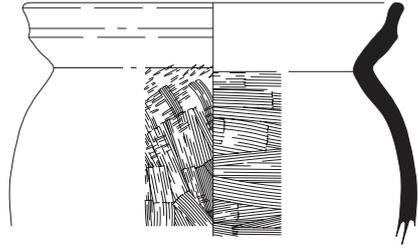
115



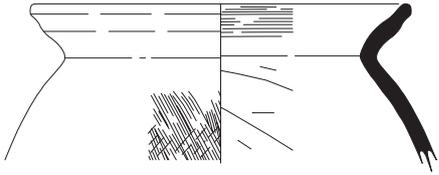
第33図 溝05上層土器群①



116



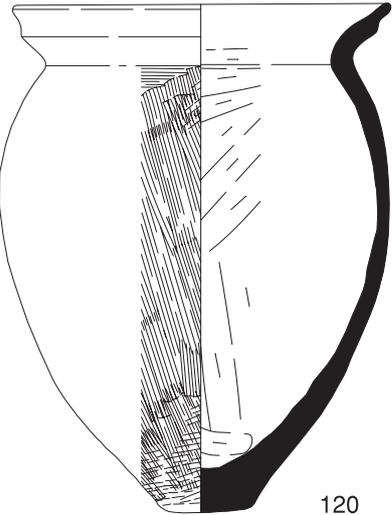
117



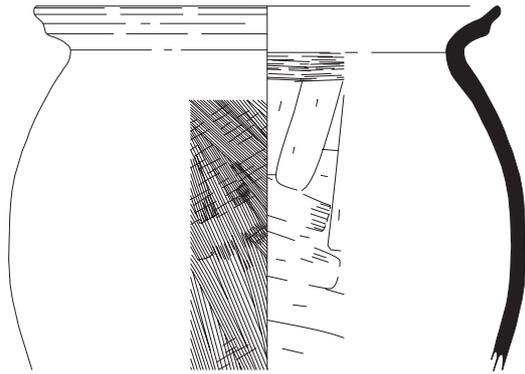
118



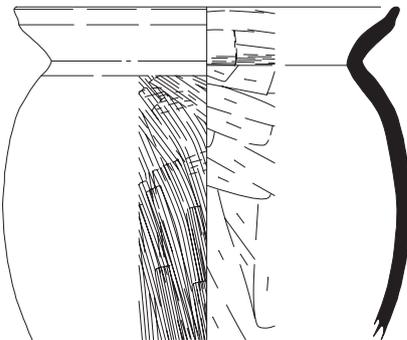
119



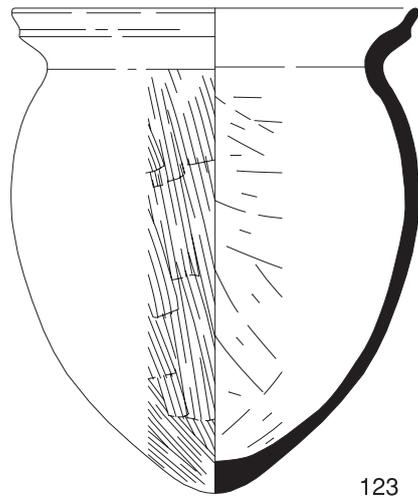
120



121



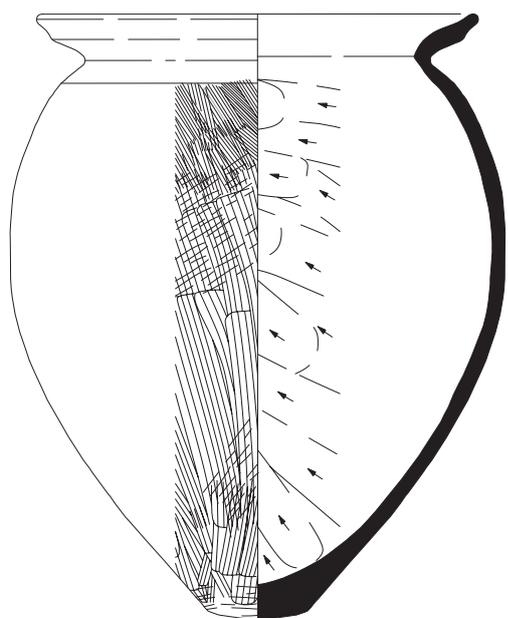
122



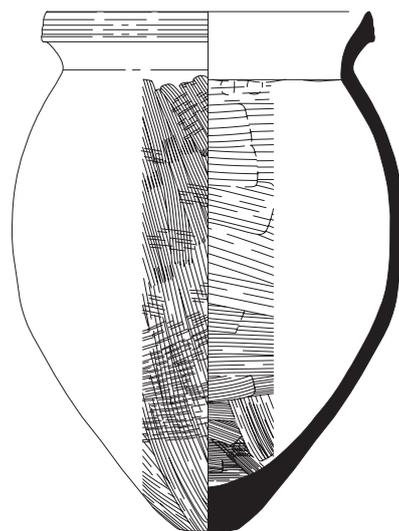
123



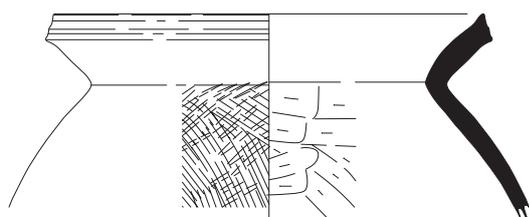
第34図 溝05上層土器群②



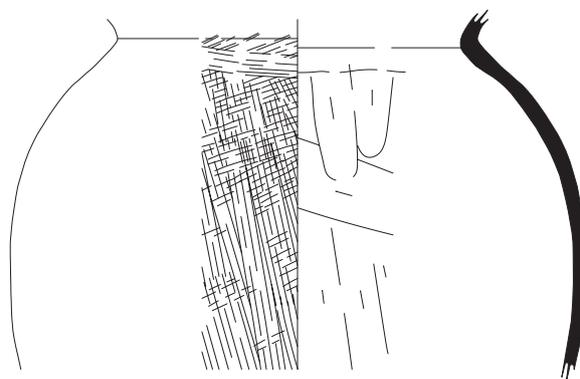
124



125



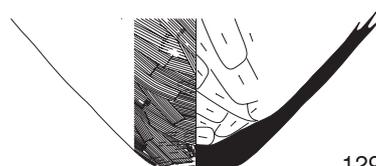
126



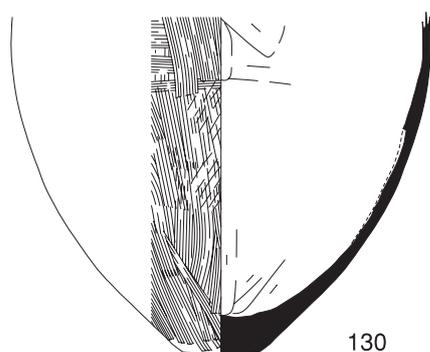
127



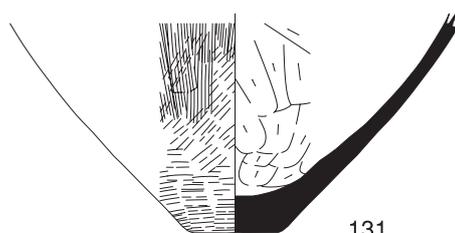
128



129



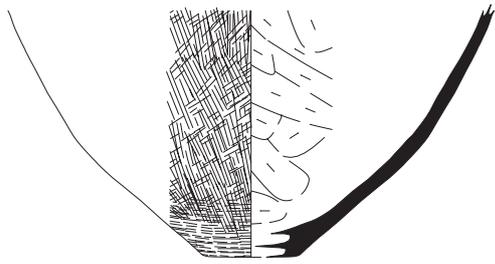
130



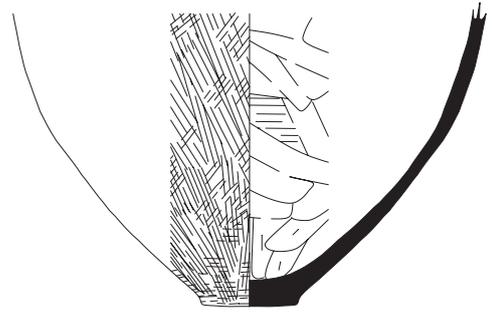
131



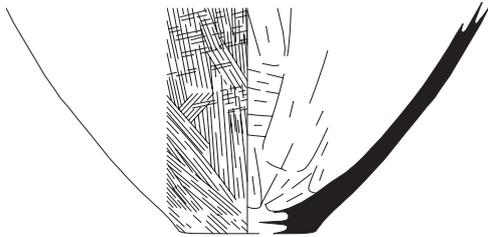
第35图 溝05上層土器群③



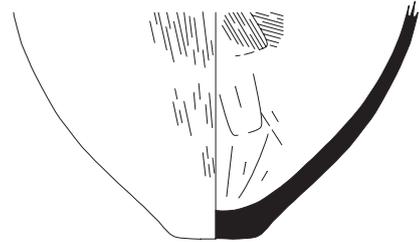
132



133



134



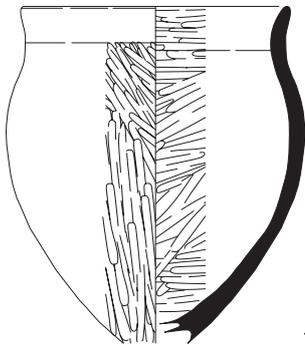
135



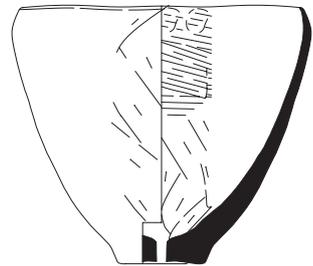
136



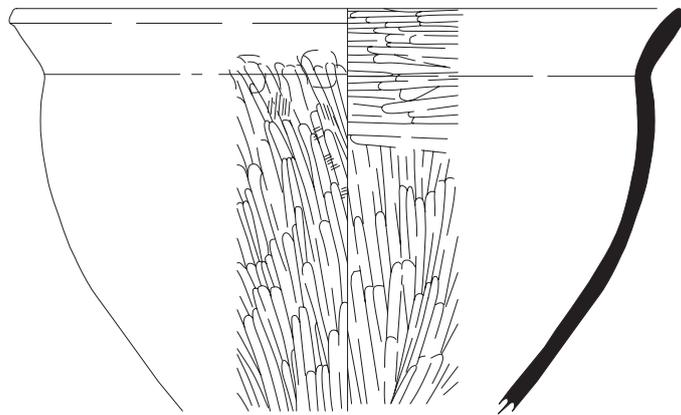
137



138



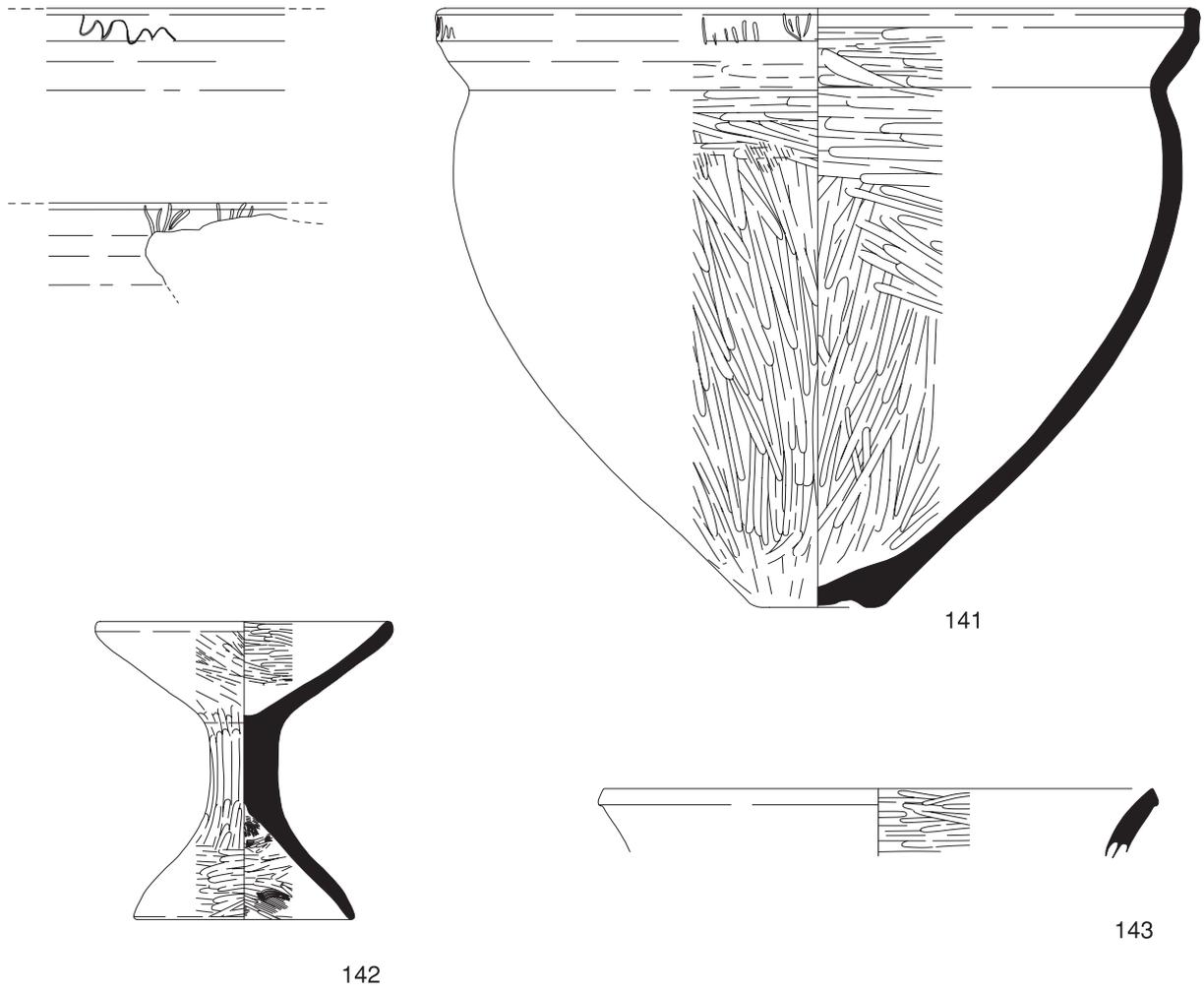
139



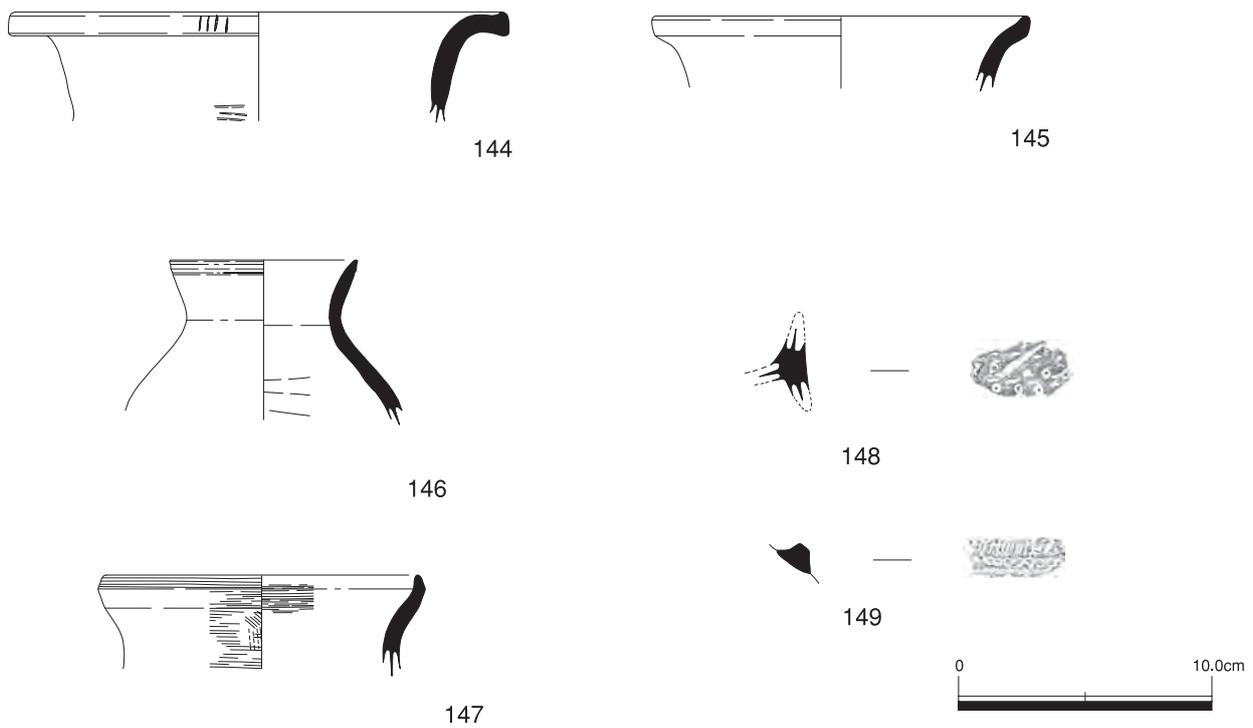
140



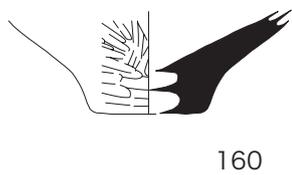
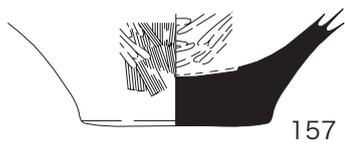
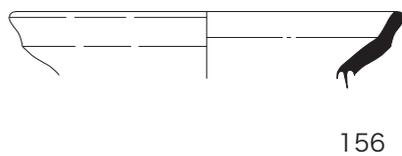
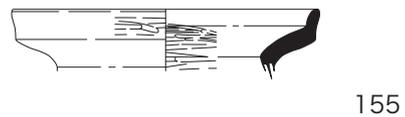
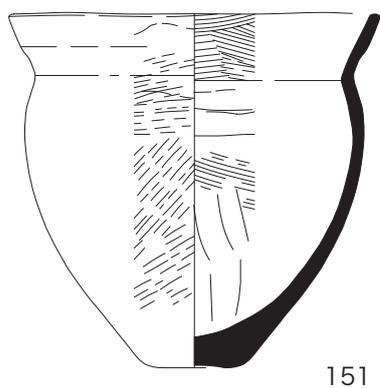
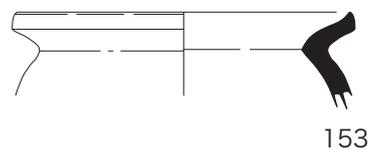
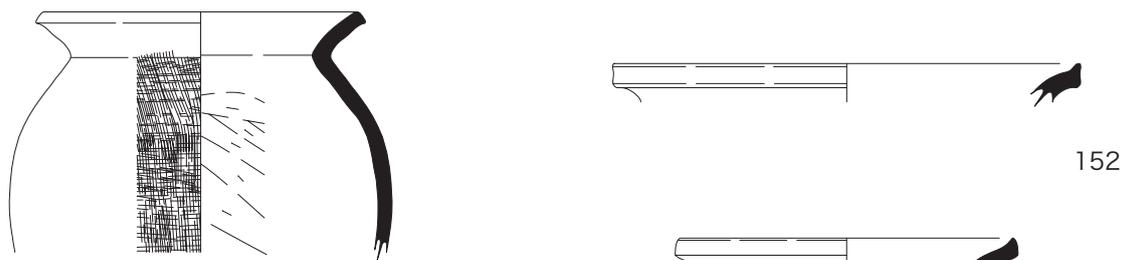
第36图 溝05上層土器群④



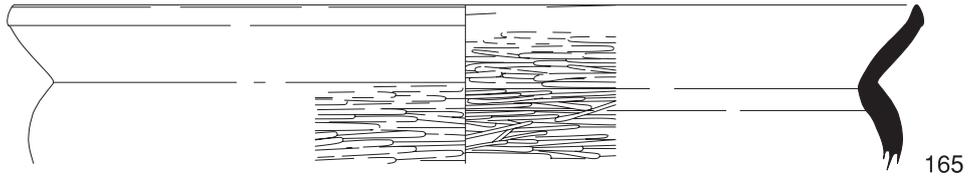
第37图 溝05上層土器群⑤



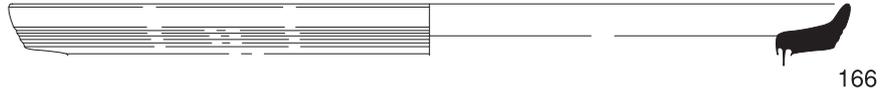
第38图 溝05上層出土遺物①



第39图 溝05上層出土遺物②



165



166



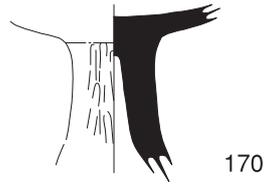
167



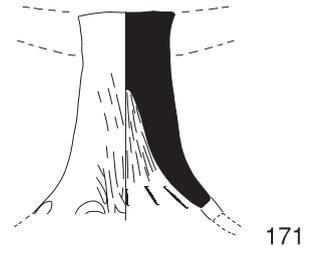
168



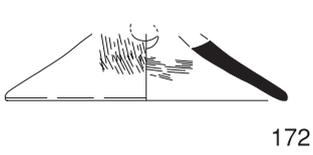
169



170



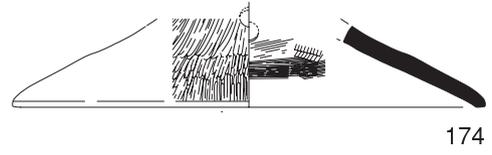
171



172



173



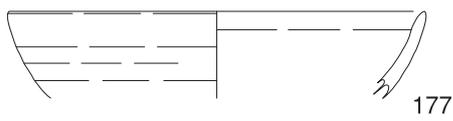
174



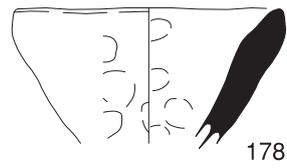
175



176



177



178



第40図 溝05上層出土遺物③

暗文状の縦ヘラミガキが施される。

(111) ~ (114) は口縁端部を上方につまみ上げ気味にナデを施すタイプで、口縁端部にはナデによる1~2条の凹線をもつものもある。胴部の調整は外面タタキ後ハケ、内面はヘラケズリによる。外面のタタキは弥生後期の系譜をひく粗いタタキを施すものが多いが、細筋の庄内期的なタタキを施すもの(111)もみられる。

(116) ~ (122) はいわゆる複合口縁の形態を有する丹波・丹後系の甕。いずれも中位の張った胴部に小さい底部を有する。(116)のみは口縁端部に擬凹線文をもつが、他は無文である。体部調整は、いずれも外面タタキの後ハケを施すが、細筋のタタキ+細いハケ(117)、粗いタタキ+細いハケ(118~122)、粗いタタキ+粗いハケ(123・124)のものがあ、(123)はタタキを完全に消している。内面はハケ調整のものとはヘラケズリもしくは板ナデを施すものがある。

(125)、(126)は、口縁部に古い様相がみられるが、体部の形態、調整から見ると他の甕と時期的な齟齬はみられない。(125)は、内傾気味に上方へ肥厚した口縁端部に2条の擬凹線文を施し、胴部中位の張った砲弾型の体部に小さな底部をもつ。体部の調整は、外面に細筋のタタキ後ハケ、内面はハケ調整されるが、体部下半に細いハケ、上半には粗いハケを用いている。(126)は肥厚した口縁端部に2条の擬凹線を持ち、体部には粗いタタキが残る粗いハケ調整が施される。(127)~(135)は甕の体部、底部。(128)(129)は比較的丁寧なハケ調整が施されるが、大半が粗いタタキ痕を残しており、タタキを消し去る意識が薄れていることが伺える。

(138)は内外面丁寧なヘラミガキが施された小型の無頸壺。

(139)は小型の鉢。内湾しながら立ち上がり直口する口縁部にいたる。底部には径約0.4cmの穿孔がみられる。内外面ともに板状工具によるナデ調整。

(140)・(141)は大型の鉢。(140)は如意形に外反する口縁部をもち、端部に面を持つ。内外面ともにヘラミガキが施されるが、外面にはミガキの前のハケ調整が残る。(141)は受け口状の口縁で、上方に拡張された端部外面には、少なくとも3方向にヘラ状工具による記号が記されている。底部はドーナツ状に上げ底となっており、内外面ともにヘラミガキが施される。

(142)は碗形の高坏。柱実の脚部に直線的に広がる坏部をもつ。内外面ともにヘラミガキ調整され、脚裾部内面にも粗いミガキが施される。

これらの土器群は、概ね弥生時代後期末~庄内期に相当すると考えられる。

・その他上層出土遺物

(144)~(149)は壺。大きく開く口縁部を上下に肥厚し、刻み目を施す(144)や上方につまみ上げ気味に肥厚する(145)の広口壺、口縁端部に擬凹線を施す直口壺(146・147)がある。その他、円形と点線状の刺突文がみられる上下に肥厚した口縁端部(148)や上面に刻目、下端に円形刺突文が施された、壺肩部の断面台形状の凸帯(149)の小片がある。

(150)~(156)は甕。(150)は口縁端部に面を持ち、体部はタタキが明瞭に残るハケ、内面

はヘラケズリ調整される。(151)は直口気味に直線的にのびる口縁部を持ち、体部外面は粗いタタキ、内面は体部が板状工具によるナデ、口縁部に目の粗いハケが施される。その他、上方につまみ上げ気味にナデを施す(153・154)や複合口縁の(155・156)などがある。

底部にはしっかりした平底の(159)やドーナツ状の上げ底気味の(158)のほか、丸底志向が強くなり小さくなった(161～163)、底部に穿孔される(164)がある。

鉢では、体部から「く」の字形に鋭く屈曲して、内湾気味に立ち上がる口縁で、端部をつまみ上げ気味に肥厚して面をつくりだす(165)や上方に大きく肥厚した端部に3条の擬凹線を施す、丹波・丹後系の(166)がある。(167)は台付の直口鉢であろう。

(169)～(176)の高坏・器台脚部では、充填法のもの(169)、脚基部が柱実化した接合法または挿入付加法によるもの(170・171)がある。また、脚裾部では外面を粗いハケ調整(172)するものと、ヘラミガキのもの(173～176)がある。

以上の上層出土土器は概ね弥生後期後半～庄内期におさまるものと思われる。

その他、溝の最終埋土である最上層の暗褐色シルト質土層から須恵器碗(177)と製塩土器(178)が出土している。いずれも平安時代前半頃のものであろうと思われる。

〈中層出土遺物〉

壺では(179)～(189)がある。広口壺では短い頸部から大きく外反する(179)や短い口縁部をもつ(180)があるほか、大きく上下に肥厚した口縁端部を擬凹線文や円形浮文、波状文、刺突文で飾る(181)～(183)がある。(181)は内面にも2重の円形刺突文が施される。(184)は口縁部が上方に短く立ち上がる複合口縁壺になると思われる。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整される。(185)～(189)は長頸壺もしくは直口壺で、口縁部が外反気味に開くもの、直立するもの、内湾気味に立ち上がるものがある。いずれも外面はハケもしくはナデ調整される。

甕は、口縁端部を若干肥厚させた(190)～(193)や、端部を上方につまみ上げ気味に肥厚させた(194)～(196)、丹波・丹後系の複合口縁をもつ(197)～(200)がある。複合口縁のものには擬凹線をもつもの(198・200)もある。また、口縁部端部の屈曲が明瞭なもの(199・200)、外反度が増し鈍くなったもの(197・198)がある。

(201)～(215)は底部。(201)は底部穿孔されるが、穿孔は未貫通である。

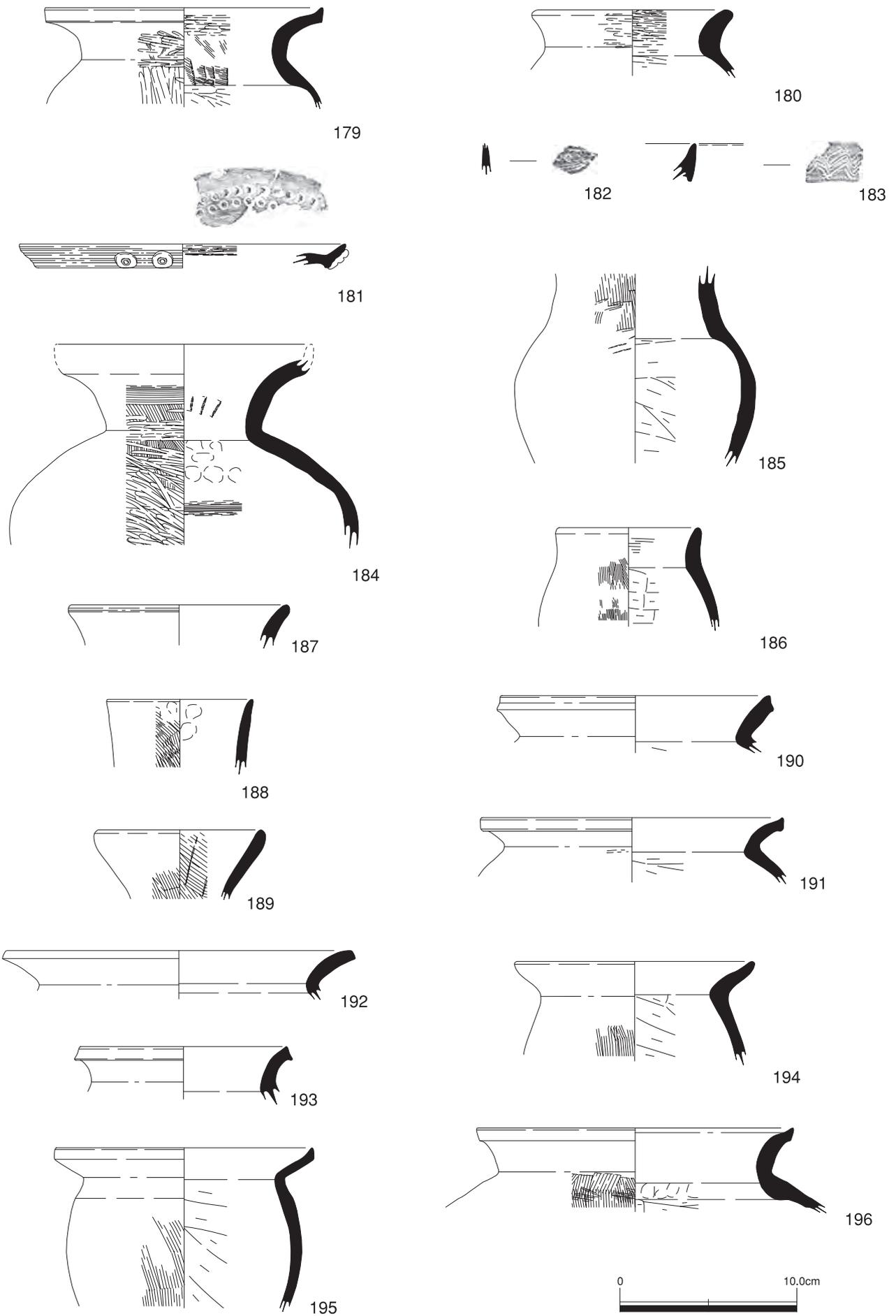
(216)・(217)は複合口縁の鉢で、上方に拡張した口縁端部には擬凹線を施す。

高坏では屈曲する坏部のもの(219)、碗形の坏部のもの(220)、複合口縁を有するもの(218)がある。(226)は小型器台口縁部で、端部には擬凹線がみられる。

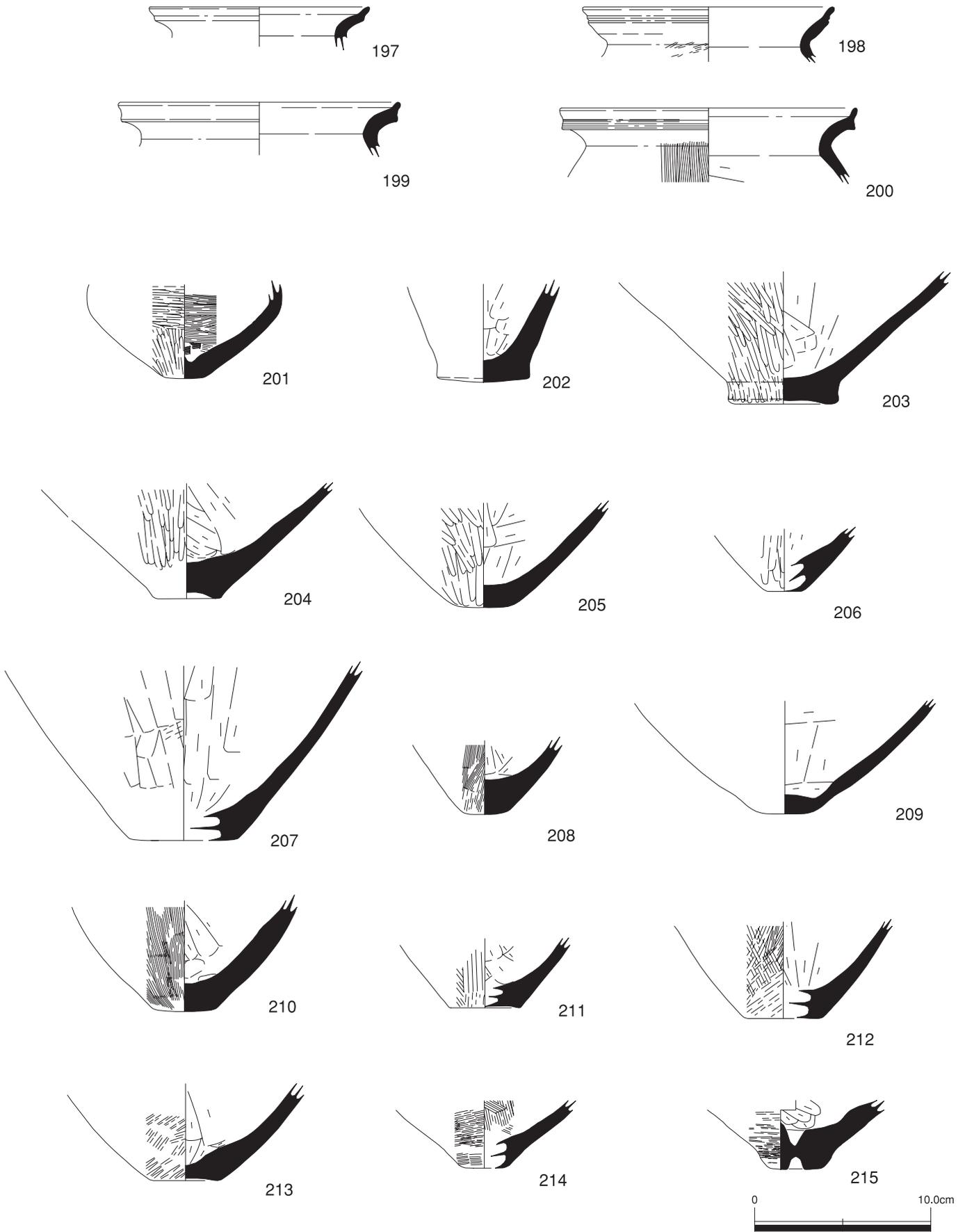
〈下層土器群〉

下層砂礫層上面を中心として、溝底中央部に溜まった状態で出土した土器群。

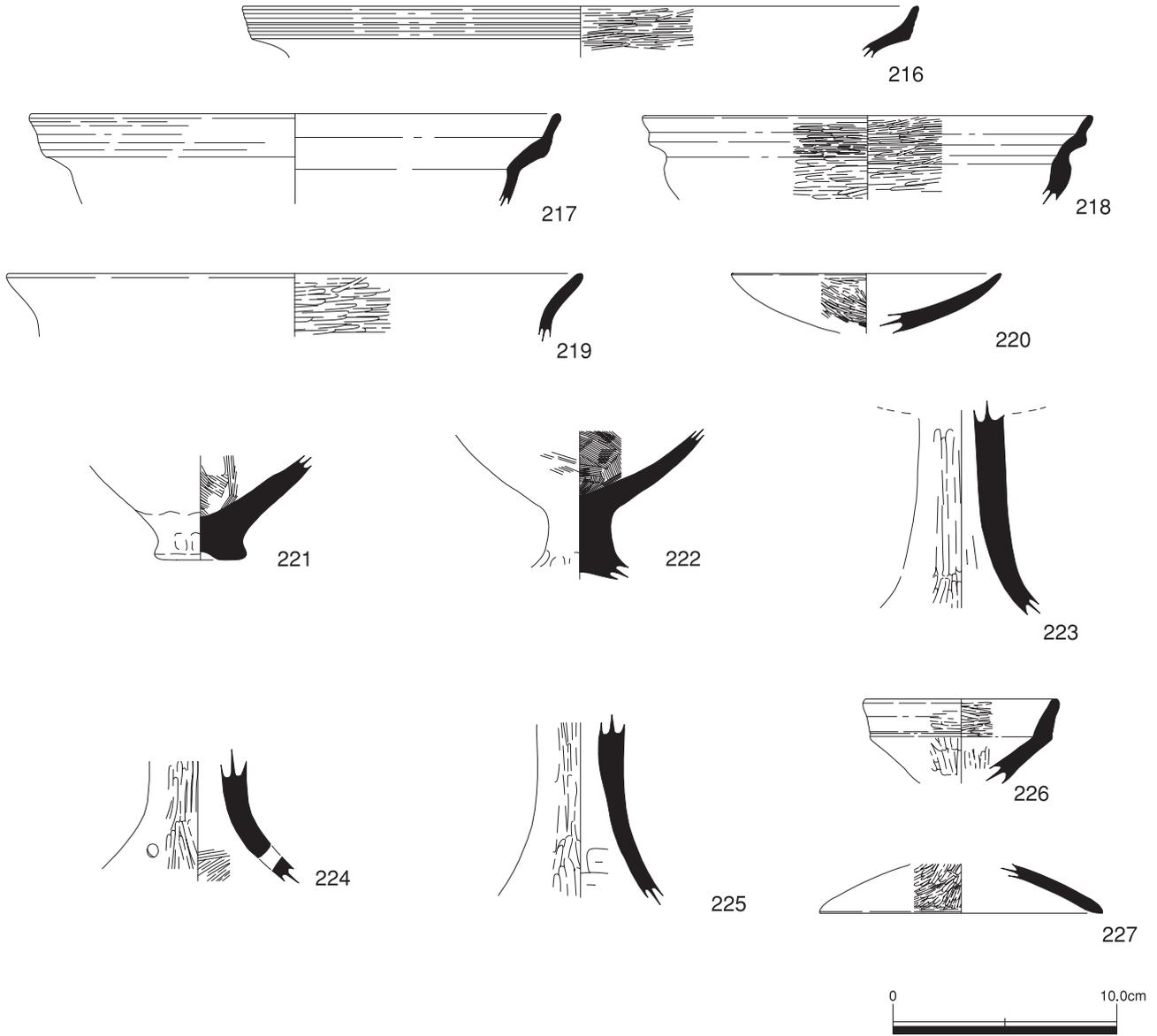
壺では広口壺、長頸壺、無頸壺、直口壺がある。



第41图 溝05中層出土遺物①



第42図 溝05中層出土遺物②



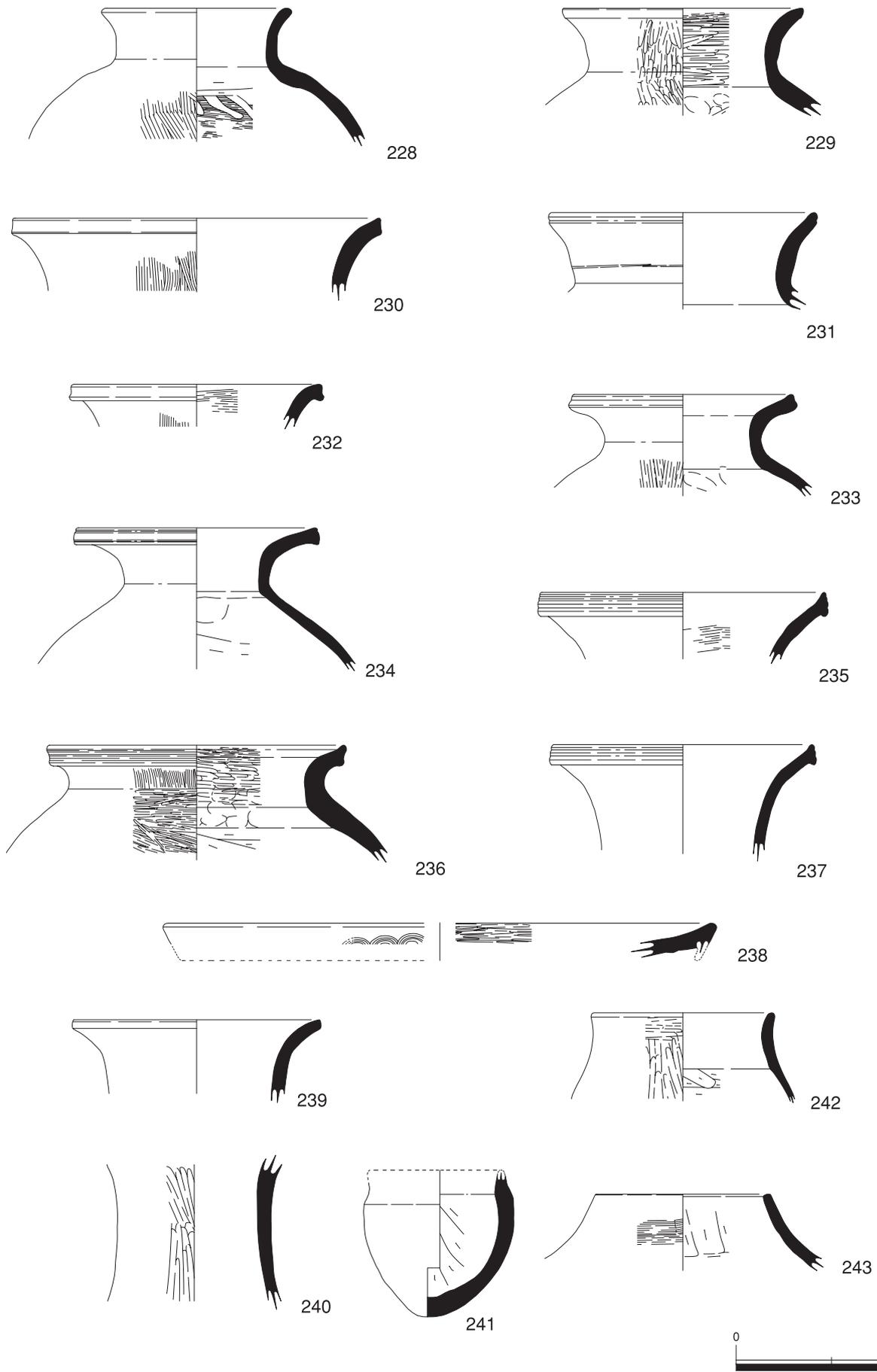
第43図 溝05中層出土遺物③

(228) ~ (238) は広口壺。(228) ~ (230) は口縁部の肥厚が弱く、口縁端部には狭い面を持つ。(231) は口縁端部を丸くおさめるが、端部の強いナデにより1条の擬凹線を施す。(232) ~ (238) は口縁端部を上下・下方に拡張するもので、端面に擬凹線を施すもの(233 ~ 237)、波状文を施すもの(238)がある。(236) は形状から甕とも判断できるが、外面ヘラミガキが施されており壺とした。

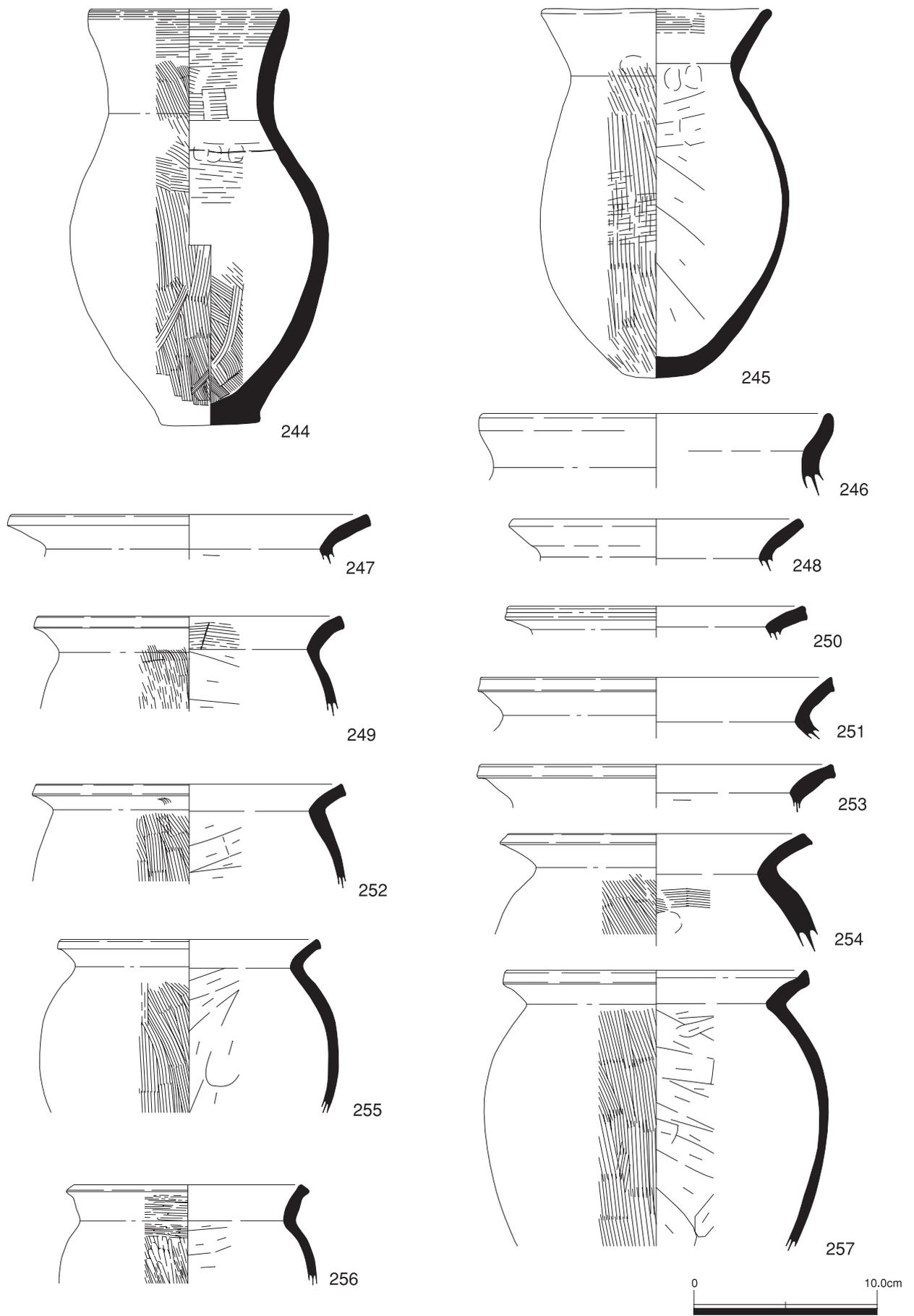
(239) と(240) は同一個体とみられ、広口の長頸壺であろう。

(241) ~ (243) は無頸壺で、器壁は厚いが、外面は丁寧なナデが施された小形土器(241)や内傾する口縁部をもつ(242)・(243)がある。

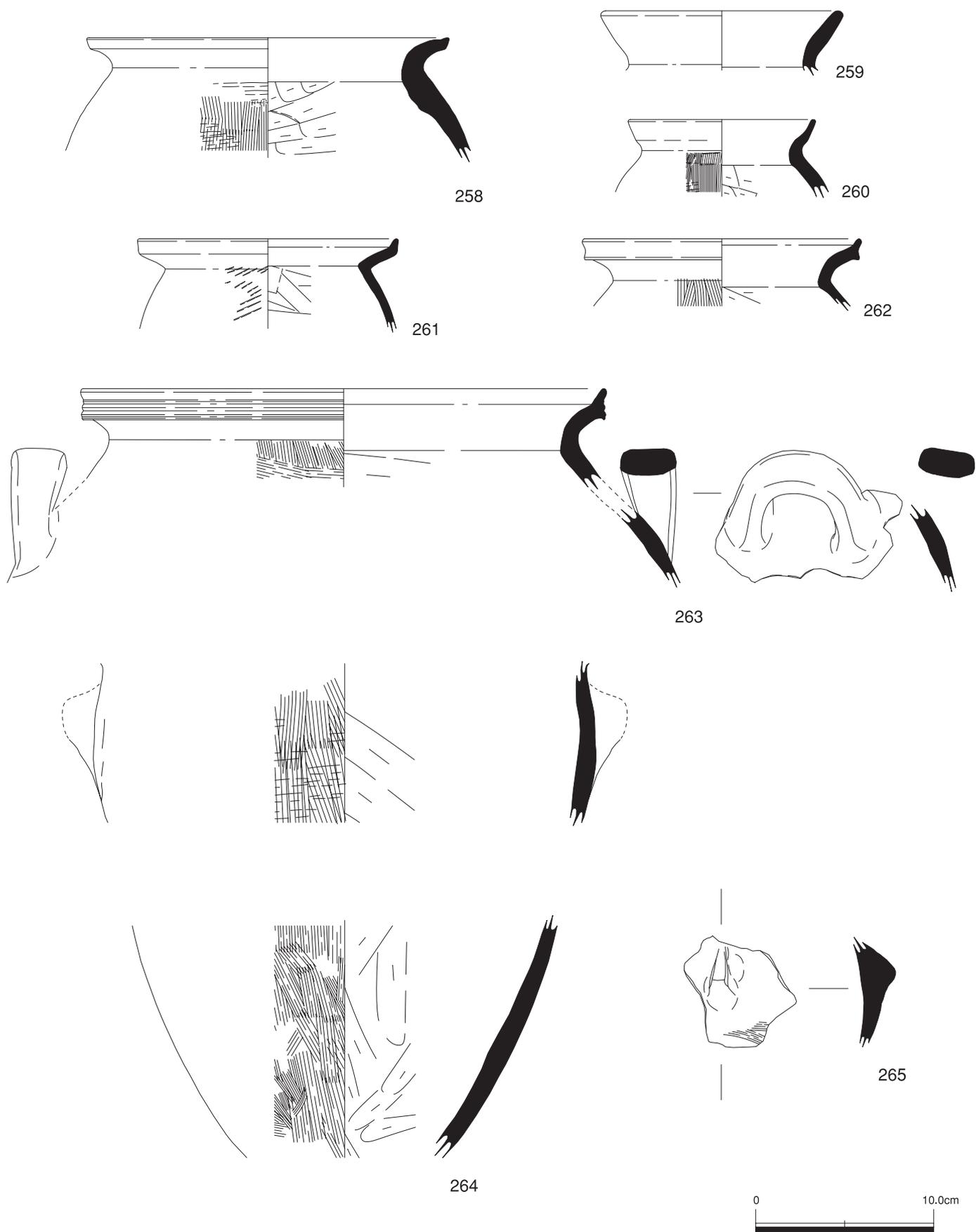
(244) ~ (246) は直口壺。(244) は、安定した底部をもつ楕円形の体部からなだらかに外反しながら口縁部にいたり若干内湾気味の端部は丸くおさめられ、口縁部内外面には擬凹線が施さ



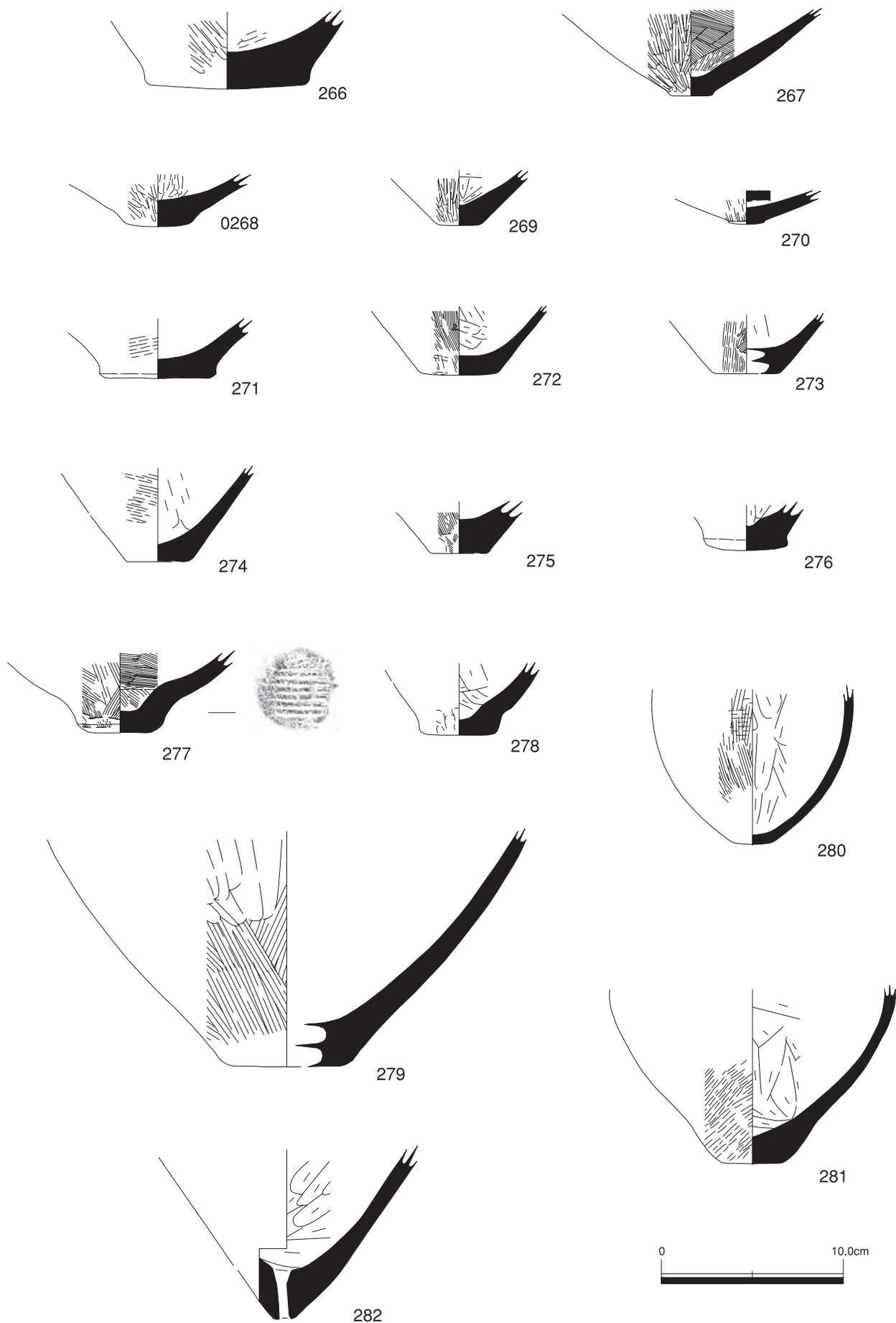
第44図 溝05下層土器群①



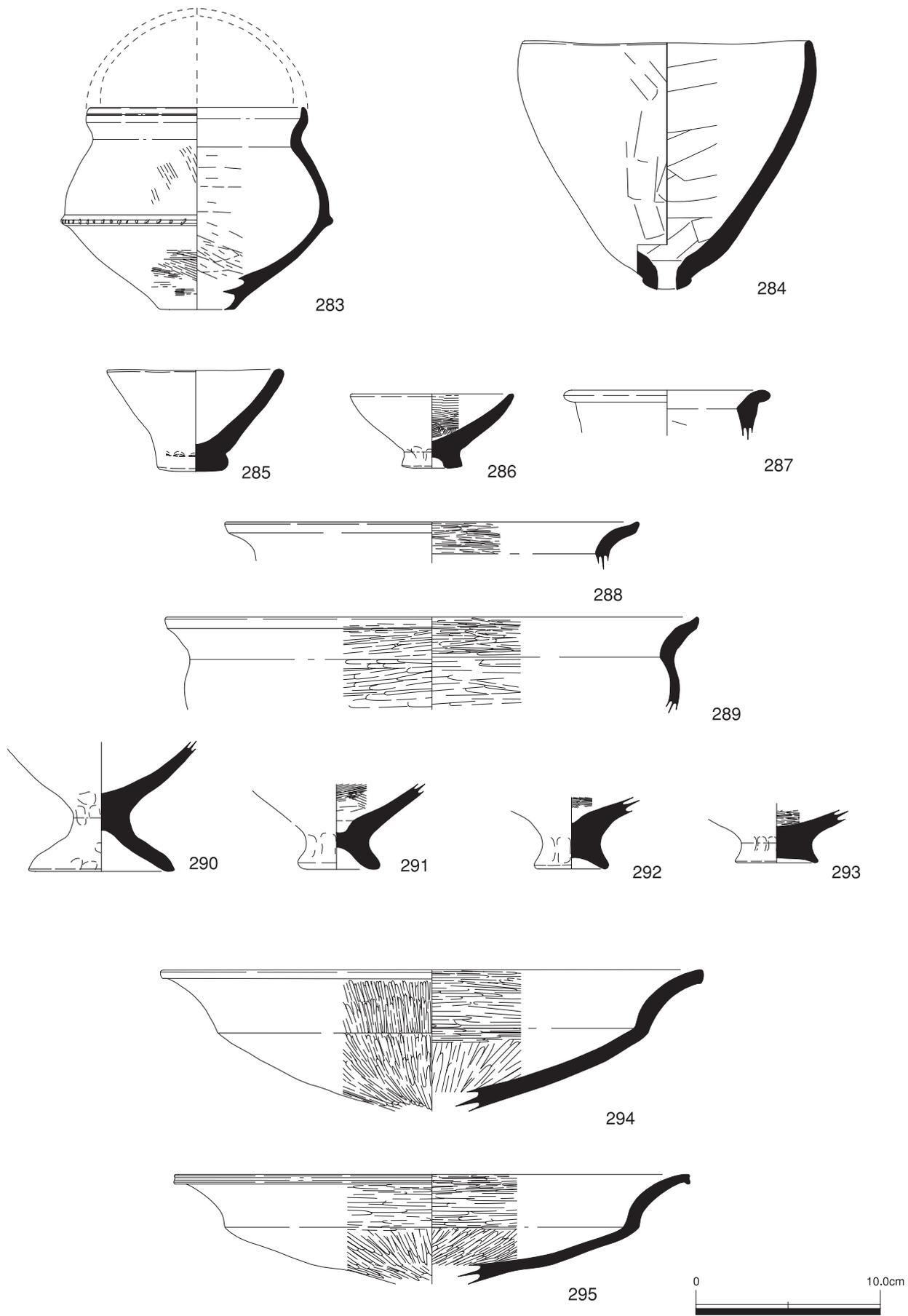
第45図 溝05下層土器群②



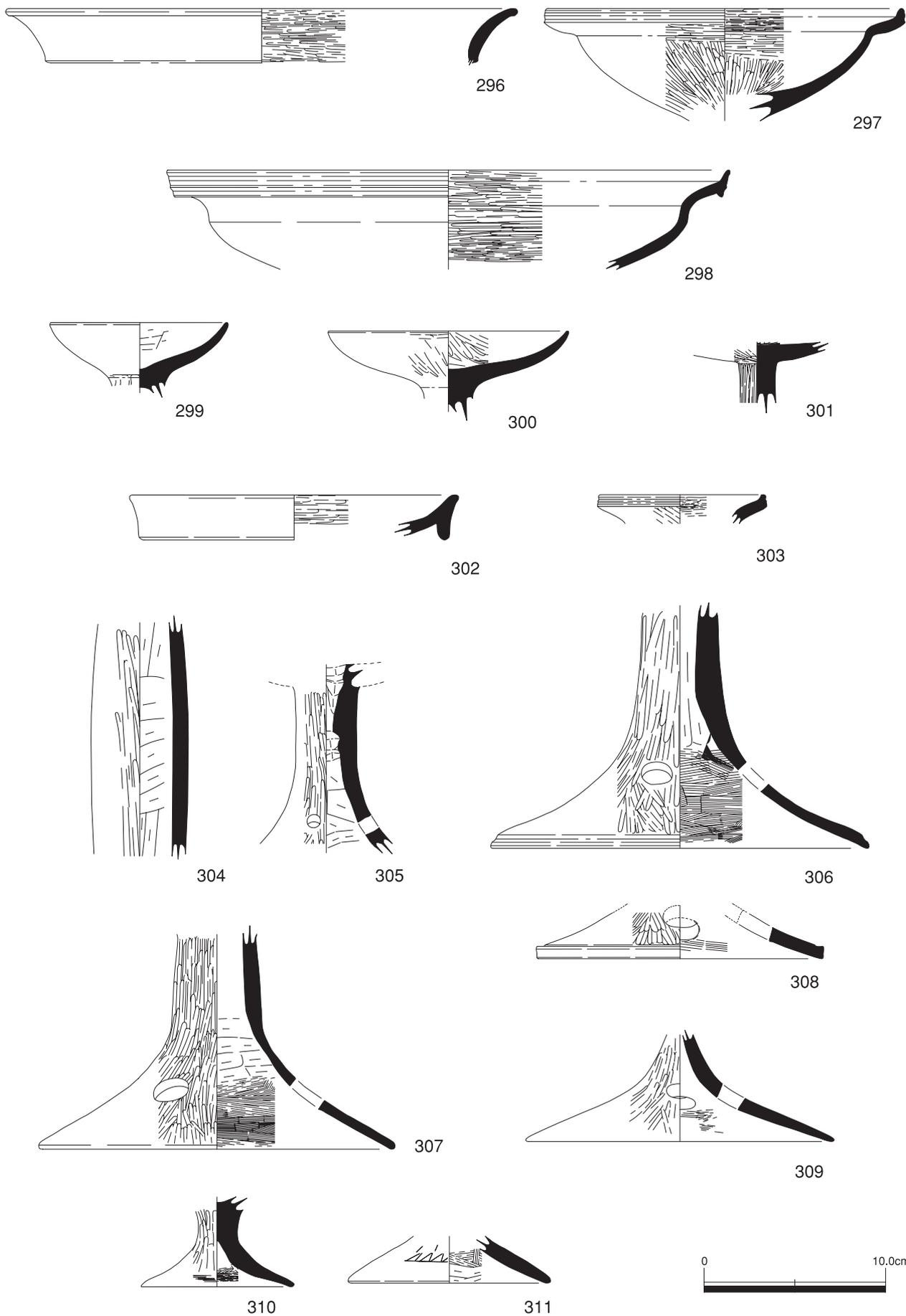
第46图 溝05下層土器群③



第47图 溝05下層土器群④



第48図 溝05下層土器群⑤



第49図 溝05下層土器群⑥

れる。外面はハケ、内面はハケ及びナデ調整が施される。(245)は(244)に比べ不安定な底部をもつ下膨れの体部から屈曲して直線的にのびる口縁部をもち端部は丸くおさめられる。外面はタタキ痕を残すハケ調整、内面はヘラケズリされる。(246)は口縁部が強く内湾しながら短く立ち上がる。

(247)～(265)は甕。(247)～(257)は口縁部の肥厚はみられないが、端部に面を持つ。(260)～(0301)は口縁部を若干上下に肥厚させるタイプで、内面はヘラケズリ。(258)は口縁端部を上方につまみ上げ気味に肥厚する。(260)～(263)は複合口縁をもつ甕で、屈曲部が不明瞭な受け口状を呈するもの(260)、上方に短く立ち上がる二次口縁をもつもの(261)、上下に肥厚するが上方への肥厚が強いもの(261)・(262)がある。(263)は大型の甕で、口縁端部に擬凹線を施し、肩部には大きな環状把手がつく。外面はタタキの後ハケ調整、内面はヘラケズリされる。(264)は口縁部を欠くが、耳状把手をもつ甕胴部。

底部には、安定したしっかりしたもの突出するもの、尖底志向のものなど多様である。

(283)は手焙り形土器で、胴部の屈曲部に刻み目の凸帯をもち内湾する口縁端部に1条の凹線がみられる。外面はハケ、内面はナデ調整される。

鉢には、直口する口縁部のもの(284～286)と、屈曲して外反するもの(287～289)がある。(284)は内湾気味に直口する口縁部で、穿孔された尖底部をもつ大型のもの。(285)・(286)は底部から短く直線的に開く小型鉢で、突出気味の平底のもの(285)と中央部がくぼみドーナツ状を呈するもの(286)がある。(287)は体部から屈曲して短く折り曲げたような口縁部をもつ。(288)・(289)は屈曲して短く内湾気味に開く口縁端部をつまみ上げ気味に肥厚して端面をつくりだす。(290)～(293)は台付鉢の脚部。

高坏では、屈曲する坏部のもの(294～296)、複合口縁を有するもの(297・298)、碗形の坏部のもの(299・300)がある。屈曲する坏部のもでは口縁端部に面を持つ(294)、下方に肥厚させ端面に1条の沈線を施す(295)、坏部の屈曲部に凹線をもち口縁端部は丸くおさめる(296)がある。複合口縁タイプでは、深い碗状の坏部から屈曲して内湾気味に広がり、口縁端部が直立気味に肥厚し端面に2条の擬凹線を施す(297)、腰の張った浅い碗状の坏部から屈曲して外反し口縁端部を上下に肥厚し、端面に2～3条の不明瞭な擬凹線を施す(298)がある。

器台には、口縁端部を下方に大きく肥厚させ、端面はナデ調整による(302)、上方につまみ上げ端面に2条の沈線を施す小型の(303)がある。

(304)～(311)は高坏、器台の脚部。(304)は内湾気味に筒状を呈する。(305)～(309)は大きく外反して広がる裾部に3方の円形穿孔を施し、端部を肥厚して面を持つもの(308)、擬凹線を施すもの(306)、丸くおさめるもの(307・309)がある。(310)・(311)は比較的小型で、(311)は裾部に鋸歯文がみられる。

これらの土器群は、上層土器群に比べ若干古手の様相を示しており、弥生後期後半～後期末に相当すると考えられる。

〈下層出土遺物〉

(312)～(326)は壺。広口壺は多様な口縁部形態を有する。(316)は直線的にのびる短い頸部に短く外方に折れ曲がった端部を持つ。(317)～(319)は口縁端部を上方もしくは上下に肥厚するもので、(319)は内面に木葉状のヘラ描文が施される。(313)(314)は大きく肥厚した口縁端部に波状文+円形浮文、波状文+円形刺突文が施される。(313)は内面にも波状文が施される。(320)は(323)と同一個体となる長頸壺であろう。頸部下端には「U」字状の浮文がつけられる。内外面ともにハケ調整される。(321)、(322)は直口壺で緩やかに外反するものや内湾気味のものがある。(324)は中国地方に類例の多い装飾壺の胴部屈曲部の一部であると思われる。屈曲部に凸帯をもち、縦に棒状浮文を配し、凸帯下端に2条の凹線を施す。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整される。(326)は丹波丹後系の二重口縁大型壺で、直立する頸部から屈曲して外反し、端部は直立気味に上方へのびる。端面には4条の擬凹線文が施される。

(327)～(344)は甕。(327)～(333)は口縁部の肥厚が弱く、端部は狭い面をもつ。体部の残るものでは、外面調整で、タタキが明瞭に残る(331)やハケによって消される(328)・(332)・(333)がある。いずれも内面はヘラケズリ。(334)～(343)は口縁端部を上方につまみ上げ気味、もしくは上下に肥厚してしっかりした端面をつくりだすもので、端部に擬凹線を施すもの(335)・(337)・(338)・(343)もある。体部の調整は、(337)が若干タタキ痕が残すものがあるが、ハケ調整により仕上げられている。(344)はミニチュア土器で、受け口状の口縁部をもち、外面はハケ調整、内面はヘラケズリされる。

これらの甕の口縁部成形態においては、上層土器群に比べ口縁部の肥厚の度合いも弱く、明瞭な複合口縁を呈するものも少ないことから、若干の時期差を反映しているものと思われる。

鉢では、平底で内湾気味に立ち上がる直口口縁の(356)や台付の碗形鉢(357)がある。

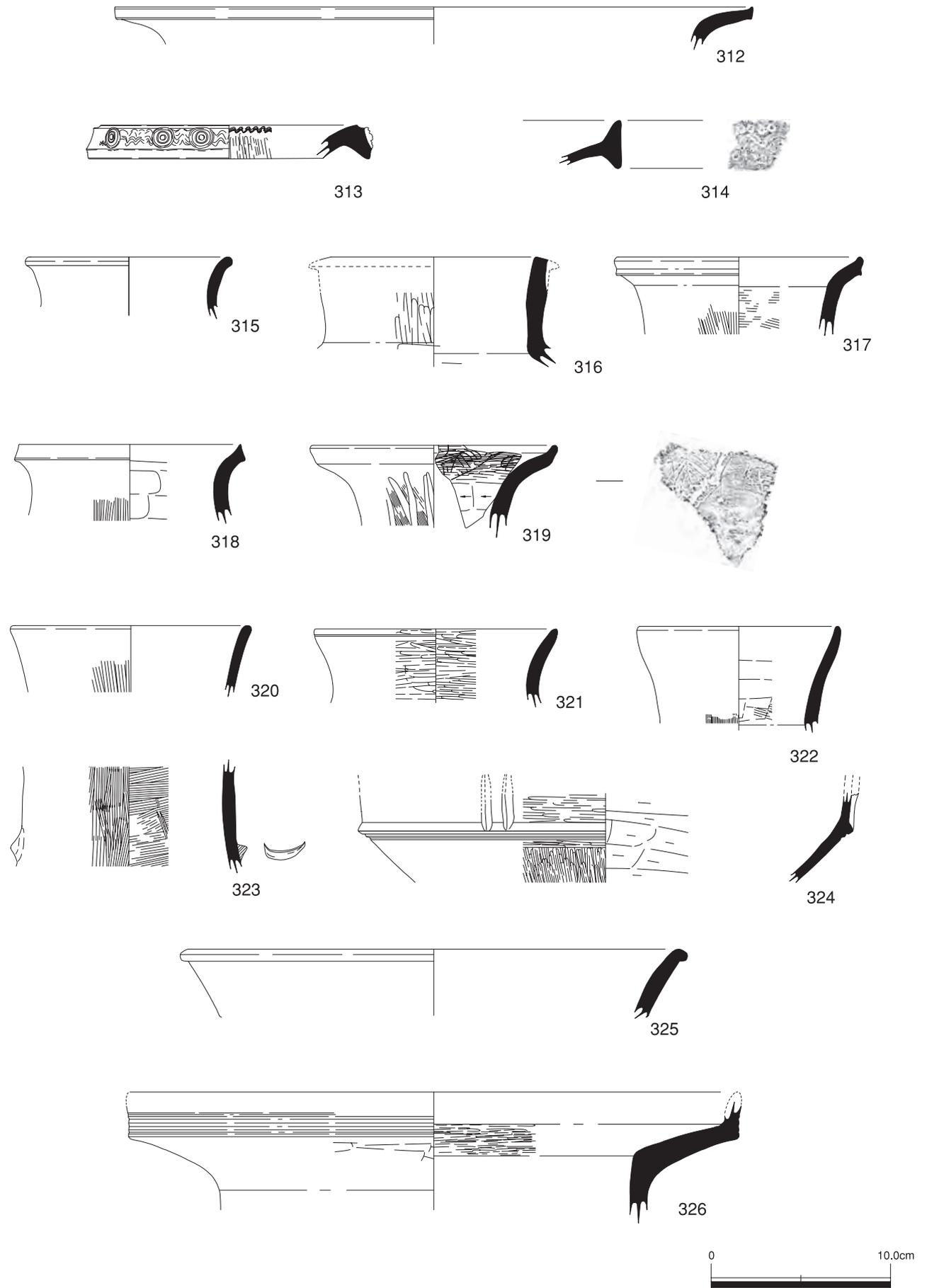
(358)(359)は鉢もしくは高坏と思われる口縁部。(358)は碗形で、口縁端部には擬凹線がみられる。(359)は上下に肥厚した端部外面に明瞭な2本の擬凹線が施される。

(360)・(361)は複合口縁をもつ高坏。(360)は坏部から弱く屈曲して開く二次口縁をもち口縁部には擬凹線をもつ。(361)は「く」字形に屈曲し、口縁端部を上方に大きく拡張して擬凹線を施す。内外面ともに丁寧なヘラミガキ。

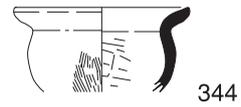
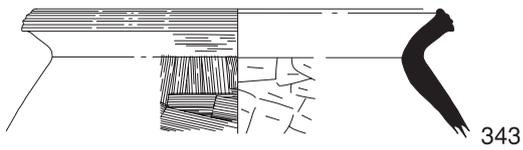
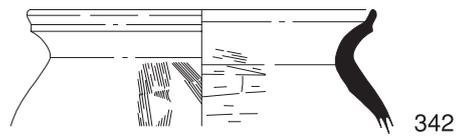
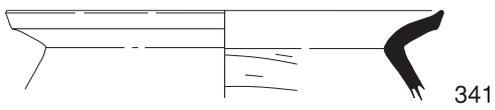
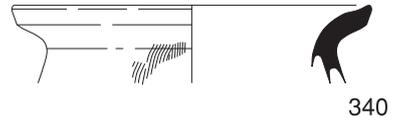
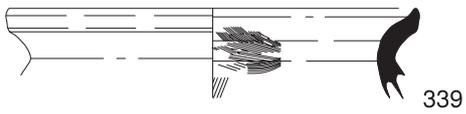
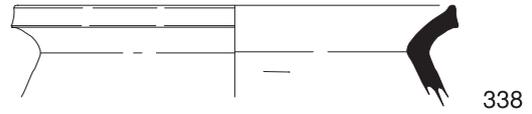
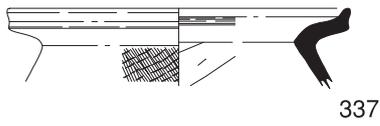
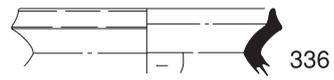
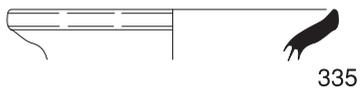
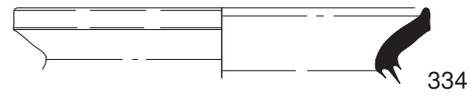
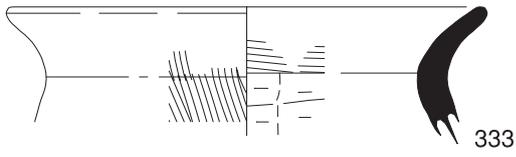
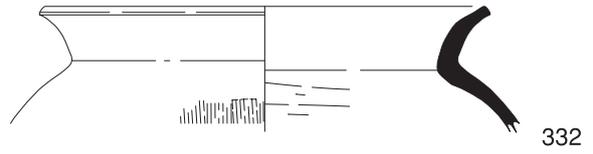
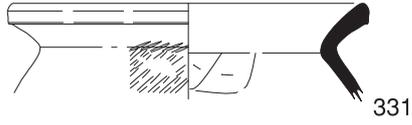
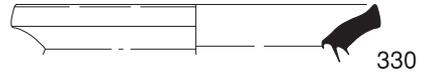
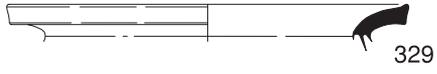
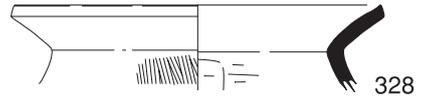
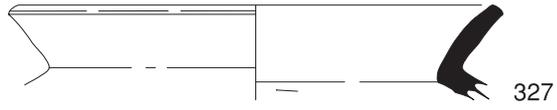
(362)～(368)は台付器種の脚部。(362)は外面ヘラケズリで未調整、(363)は脚裾部内面に粘土接合による段を残すなど、調整の粗いものもみられる。

(369)～(376)は高坏、器台の脚部。脚端部は丸くおさめるものが多く、(370)は1条のしっかりした擬凹線を施す。

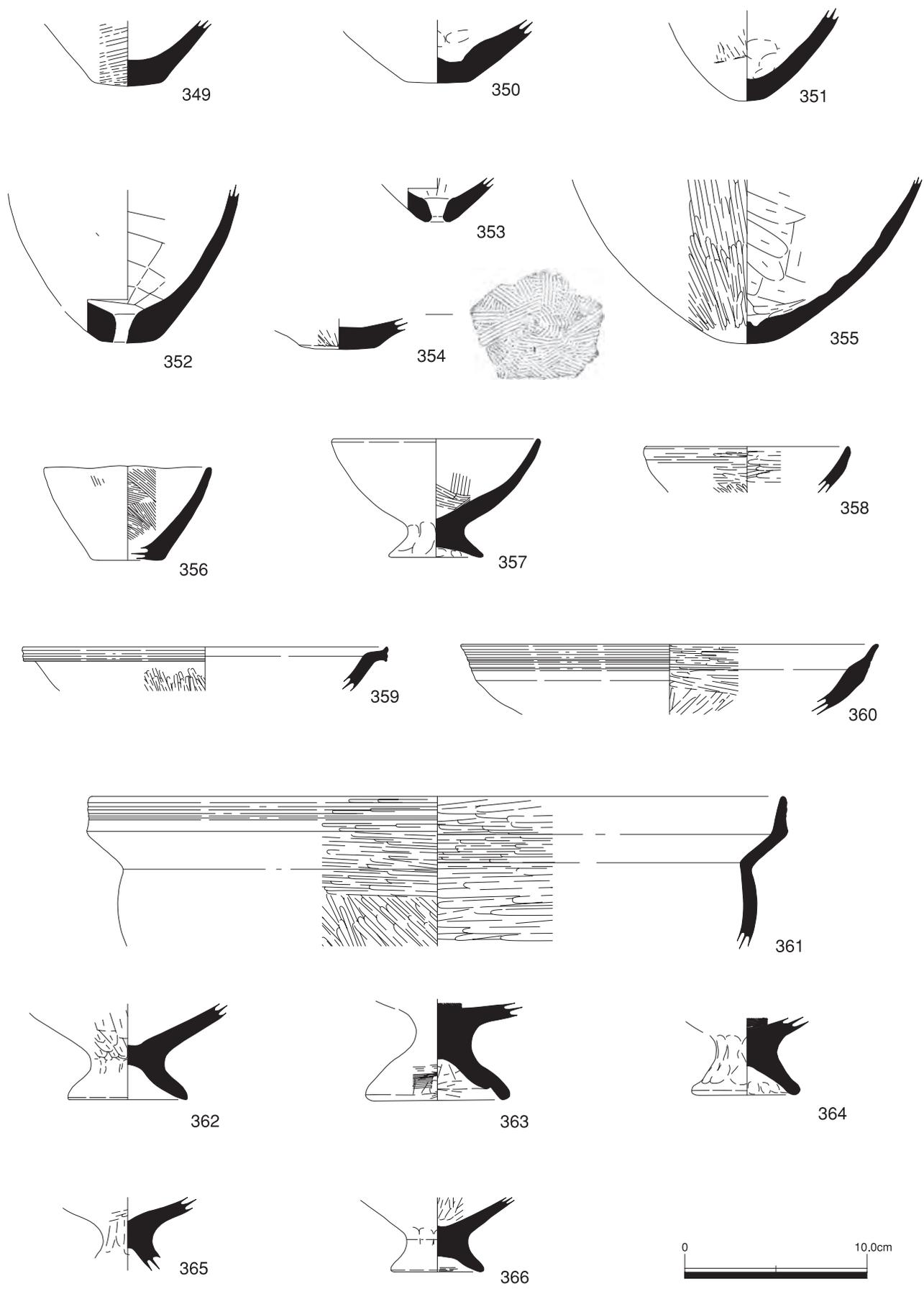
(377)は平安時代後半の山茶碗底部。溝という遺構の性格上、下層からは(396)1点のみであるが、中層・上層からも時期を大幅に異にする小片が、数点混入して出土している。



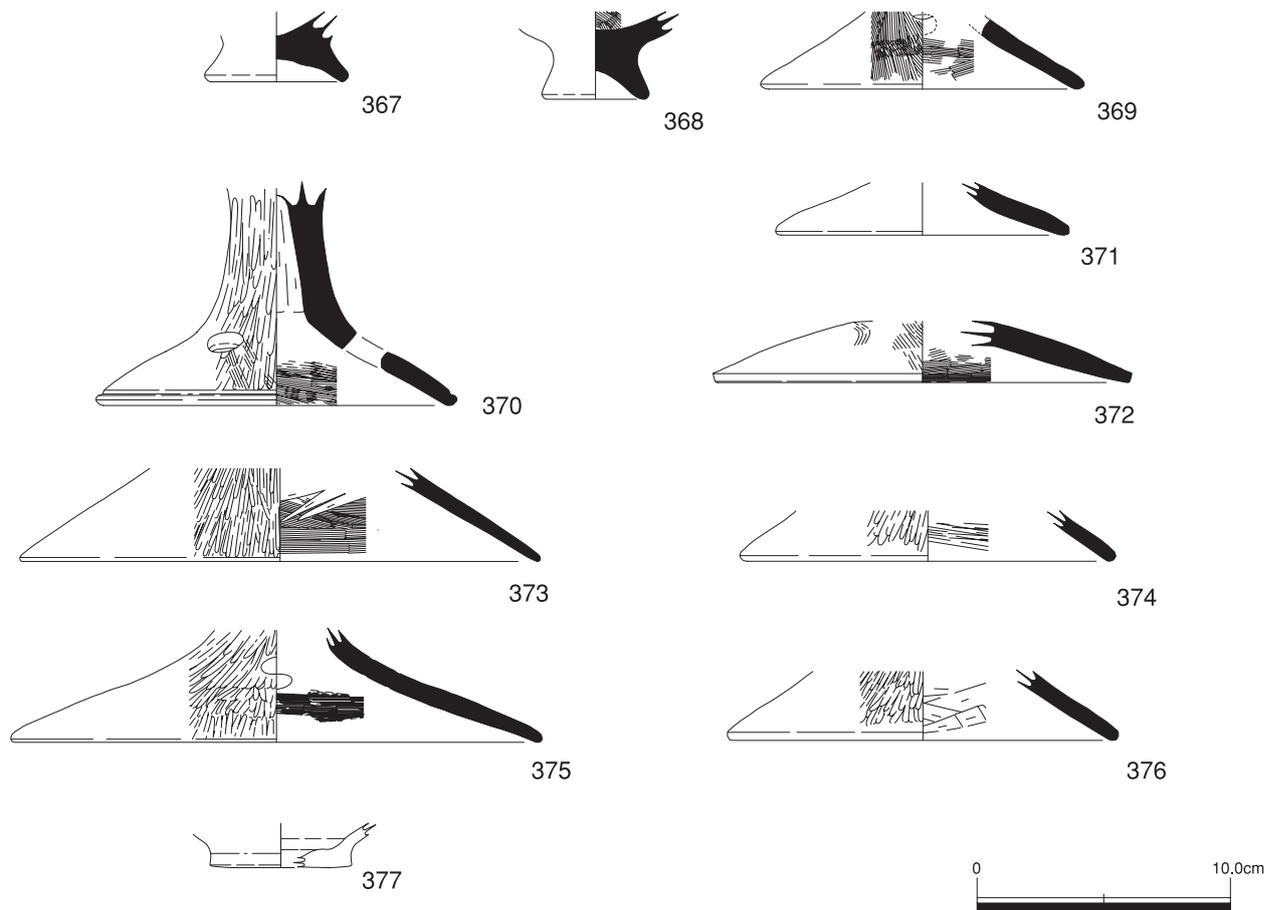
第50图 溝05下層出土遺物①



第51図 溝05下層出土遺物②



第52図 溝05下層出土遺物③



第53図 溝05下層出土遺物④

〈SD05その他の遺物〉

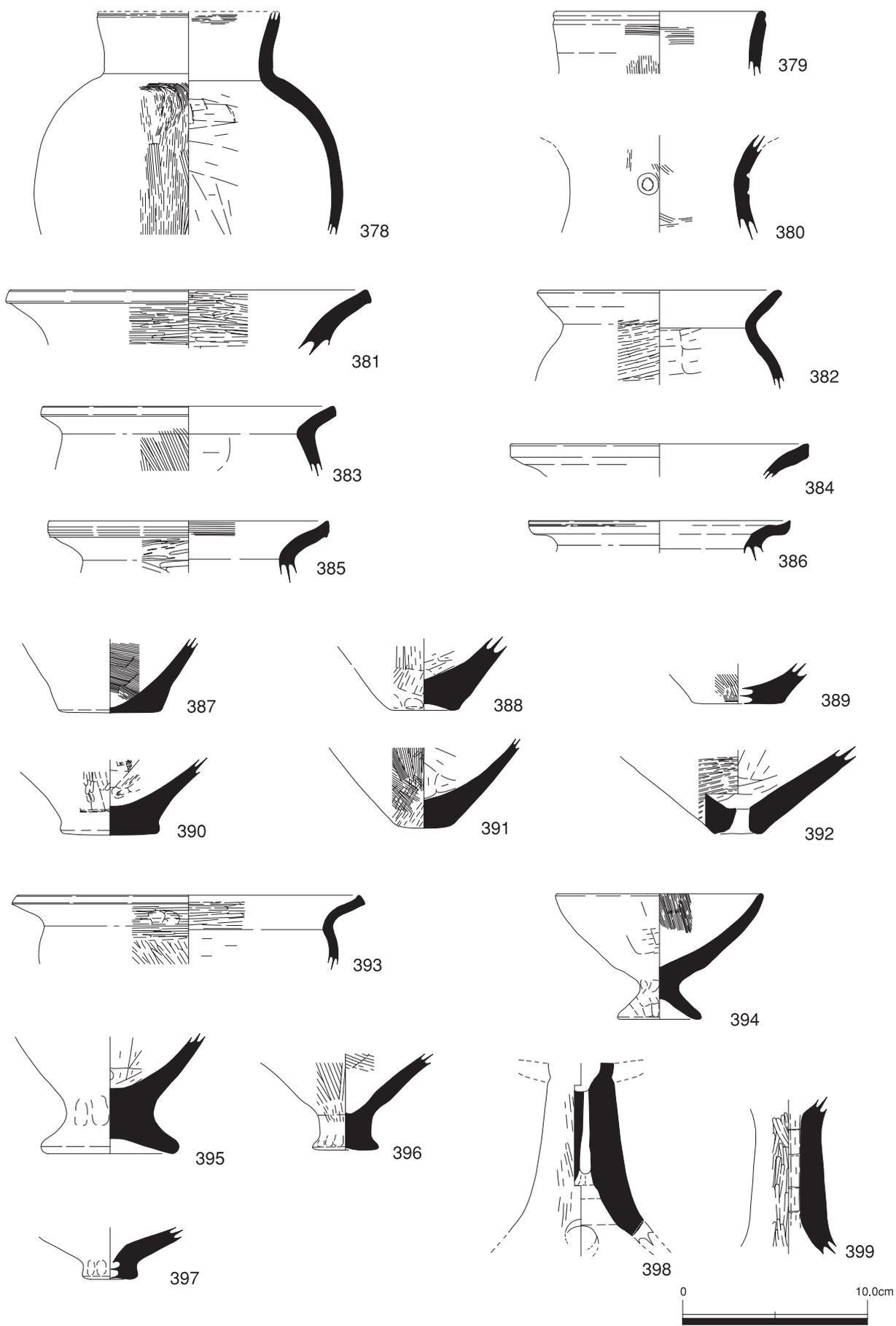
SD05がSD06と分流する付近は、比較的堆積の層異が乱れており、上・中・下層に分けて遺物を取り上げることができなかつたため、層位不明のものをここで取り上げる。

(378)～(381)は壺。(378)は球形の体部から屈曲して直線的に外反する短い口縁部をもち、端部に擬凹線を施す。外面はハケ調整の後ナデ、内面ヘラケズリ調整。(379)も直口壺口縁部と思われ、口縁端部には擬凹線を施し、内外面ともにハケ調整される。(380)は広口壺頸部片で、頸部中位に円形の刺突文がみられる。(381)は二重口縁広口壺の二次口縁部分。短く外反する口縁端部にはしっかりした面を持ち、一次口縁との接合部が良好に観察される。

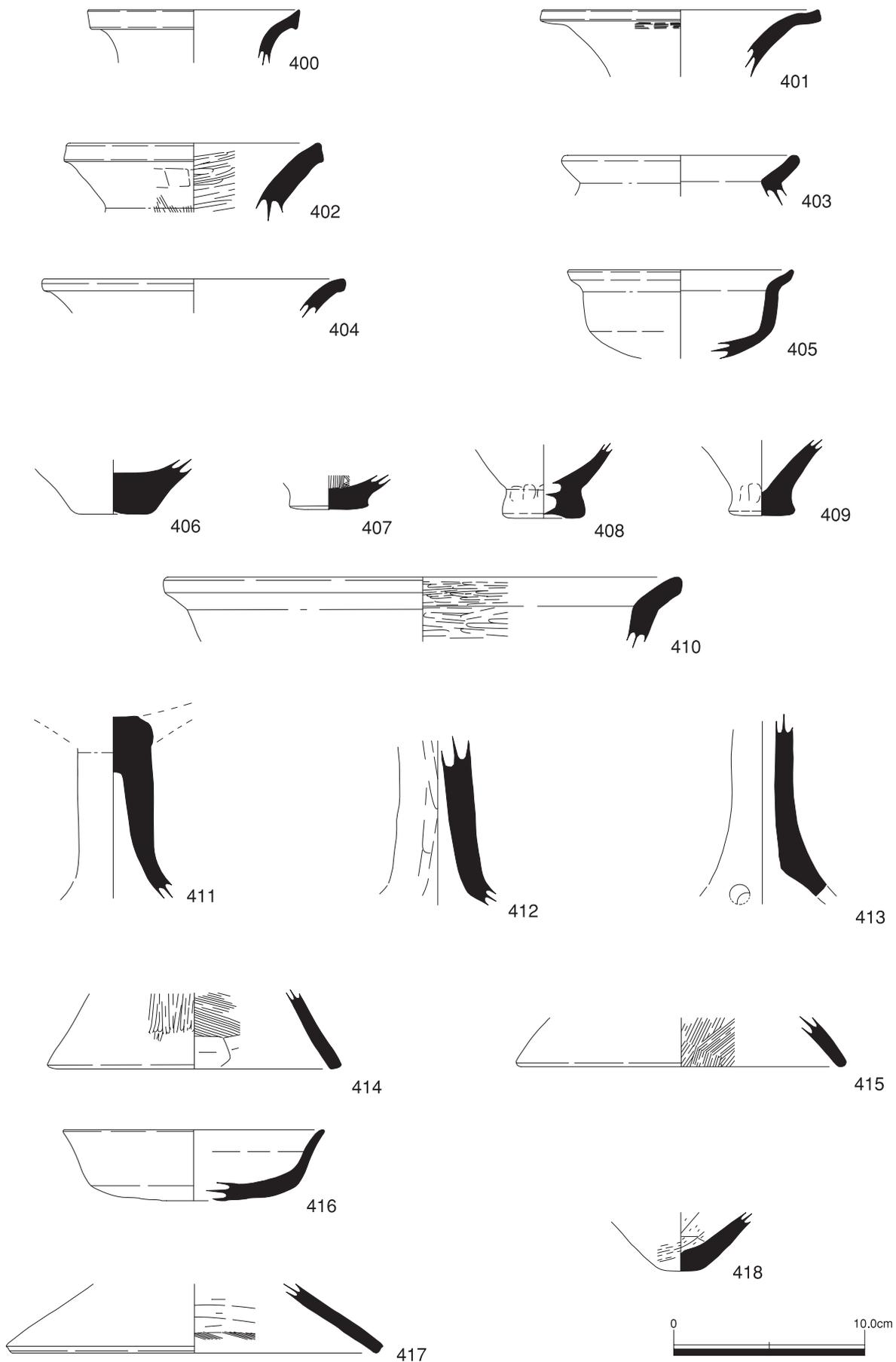
甕では口縁端部に狭い面を持つもの(382)～(384)、上方へ短くつまみ上げ気味に拡張し、端面に擬凹線を施す(385)・(386)がある。鉢は、「く」の字状に屈曲する口縁端部を若干上下に肥厚して面を持つ(393)や台付の直口鉢(394)がある。(398)は高坏脚部で、柱実部に棒状のもので坏部方向より突き刺した痕跡がみられ、成形段階の痕跡であると思われる。

・溝06 (SD06)

SD05との分流地点から東南方向にのびた後、南方に向きをかえて流れる幅1.5m～3.3mの溝



第54図 溝05出土遺物



第55図 溝06・07 (SD06・07) 出土遺物

で、南側に向きをかえる部分から溝幅が増す。深さは約 3.5 mをはかる。埋土は基本的に暗褐色シルト層－黒褐色粘質土層－褐灰色砂礫層の順で堆積しており、SD05 に比べ上層のシルト層が厚い。溝内からは弥生時代後期～庄内期を中心とする遺物が出土しているが下層から少量ながら、奈良時代後半～平安時代前半の坏や須恵器片が出土している。

(402) は器壁が厚く、内面ヘラミガキ調整が施され、器台の可能性はある。(405) は器壁が荒れて調整は不明だが、深い碗形の坏部から「く」の字形に屈曲し、端部を上方につまみあげた受け口状を呈する小型高坏もしくは台付鉢。(416) は、土師質で肉厚の器壁を持つ坏Aで、底部は回転ヘラ切り未調整。

・溝07 (SD07)

SD07 は、SD05 を切り込んで南東方向に向けてのびる幅 75 ～ 82 cm、深さ約 22 cmの溝。埋土は暗褐色シルト層を主とし、その下層に薄く黒褐色粘質土層－褐灰色砂礫層が堆積している。埋土から出土した遺物は小片が多く図化できたものは少ない。

・その他の出土遺物

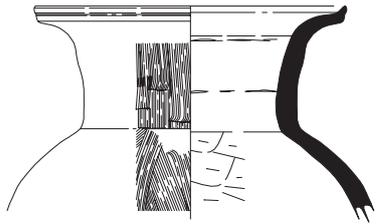
(419) は上方に短くつまみあげて拡張した口縁端面に擬凹線を施す広口壺。外面は丁寧なハケ調整、体部内面はヘラケズリされる。(420) 二重口縁の広口壺もしくは器台の口縁部で、屈曲部には擬凹線がみられる。

(421) ～ (430) は甕で、口縁端部を丸くおさめる (421)、端部に狭い面を持つ (422) ～ (425)、上方につまみあげ気味に終わる (426) ～ (430) があり、(427・429) には擬凹線がみられる。

高坏では、口縁部が短く外反する (441)・(442) と直口で碗状 (443) がある。

鉢では、上方に拡張した口縁部に多条の擬凹線を施す (445)、(446) がある。

須恵器捏鉢 (451) と製塩土器 (452) は奈良時代に下る遺物。下層遺構検出のための掘削時の上層から出土している。



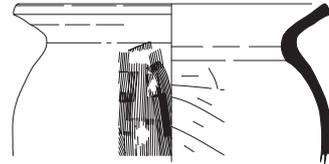
419



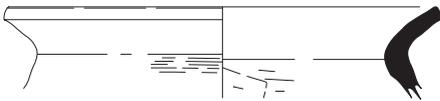
420



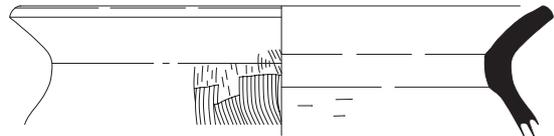
421



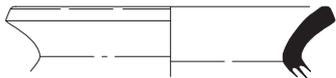
422



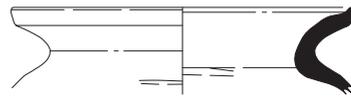
423



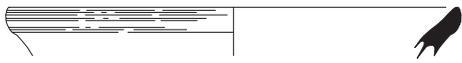
424



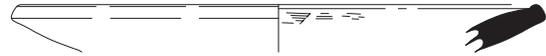
425



426



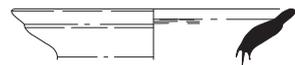
427



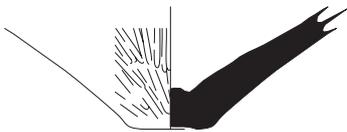
428



429



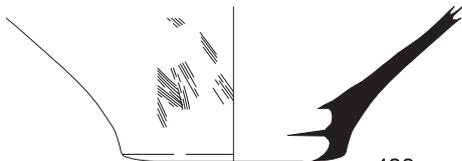
430



431



432



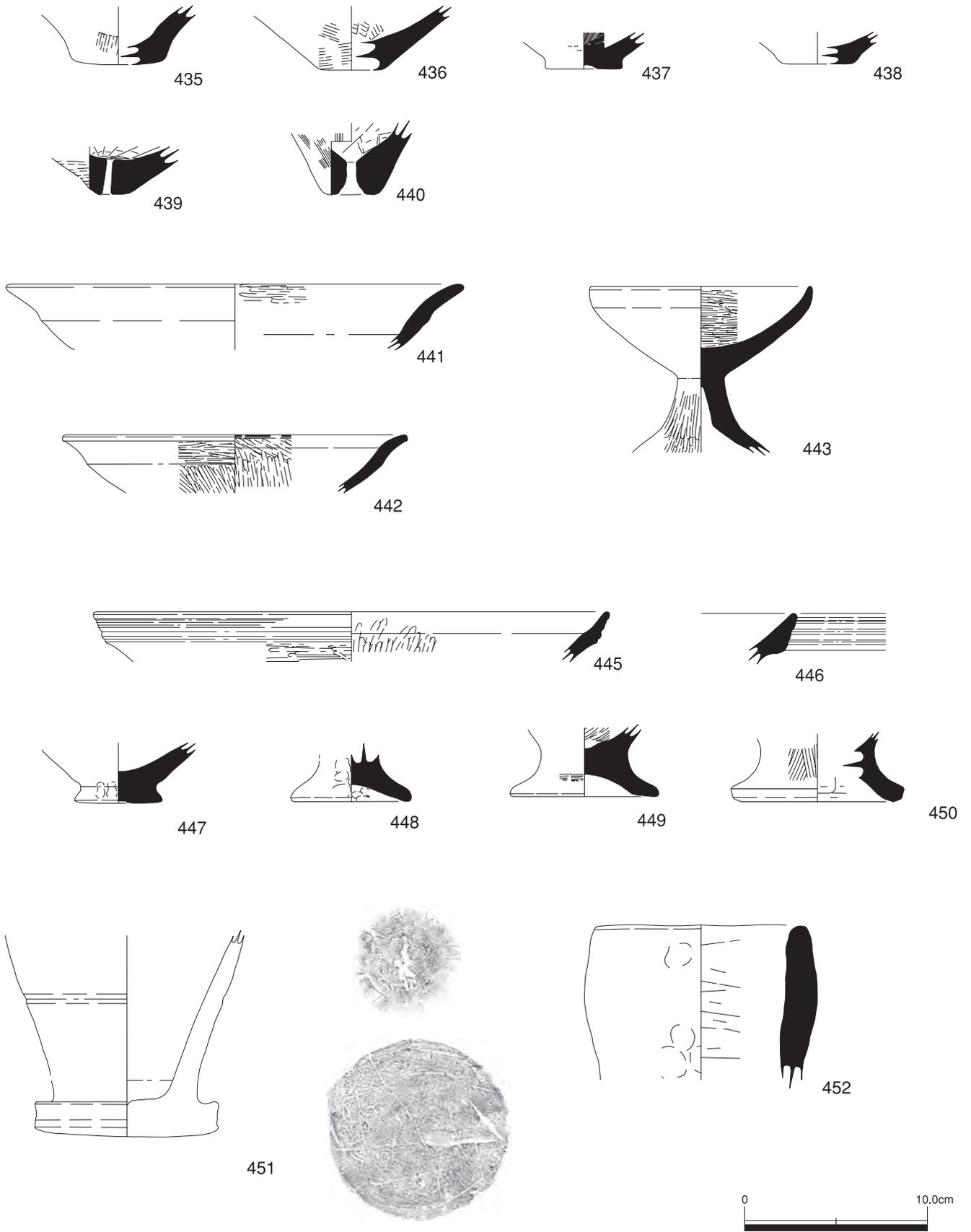
433



434



第56図 下層包含層出土遺物①



第57図 下層包含層出土遺物②

Ⅲ ま と め

1 はじめに

田野口・窺町遺跡は、中町東線建設に伴い平成16年度から調査が行われ、今回で3年目の調査となる。平成16年度に行われた1・2区の調査においては奈良時代の井戸、溝が検出され、墨書土器、暗文系土師器、多量の製塩土器が出土している¹⁾。平成17年度に行われた3～5区の調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居址1棟、奈良時代の建物2棟をはじめ平安時代後期～鎌倉時代前半の建物群が検出されている²⁾。今回の調査はこの5区西側、町道をはさんで隣接する位置にあたり、平安時代後期～鎌倉時代前半を中心とする上層遺構面と弥生後期～庄内期を中心とする下層遺構面の2面の遺構面が検出された。下層遺構面においては、多可町内では比較的資料が少なかった弥生時代後期～庄内期の遺物が、竪穴住居址1棟とSD05から比較的まとまって出土した。以下、これらの土器について若干の検討を行う。

2 弥生後期後半～庄内期の土器の地域性

今回、下層より出土した遺物は、大半がSD05からである。上層土器群、下層土器群を比較すると、新古の様相がみうけられるものの、溝という遺構の性格上、厳密に層位的な時期差を捉えられるものではなく、時期的細分を行える良好な資料とはいえない。したがって、詳細な時期的検討は難しく、概ね弥生後期後半～庄内期前半の範疇におさまる資料群として捉えられる。

ところで、但馬、丹波と境を接する播磨北東端に位置する当地域は、弥生後期～庄内期には、従来より、瀬戸内系もしくは畿内系と日本海系もしくは北近畿系の土器様式が入り混じる様相が指摘されており、当遺跡出土遺物においても同様の様相がみられる。そこで、資料数が多く、時期的、地域の特徴が現れやすい甕を中心に、その様相を具体的に検討してみたい。

検討にあたり甕について形式分類を行った。

甕A1……伝統的V様式甕で、口縁端部に面をもつ。

甕A2……伝統的V様式甕で、口縁端部を丸く収める。

甕A3……伝統的V様式甕で、口縁端部を上下に肥厚する。

甕A4……口縁端部に強いナデを施す、もしくはつまみあげる。

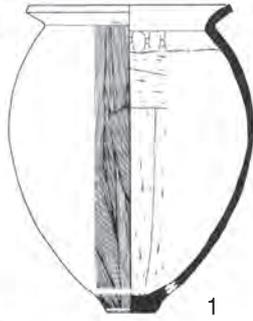
甕A5……受け口状を呈する。

甕B……口縁端部を肥厚し、端面に凹線・擬凹線を施す。

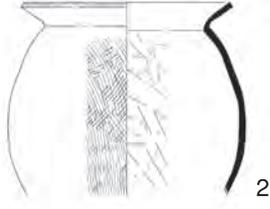
甕C1……複合口縁で端部外面に擬凹線を施す。

甕C2……複合口縁で、端部外面は擬凹線を施さずナデによる。

【甕 A1】

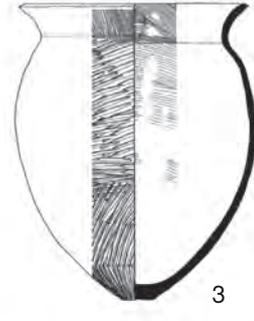


1



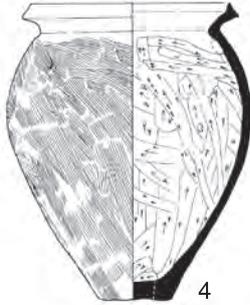
2

【甕 A2】

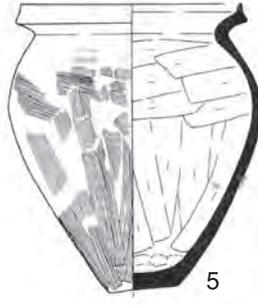


3

【甕 A3】

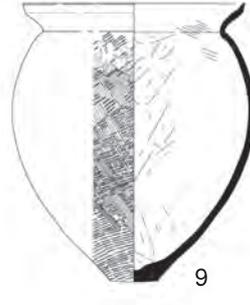


4

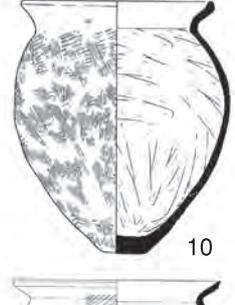


5

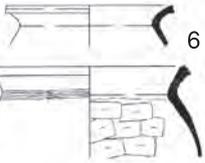
【甕 A4】



9



10



6



8



11

【甕 A5】



12

【甕 B】



13

(多可西脇地域)



14

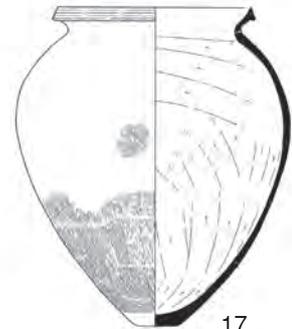


15

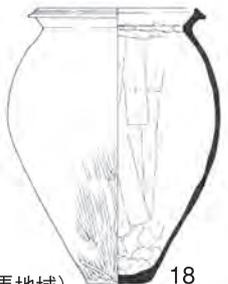
(南但馬地域)



16

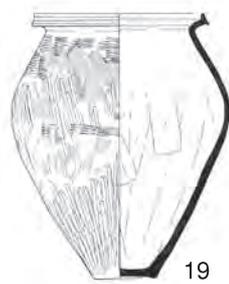


17

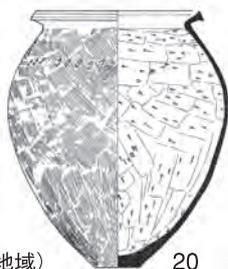


18

(北但馬地域)



19



20

(丹波地域)

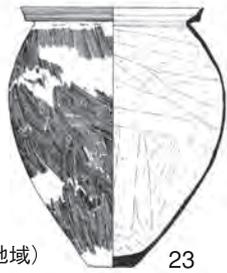


21



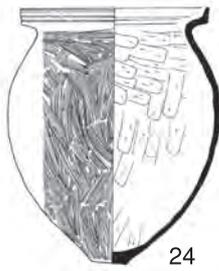
22

【甕 C1】

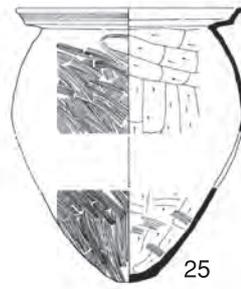


(丹後地域)

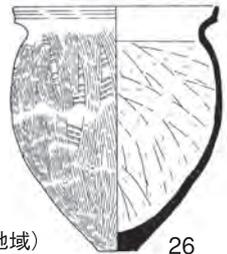
23



24

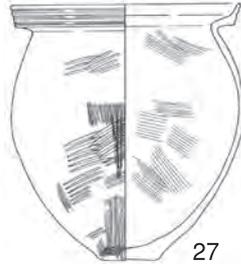


25

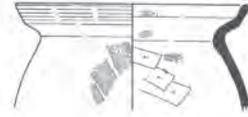


(丹波地域)

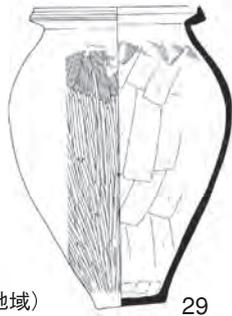
26



27

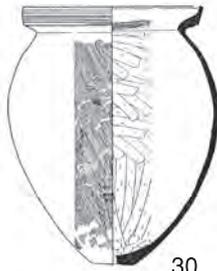


28

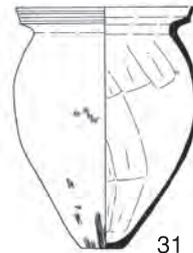


(但馬地域)

29

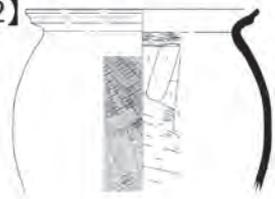


30



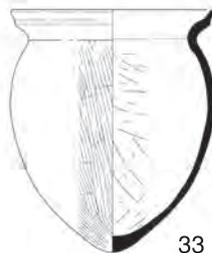
31

【甕 C2】



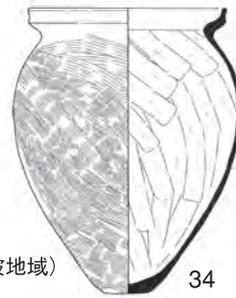
32

(多可西脇地域)



33

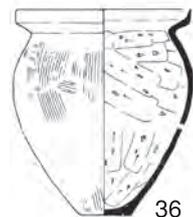
(丹波地域)



34

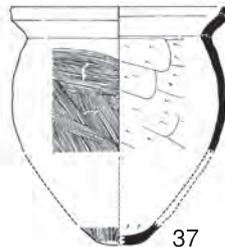


35

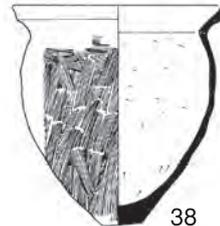


36

(丹後地域)



37



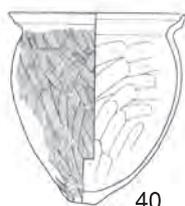
38

【甕 D】



39

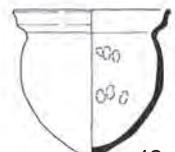
(但馬地域)



40



41



42

甕D…………山陰・北陸系の複合口縁甕。

上記の分類に従い、北近畿地域、多可西脇地域、東播磨地域（加古川流域）の代表的な遺跡を抽出し、その割合をグラフに表したものが図1～8である。各地域毎にみてる。

【丹後地域】

擬凹線を施すいわゆる丹後系土器を生み出した地域。後期前半には口縁部を肥厚させるA1cと、その端部に凹線、擬凹線を施すBが一定量を占めるが、後期中頃から複合口縁タイプの甕Cが占める割合が増加し、後半には擬凹線を施すC1を主体とする典型的な丹後系甕が成立、庄内期には擬凹線を施さずナデによるC2の割合が増してくる。また、山陰・北陸系影響も現れはじめる。このことは後期後半に擬凹線土器様式が確立、発展し、庄内期には北陸系、機内系の影響の下、在地様式の変容、崩壊へ向かうという指摘に合致した変化を示している。

【丹波地域】

丹波は由良川流域に広がる京都丹波、加古川と由良川の上流域、分水界周辺と篠山盆地に広がる兵庫丹波にわかれ、それぞれ、若干違った様相を呈する。京都丹波では、後期中頃以降、隣接する丹後地域と同様、複合口縁の甕Cタイプを主体とするが、庄内期に入ると、擬凹線を施さないC2が主体となるとともに、畿内系の伝統的V様式甕や庄内甕の影響を受けるA1タイプが一定量を占める。兵庫丹波では後期後半段階の畿内的なA1と擬凹線を持つBがそれぞれ一定量を占める状態から、後期末～庄内期前半には、擬凹線土器の占める割合が急増した後、再び庄内甕の影響を受けたA2の割合が増加するとともに、山陰・北陸系の影響もみられはじめる。一方篠山盆地では、後期後半～末では擬凹線土器の影響は顕著ではなく畿内的色彩が強い。しかし、庄内期に入り複合口縁甕が主流を占め、庄内期後半には再び畿内的色彩が強い様相を呈しており、加古川、由良川上流域の様相と足並みをそろえる。

【但馬地域】

但馬地域は豊岡市を中心とする北部と朝子市を中心とする南部に分けられ、若干様相を異にする。北部但馬地域では、後期～庄内期前半を通して複合口縁の甕Cが安定的に主体を占め、口縁端部の拡張を強くする方向で変化していく。前半期に一定量を占めていた甕Bは減少し、畿内的な甕A1a、甕A1bが割合を増してくる。一方南但馬地域では甕Bを主体とする後期前半から、後期後半～庄内期前半には甕Cの主体へと変化する。甕Cは後期後半～末のC1主体から庄内期のC2主体への変化がみられる。

北と南では後期前半には丹後地方に様相に近い甕Cを主体とする北と、中期の伝統を残す甕Bを主体とする南で様相を異にするが、後期後半以降Cを主体として足並みをそろえる。

【丹後地域】

	後期前半 桑飼上遺跡	後期前半 三坂神社墳墓群	後期前半 左坂墳墓群 G 支群	後期前半～中 大山墳墓群	後期後半 大山遺跡	後期後半 正垣遺跡	後期後半 古殿遺跡	後期後半 志高遺跡	後期末 古殿遺跡	庄内 桑飼上遺跡
A1a	0	5	6	2	0	1	3	3	1	0
A1b	0	0	0	0	0	2	2	0	2	0
A1c	0	12	14	4	1	0	0	0	0	1
A2	0	8	2	0	0	0	2	1	0	1
A3	0	1	0	1	0	0	2	0	0	0
B	19	6	11	14	0	0	1	12	0	2
C1	1	1	7	11	8	13	21	19	13	22
C2	1	0	4	1	2	9	3	2	9	14
D	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1
	21	33	44	33	11	26	34	39	26	41

【京都丹波地域】

	後期中～後半 松ヶ端遺跡	庄内中心 今安遺跡	庄内 新庄遺跡	庄内 青野遺跡
A1a	0	3	0	2
A1b	1	1	0	2
A1c	2	2	0	0
A2	0	3	0	1
A3	0	0	1	0
B	1	7	0	1
C1	17	13	1	0
C2	9	0	8	5
D	0	0	1	0
	30	29	11	11

【兵庫丹波 篠山盆地地域】

	後期後半～末 上板井遺跡	庄内中心 板井寺ヶ谷遺跡	庄内 西木之部遺跡	庄内 口坂本遺跡
A1a	13	6	7	3
A1b	0	2	6	7
A1c	3	3	2	0
A2	4	3	4	2
A3	1	4	3	0
B	2	0	0	0
C1	3	14	1	0
C2	2	24	4	2
D	0	3	1	0
	28	59	28	14

【兵庫丹波 中央部地域】

	後期後半 国領遺跡	後期後半 七日市遺跡	後期末～庄内 国領遺跡	後期末～庄内 七日市遺跡	後期末～庄内 大岡遺跡	庄内 七日市遺跡
A1a	7	11	0	2	12	1
A1b	0	1	1	0	17	6
A1c	1	4	0	0	0	0
A2	0	3	0	1	15	1
A3	0	0	0	1	4	0
B	7	8	4	2	4	1
C1	0	1	1	5	13	0
C2	1	1	1	7	38	2
D	0	0	0	0	3	4
	16	29	7	18	106	15

【南但馬地域】

	後期前半 東山墳墓群	後期前半～中 門谷墳墓群	後期前半～中 カヤガ谷墳墓群	後期末 鎌田・若宮古墳群	後期後半～庄内 立石墳墓群	後期後半～庄内 加陽土屋ヶ鼻遺跡	後期末～庄内 妙楽寺墳墓群
A1a	4	1	1	0	2	2	4
A1b	0	0	0	1	2	1	1
A1c	4	6	1	0	0	0	0
A2	1	0	0	0	1	0	1
A3	1	0	0	0	1	0	2
B	11	7	3	0	0	2	2
C1	17	11	1	4	6	2	12
C2	2	2	1	1	1	1	2
D	0	0	0	0	1	0	0
	40	27	7	6	14	8	24

【北但馬地域】

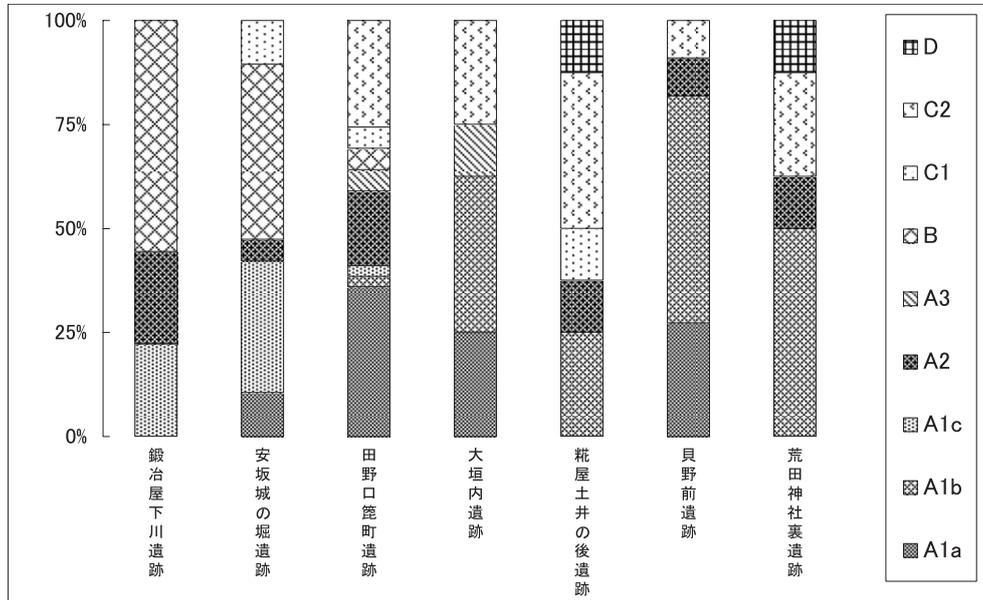
	後期前半 大盛山遺跡	後期前半 梅田東古墳群	後期前半 粟鹿遺跡	後期後半～庄内 加都遺跡 (I)	後期末～庄内 ムクノ木遺跡	後期末～庄内 粟鹿遺跡
A1a	6	1	7	2		2
A1b	0	0	2	0		1
A1c	4	1	4	0		2
A2	3	0	3	0	1	1
A3	0	0	0	0		3
B	18	6	27	2		3
C1	1	1	5	1	1	2
C2	0	0	1	6	9	4
D	0	0	0	0		0
	32	9	49	11	11	18

【多可西脇地域】

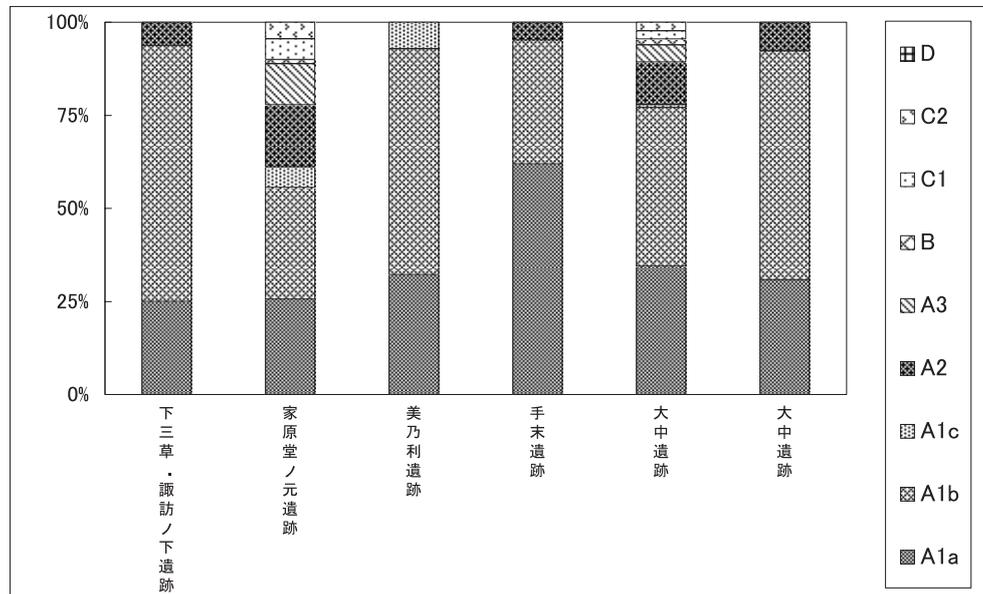
	後期前半 鍛冶屋下川遺跡	後期中 安坂城の堀遺跡	後期後半～庄内 田野口籠町遺跡	後期後半～末 大垣内遺跡	庄内 糞屋土井の後遺跡	庄内 貝野前遺跡	庄内 荒田神社裏遺跡
A1a	0	2	14	2	0	6	0
A1b	0	0	1	3	2	12	4
A1c	2	6	1	0	0	0	0
A2	2	1	7	0	1	2	1
A3	0	0	2	1	0	0	0
B	5	8	2	0	0	0	0
C1	0	2	2	0	1	0	0
C2	0	0	10	2	3	2	2
D	0	0	0	0	1	0	1
	9	19	39	8	8	22	8

【東播磨地域（加古川流域）】

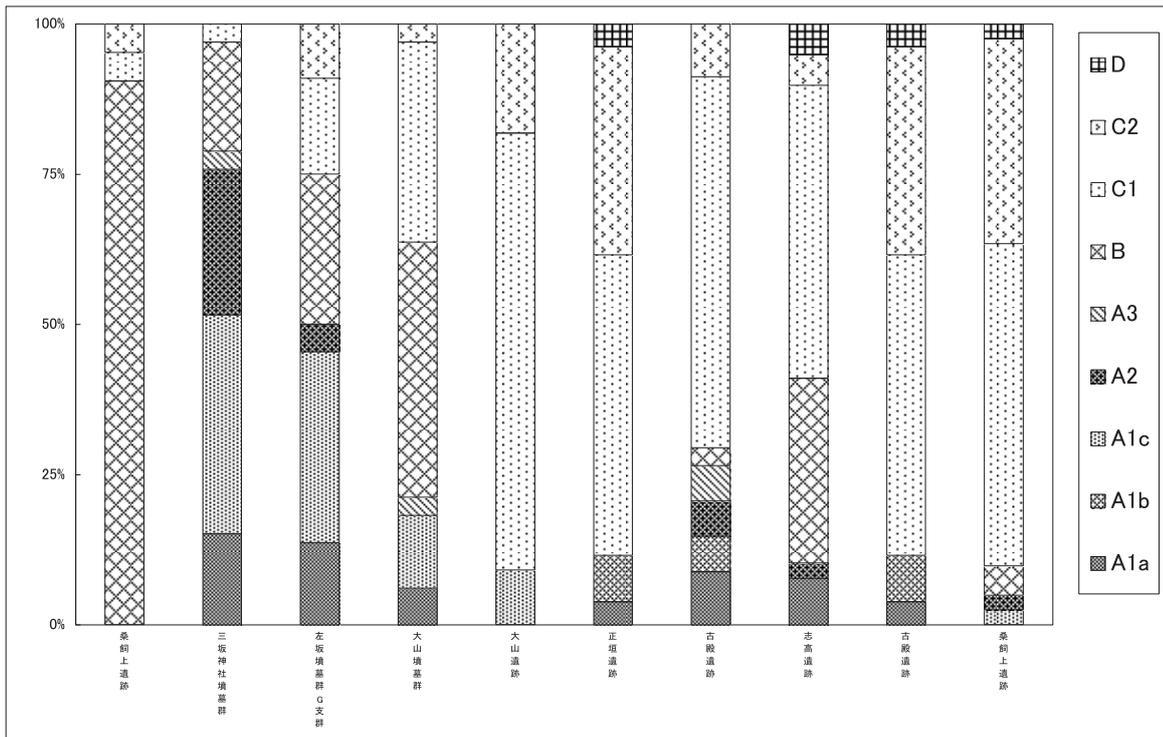
	後期後半 下三草・諏訪ノ下遺跡	後期末～庄内 家原堂ノ元遺跡	後期後半～末 美乃利遺跡	後期末 手末遺跡	大中Ⅰ～Ⅱ 大中遺跡	大中Ⅲ 大中遺跡
A1a	4	23	9	13	45	8
A1b	11	27	17	7	56	16
A1c	0	5	2	0	1	0
A2	1	15	0	1	15	2
A3	0	10	0	0	6	0
B	0	1	0	0	2	0
C1	0	5	0	0	3	0
C2	0	4	0	0	3	0
D	0	0	0	0	0	0
	16	90	28	21	131	26



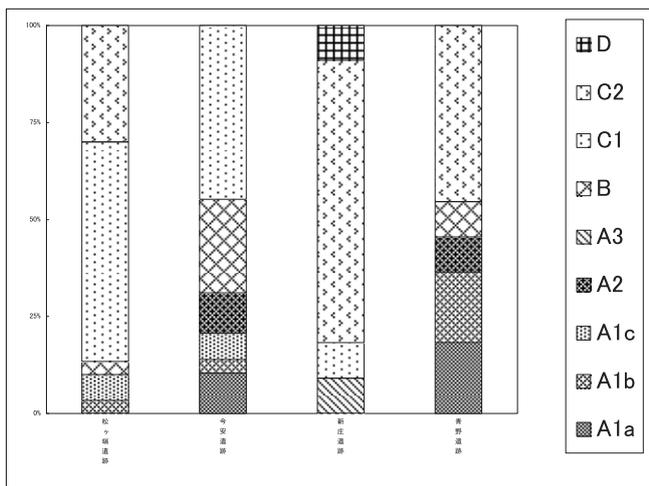
〔図1 多可西脇地域〕



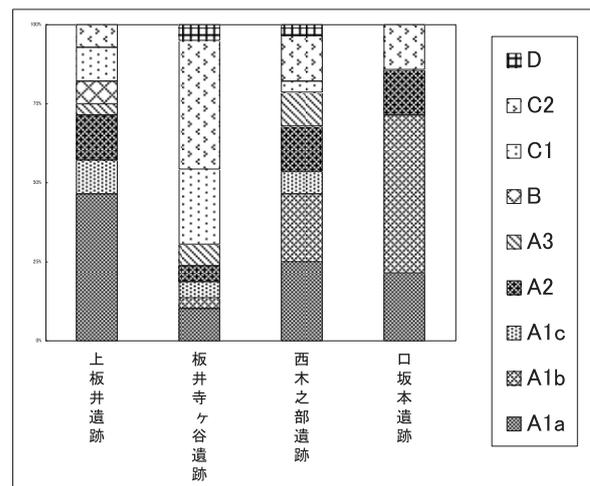
〔図2 東播磨地域(加古川流域)〕



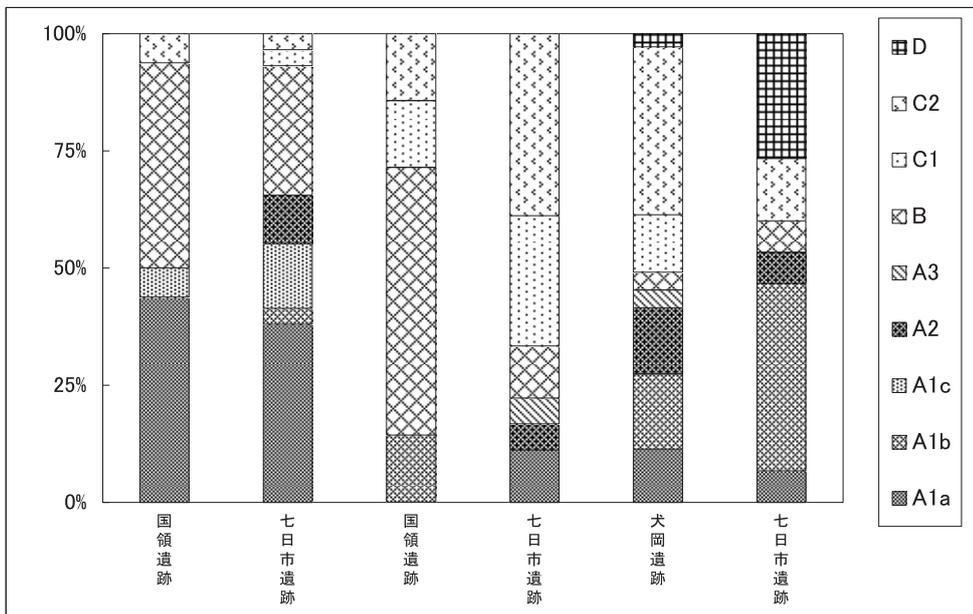
〔図3 丹後地域〕



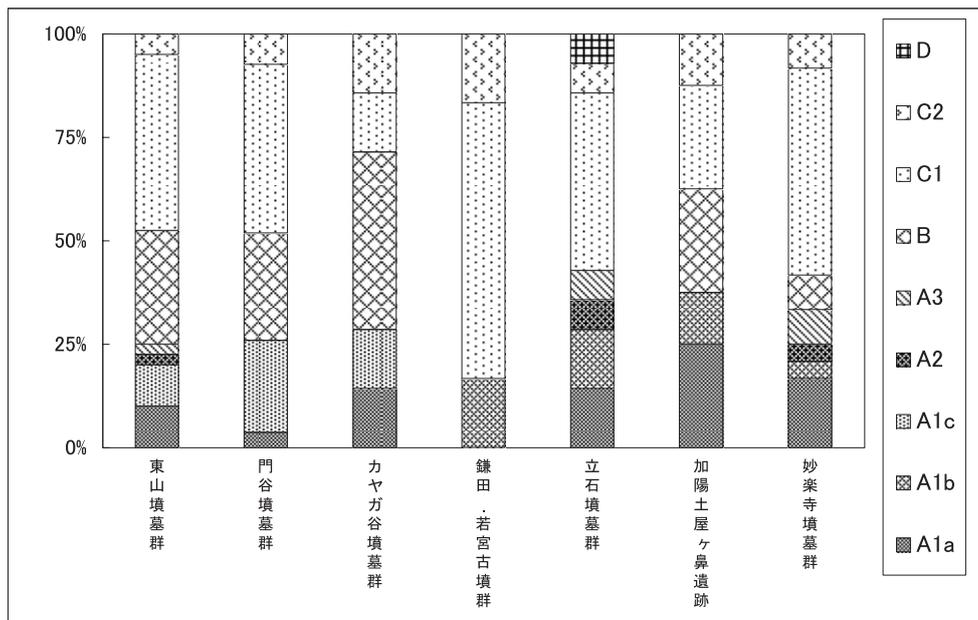
〔図4 京都丹波地域〕



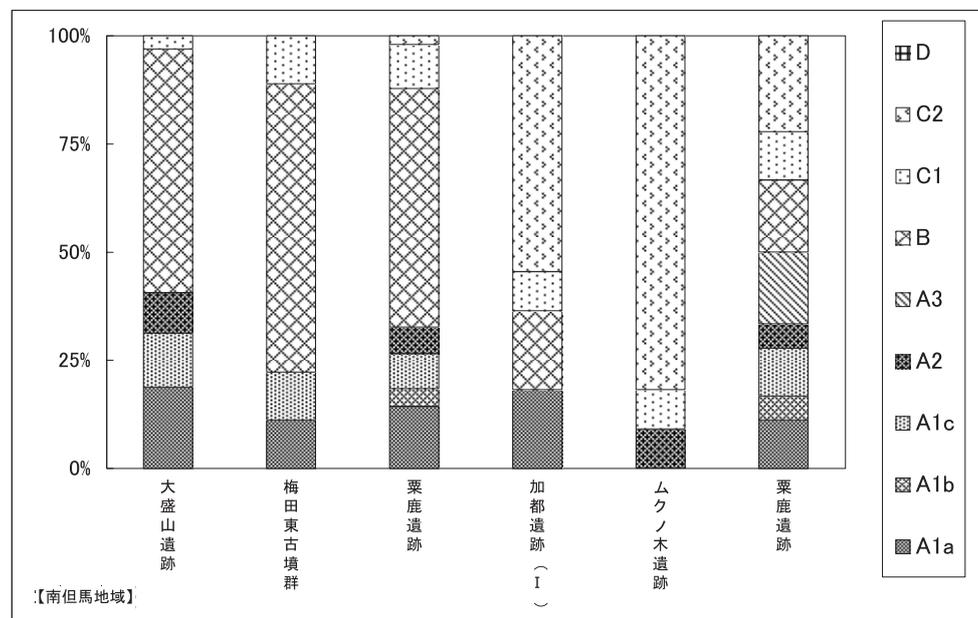
〔図5 兵庫丹波篠山地域〕



〔図6 兵庫丹波中央部地域〕



[図7 北但馬地域]



[図8 南但馬地域]

【多可・西脇地域】

多可・西脇地域では、後期前半には北近畿地域と同様、甕Bを主体とするが、後期末～庄内期には北近畿系の甕C2が一定の割合を占める田野口窠町遺跡や糶屋土井の後遺跡から、甕A1a、甕A1bを主体とする畿内の様相の強い貝野前遺跡や荒田神社遺跡への変化がみられる。また、隣接する加古川上流域に位置する西脇市大垣内遺跡においても、畿内系甕を主体としながらも、多可町同様に北近畿系の甕C2が一定量を占める。こうしたあり方は、当地域以南の加古川流域の遺跡の様相とは対照的であり、現在の行政区域では播磨に属しているが、弥生後期～庄内期前半にかけては、甕Cを中心とする北近畿系土器様式圏に属し、その最南端に位置していたと言える。

【東播磨の加古川流域】

現在の行政区分で当地域が属している播磨、特に加古川流域についてみると、当然ではあるが、上記までとはまったく様相を異にし、伝統的畿内V様式をベースにする土器様相である。

以上、北近畿地域及び多可・西脇地域の主体となる甕の様相を概観した。

北近畿地域では、後期前半については、いずれの地域も基本的に中期の凹線文を施す甕の形態を受け継ぐ甕Bを主体とし、口縁端部の施文は凹線から擬凹線へ変化する。後期後半には、大きな流れとして、丹後を中心として擬凹線土器様式が確立、発展。庄内期前半には山陰・北陸系土器様式の影響により変容、崩壊し、庄内期後半には、庄内系をはじめとする畿内土器様式の影響が強まり、布留式土器へと変化するすることが指摘されている。今回の検討を行った中でも、後期後半以降、複合口縁甕Cへと主体が変化するが、丹後・北但馬地域では甕C1が優勢であるのに対し、丹波、南但馬、多可・西脇地域では、甕C2が主体となっていることは注目される。また、丹後地域以外では近畿系甕A1が一定量を占めるが、加古川、由良川流域では丹後→京都丹波→兵庫丹波→多可・西脇地域と南に向かって暫移的に割合が増しており、このことは、地理的勾配に沿った畿内土器様式、北近畿土器様式の相互の影響力を示すものであろう。兵庫丹波中央部の七日市遺跡において山陰系の土器が一定量を占めているものの、全体的に、甕Cの後退と畿内系甕Aの増加にみられるように、畿内土器様式の影響により、北近畿土器様式の崩壊がはじまっているものと思われる。また、こうした北近畿土器様式の南限の一つが多可・西脇地域にあたるものと思われる。

以上、従来より言われてきた、北と南の中間に位置する当地域の畿内系と北近畿系が交錯する複雑な様相を、少し具体的にするため検討を試みた。しかしながら、資料数の制約、土器編年の未確立に加え筆者の勉強不足も手伝って、大雑把な検討となり、従来指摘されてきたことの追認に終わり、詳細な検討にまでいたらなかった。今後の資料の増加等を待って引き続き検討していきたい。

【分析使用資料】

【丹後地域】

桑飼上遺跡（後期前半） 竪穴住居跡7・12 『桑飼上遺跡』（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年）
三坂神社墳墓群 『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町教育委員会 1998年
左坂墳墓群 『左坂古墳（墳墓）群G支群』大宮町教育委員会 2001年
大山墳墓群 『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会 1983年
大山遺跡 竪穴住居1 『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会 1983年
正垣遺跡 SD05 『京都府弥生土器集成』（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986年）
古殿遺跡（後期後半） 2次SD04、3次SX302 『古殿遺跡』（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年）
古殿遺跡（後期末） CトレンチSX11 BトレンチSE03 SD04 『京都府弥生土器集成』（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986年）
志高遺跡 SK86255、86256、SH86246 『志高遺跡』（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年）
桑飼上遺跡（庄内） 竪穴住居跡14、15、16、17、25、土器溜まり2 『桑飼上遺跡』京都府遺跡調査報告第19冊（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年）

【丹波】

松ヶ端遺跡 SD97001 『福知山市文化財調査報告書 第38集』福知山市教育委員会 1999
今安遺跡 SD98037 『福知山市文化財調査報告書 第38集』福知山市教育委員会 1999
新庄遺跡 SH12、13、22、17、SK25、21、20 『新庄遺跡』綾部市教育委員会1995
青野遺跡 第12次SD04、第4次35U16住居 『京都府弥生土器集成』（助京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986年）
上板井遺跡 旧河道 『上板井遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1990年
板井寺ヶ谷遺跡 各遺構 『板井寺ヶ谷遺跡』兵庫県教育委員会 1992年
西木之部遺跡 B地区土器集中群（第5、6群省く）、SH1、SK11,12 『西木之部遺跡』兵庫県教育委員会 1993年
丹波・口坂本遺跡 土坑301 『丹波・口坂本遺跡』多紀郡西紀丹南町教育委員会 1981年
国領遺跡（後期後半）SH2,3,9 『国領遺跡（Ⅱ）』兵庫県教育委員会 1993年
七日市遺跡（後期後半）SB01 『春日七日市遺跡』春日七日市遺跡発掘調査団 兵庫県水上郡春日町 1984年
国領遺跡（後期末～庄内）SH4,7,11,12 『国領遺跡（Ⅱ）』兵庫県教育委員会 1993年
七日市遺跡（後期末～庄内）SR01Ⅲ層 『春日七日市遺跡（Ⅲ）』兵庫県教育委員会 平成15年度
犬岡遺跡 旧河道 『犬岡遺跡』兵庫県教育委員会 1995年
七日市遺跡（庄内）SB14,26,27,3 『七日市遺跡（Ⅰ）』兵庫県教育委員会 1990

【但馬】

東山墳墓群 木棺墓群 『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市教育委員会 1992年
門谷墳墓群 『香住門谷遺跡群』豊岡市教育委員会 2003年
カヤガ谷墳墓群 2・3号墓 『カヤガ谷墳墓群 大谷墳墓群 坪井遺跡』兵庫県教育委員会 2003年
鎌田、若宮古墳群 4号墓 『鎌田・若宮古墳群』豊岡市教育委員会 1990年
立石墳墓群 103・1～2・100・101・99・98・97地点 『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会 1987年
加陽土屋ヶ鼻遺跡 『加陽土屋ヶ鼻遺跡』豊岡市教育委員会 1994年
妙楽寺墳墓群 『妙楽寺墳墓群』豊岡市教育委員会 2002年
大盛山遺跡 第1環濠、第2環濠、1～3A号住居址 『大盛山遺跡』和田山町教育委員会 1995年
梅田東古墳群 木棺墓群 『梅田東古墳群』兵庫県教育委員会 2002年
粟鹿遺跡（後期前半）A-SD101、B3-SD01、D-SH20、F-流路 『粟鹿遺跡』兵庫県教育委員会 2007年
加都遺跡 伊豫田地区SDY001 『加都遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 2005年
ムクノ木遺跡 『ムクノ木遺跡』和田山町教育委員会 1992年
粟鹿遺跡（後期末～庄内）B3-SH07、G地区北西隅落ち込み、流路 『粟鹿遺跡』兵庫県教育委員会 2007年

【東播磨（加古川流域）】

下三草・諏訪ノ下遺跡 3区-ⅡSB04、07、4区-ⅡSB01 『下三草・諏訪ノ下遺跡』加東郡教育委員会 1991年
家原遺跡 住居址13、溝2、3、4 『家原・堂ノ元遺跡』加東郡教育委員会 1984年

美乃利遺跡 SH15上層 『美乃利遺跡』 兵庫県教育委員会 1997年
 手末遺跡 SH1 『手末遺跡発掘調査報告書』 加古川市教育委員会 平成15年
 大中遺跡(大中Ⅰ～Ⅱ) 第3土器群、第2土器群、第1土器群、第5号、8号、7-B、C号、21号住居址
 『播磨大中遺跡の研究』 播磨町教育委員会 播磨町郷土資料館 1990年
 大中遺跡(大中Ⅲ) 91号、Z号、1101号、1号住居址 『播磨大中遺跡の研究』 播磨町教育委員会 播磨町郷土資料館 1990年

【多可・西脇地域】

鍛冶屋・下川遺跡 竪穴住居址1、2 『鍛冶屋・下川遺跡』 中町教育委員会 1994年
 安坂・城の堀遺跡 7区土坑1 『安坂・城の堀遺跡Ⅱ』 中町教育委員会 2000年
 田野口・笹町遺跡 SD05 『田野口・笹町遺跡Ⅲ』 多可町教育委員会 2007年
 大垣内遺跡 2、10、11号住居址 『大垣内遺跡』 兵庫県教育委員会 1991年
 糺屋・土井の後遺跡 SK1 『糺屋・土井の後遺跡Ⅰ』 中町教育委員会 1997年
 貝野前遺跡 SB1、2、6 『貝野前遺跡』 中町教育委員会 1995年
 荒田神社裏遺跡 SH01、02、03 『荒田神社裏遺跡』 兵庫県教育委員会 2001年

【甕分類土器出土遺跡】

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	安坂・城の堀遺跡 7区土坑1	22	三坂神社墳墓群 3号墓
2	田野口・笹町遺跡 SD05	23	東山墳墓群 3号墓
3	貝野前遺跡 SB 1	24	鎌田、若宮古墳群 4号墓
4	三坂神社墳墓群 3-2主体	25	妙楽寺墳墓群 第16地点
5	東山墳墓群 3号墓	26	大山墳墓群 土器棺墓
6	大盛山遺跡 第2環濠	27	古殿遺跡 Cトレンチ SX11
7	大盛山遺跡 第2環濠	28	古殿遺跡 Cトレンチ SX11
8	七日市遺跡(1984年) SB01	29	犬岡遺跡 旧河道
9	田野口・笹町遺跡 SD05	30	国領遺跡 SH7
10	犬岡遺跡 旧河道	31	七日市遺跡(平成15年度) SR01Ⅲ層
11	糺屋・土井の後遺跡 SK1	32	田野口・笹町遺跡 SD05
12	田野口・笹町遺跡 SD05	33	田野口・笹町遺跡 SD05
13	鍛冶屋・下川遺跡 竪穴住居址2	34	犬岡遺跡 旧河道
14	田野口・笹町遺跡 SD05	35	犬岡遺跡 旧河道
15	国領遺跡 SH12	36	左坂古墳(墳墓)群G支群14-1号墓
16	大盛山遺跡 第1環濠	37	古殿遺跡(後期末) Bトレンチ SD04
17	梅田東古墳群 7号墓	38	古殿遺跡(後期末) Bトレンチ SD04
18	東山墳墓群 1号墓	39	加都遺跡 伊豫田地区 SDY001
19	東山墳墓群 3号墓	40	加都遺跡 伊豫田地区 SDY001
20	三坂神社墳墓群 5号墓	41	七日市遺跡(1990年) SB26
21	三坂神社墳墓群 8号墓	42	七日市遺跡(1990年) SB26

【参考文献】

- 1) 『田野口・笹町遺跡Ⅰ』 多可町教育委員会 2006年
- 2) 『田野口・笹町遺跡Ⅱ』 多可町教育委員会 2007年
- 3) 『近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)』 野島永・野々口陽子 京都府埋蔵文化財情報74号 1999年
 京都府埋蔵文化財調査研究センター

土器観察表

- ・法量は () 現存高、- は不明である。
- ・成形・調整等の (/) は (本数/mm) である。

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
001	小皿	9.6	6.9	1.8	ナデ (口縁部ヨコ 底部不定)	口縁部ナデ (ヨコ) 底部未調整	7.5YR8/3 浅黄橙	P01 (SB01)	
002	小皿	10.7	9.8	1.4	ナデ (口縁部ヨコ 底部不定)	口縁部ナデ (ヨコ) 底部未調整	2.5YR6/8 橙	P01 (SB01)	
003	皿・碗	-	9.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	10YR8/2 灰白	P07 (SB01)	
004	碗	15.1	6.7	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/0 灰	P11 (SB01)	
005	皿	12.5	8.8	2.2	ナデ (口縁部ヨコ 底部不定)	口縁部ナデ (ヨコ) 底部未調整	10YR8/2 灰白	P6 (SB02)	
006	小皿	10.0	8.3	1.3	ナデ (口縁部ヨコ 底部不定)	口縁部ナデ (ヨコ) 底部未調整	7.5YR8/3 浅黄橙	P16 (SB02)	
007	山茶碗	13.7	-	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB6/1 青灰	P18 (SB02)	
008	山茶碗	-	6.6	-	ヨコナデ 仕上げナデ	体部ヨコナデ 底部回転糸切	5PB7/1 明青灰	P20 (SB02)	
009	山茶碗	-	6.3	-	ヨコナデ 仕上げナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	5PB7/1 明青灰	P20 (SB02)	
010	甕	-	-	-	ナデ	タタキ 一部ナデ	5PB6/1 青灰	P18 (SB02)	
011	土塼	20.1	-	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR7/6 橙	P22 (SB02)	
012	山茶碗	15.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/0 灰白	P24 (SB02)	
013	土塼	20.0	-	10.8	口縁部ヨコナデ 体部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	7.5YR6/3 にぶい褐	P24	
014	土塼	21.2	-	-	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	5YR6/6 橙	P54 (SB03)	
015	山茶碗	14.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB5/1 青灰	P53 (SB03)	
016	山茶碗	-	5.4	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	5PB7/1 明青灰	P88 (SB03)	
017	山茶碗	15.1	-	-	ヨコナデ 仕上げナデ	ヨコナデのちハケ状工具の粗いナデ痕	5PB6/1青灰	P90 (SB03)	
018	小皿	6.9	5.4	1.3	ナデ (ヨコ)	口縁部ナデ 底部未調整	7.5YR8/2 灰白	P26	
019	坏B	-	10.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラ切後ナデ	5PB6/1 青灰	P94	
020	土塼	16.6	-	5.6	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ→ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	P44	
021	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	5PB7/1 明青灰	P44	
022	山茶碗	14.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB7/1 明青灰	P69	
023	小皿	7.8	6.9	1.4	ナデ (ヨコ)	ナデ (口縁部ヨコ 底部不定)	10YR6/2 灰黄褐	P80	
024	小碗	3.0 3.4	2.9	2.0	ミガキ	ミガキ	5PB4/1 暗青灰	SK2	
025	甕	17.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10 Y R 8/3 浅黄橙	SK01上層・下層	
026	甕	-	-	-	青海波文	平行タタキ カキ目	N7/0 灰白	SD1	
027	蓋	15.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 天井部ナデ	N7/0 灰白	SD1	
028	山茶碗	16.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/0 灰	SD1下層	
029	小皿	9.7	8.7	1.0	ナデ (口縁部ヨコ 底部不定)	口縁部ナデ (ヨコ) 底部未調整	10YR8/1 灰白	SD1	
030	脚台	-	11.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB7/1 明青灰	第1包含層	外面部分的に緑釉
031	蓋	14.2	-	1.6	ヨコナデ 天井部仕上げナデ	ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	第1包含層	
032	蓋	14.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	5PB5/1 青灰	第1包含層	
033	蓋	20.7	-	-	ヨコナデ 天井部仕上げナデ	ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	N8/ 灰白	第1包含層	
034	蓋	17.0	-	0.9	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB6/1 青灰	第1包含層	
035	蓋	20.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N8/ 灰白	第1包含層	
036	蓋	11.9	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/ 灰白	第1包含層	
037	山茶碗	-	6.0	-	体部ヨコナデ 底部仕上げナデ	体部ヨコナデ→ナデ 底部回転糸切		第1包含層	
038	坏A	13.0	10.7	3.6	ヨコナデ 底部仕上げナデ	ヨコナデ 底部回転ヘラ切	5PB6/1 青灰~10YR8/1灰白	第1包含層	
039	坏	12.6	-	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	10 Y R 6/1 灰	第1包含層	
040	坏	12.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/ 灰白	第1包含層	
041	坏A	17.6	15.0	2.1	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 底部ヘラ切	Hue N7/0 灰白	第1包含層	
042	皿	8.5	5.0	2.7	ヨコナデ 底部仕上げナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	N7/0 灰	第1包含層	
043	坏A	11.5	6.5	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転ヘラ切	N7/ 灰白	第1包含層	
044	稜碗	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/ 灰白	第1包含層	
045	坏B	-	11.3	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB7/1 明青灰	第1包含層	
046	坏B	-	12.2	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転ヘラ切	N8/ 灰白	第1包含層	
047	坏B	-	9.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5 P PB6/1 青灰	第1包含層	
048	坏B	-	12.4	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラ切?	Hue5B7/1 明青灰	第1包含層	
049	坏B	-	12.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	Hue5PB5/1 青灰	第1包含層	
050	坏	-	11.4	-	ヨコナデ	ヨコナデ	Hue5PB7/1 明青灰	第1包含層	
051	碗	-	7.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	Hue5PB7/1 明青灰	第1包含層	
052	山茶碗	16.6	-	2.4	ヨコナデ	ヨコナデ	5 P B 6/1 青灰	第1包含層	
053	山茶碗	15.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5 P B 7/1 明青灰	第1包含層	
054	山茶碗?	14.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB 青灰	第1包含層	
055	山茶碗	13.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB7/1 明青灰	第1包含層	
056	山茶碗	16.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	Hue N6/0 灰	第1包含層	
057	山茶碗	16.1	-	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	5 P 6/1 紫灰	第1包含層	
058	山茶碗	14.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB7/1 明青灰	第1包含層	
059	坏	15.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5B5/1 青灰	第1包含層	
060	山茶碗	-	6.2	1.7	ヨコナデ	体部ヨコナデ 底部回転糸切	Hue5PB7/1 明青灰	第1包含層	
061	山茶碗	-	6.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	5PB7/1 明青灰	第1包含層	
062	山茶碗	-	5.5	-	ヨコナデ	体部ヨコナデ 底部回転糸切	HueN8/0 灰白	第1包含層	
063	山茶碗	-	6.0	-	ヨコナデ	体部ヨコナデ 底部回転糸切	Hue5PB6/1 青灰	第1包含層	
064	壺	-	-	-	ヨコナデ	胴部上~中位ヨコナデ 下半部回転ヘラ削り 胴部凹線-クシ描列点文-凹線	5PB6/1 青灰	第1包含層	
065	鉢	31.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/0 灰白	第1包含層	
066	鉢	35.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/0 灰	第1包含層	
067	鉢	30.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/0 灰	第1包含層	
068	小皿	9.0	8.2	1.5	口縁部ナデ(横) 底部ナデ(不定)	口縁部ナデ(横) 底部未調整	10YR8/3 浅黄橙	第1包含層	
069	小皿	7.6	5.7	1.1	口縁部ナデ(横) 底部ナデ(不定)	口縁部ナデ(横) 底部未調整	10YR8/1 灰白	第1包含層	
070	土塼	19.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR5/1 褐灰	第1包含層	硬質
071	土塼	17.7	-	2.8	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	5YR にぶい赤褐	第1包含層	
072	土塼	20.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/6 明黄褐	第1包含層	外面煤付着
073	羽釜	22.3	-	2.6	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR6/6 橙	第1包含層	

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
074	羽釜	26.9	-	2.4	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR6/3 にぶい橙	第1包含層	
075	土埴	30.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6 橙	第1包含層	
076	壺	14.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR5/2 灰褐	第1包含層	
077	播鉢	-	-	-	ヘラガキ卸目	ナデ	2.5YR にぶい赤褐	第1包含層	
078	卸皿	-	10.1	-	卸目 明黄褐釉・一部緑釉	ヨコナデ 底部回転糸切	N7/0 灰白	第1包含層	
079	碗	-	5.0	2.9	櫛描文	底部回転ヘラ切 露胎	7.5Y6/2 灰オリーブ	第1包含層	
080	碗	12.2	-	-			10Y8/1 灰白	第1包含層	白磁Ⅱ類
081	底部	-	5.2	-	ハケ後ナデ	タタキ→ハケ→ナデ	10YR8/3 浅黄橙	第1包含層	
082	底部	-	3.0	-	ヘラケズリ	ハケ	10YR7/2 にぶい黄橙	第1包含層	
083	台付鉢	-	5.5	-	ハケ	不明	10YR8/1灰白	第1包含層	
084	鉢	11.5	3.6	9.1	ヘラケズリ後ナデ?	ナデ後ミガキ?	7.5YR8/3 浅黄橙	第1包含層	
085	鉢	-	4.0	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	第1包含層	
086	脚部	-	9.0	-	板ナデ	ヘラミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	第1包含層	
087	高坏	-	-	-	ヘラミガキ	-	2.5Y R7/6 橙	第1包含層一括	
088	胴部(器台・高坏)	-	16.4	-	不明	ミガキか?	10YR 7/3 にぶい黄橙	第1包含層	円形透 個数不明
089	脚部	-	13.1	-				第1包含層	
090	甕	13.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R6/6 橙	SB01土器群	
091	底部	-	2.5	-	ヘラケズリ 指頭圧痕	タタキ→ナデ	7.5Y R6/6 橙	SB01土器群	
092	底部	-	2.5	-	ハケ	ヘラミガキ	7.5Y R8/4 浅黄橙	SB01土器群	
093	底部	-	3.3	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R6/4 にぶい橙	SB01土器群	
094	鉢	34.9	7.6	19.4	口縁部ヨコナデ 体部ハケ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	10Y R8/4 浅黄橙	SB01土器群	外面スス附着
095	高坏	26.5	-	-	ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→暗文状の波状ヘラミガキ 体部ハケ→ヘラミガキ釘	5Y R7/4 にぶい橙	SB01土器群	
096	甕	14.3	-	-	口縁部ハケ後ヨコナデ 頸部ハケ圧痕	ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	SB01	
097	器台	17.2	-	-	ヘラミガキ	ヨコナデ	10Y R8/1 灰白	SB01	
098	高坏?	(21.4)	-	-	ヘラミガキ	ヨコナデ	5Y R6/6 橙	SB01	
099	壺	8.9	-	-	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 2条凹線 頸部ハケ	7.5Y R7/6 橙	P101上層一括	
100	鉢	15.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ハケ(細) →ハケ(太)	口縁部ヨコナデ 体部中位から上 ナデ→ハケ 体部下位 ハケ→ナデ	7.5Y R7/6 橙	P101上層一括	スス附着
101	高坏	24.5	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5Y R7/6 橙	P101下層	
102	脚部	-	-	-	脚裾部ハケ	ヘラミガキ	7.5Y R7/6 橙	P101下層	
103	底部	-	4.0	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	10Y R7/1 灰白	P101下層	スス附着
104	鉢	11.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R7/4 にぶい黄橙	P101上層一括	
105	脚部	-	15.2	-	脚端部ヨコナデ 脚裾部ハケ→ヘ ラケズリ	脚端部ヨコナデ 脚裾部ハケ→ナデ	7.5Y R7/6 橙	P101上層一括	
106	台付鉢	-	4.4	-	ヘラミガキ	ハケ後ナデ 脚裾部指頭圧痕	7.5YR7/4 にぶい橙	SK02	
107	高坏	-	-	-	-	-	-	下層SK02	3方円形透孔
108	甕	16.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部上半ヘラケ ズリ→板ナデ 下半ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R8/2 灰白	SD7上層土器群	
109	甕	17.1	-	-	口縁部ハケ 体部ヘラケズリ(一 部頸部にハケ残る)	口縁部ナデ 指頭圧痕 体部タタキ ハケ・板ナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD7上層土器群	口縁部押 さえ痕
110	甕	13.6	2.0	-	口縁部ヨコナデ 体部ハケ→ヘラ ナデ(ヘラミガキ?)	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ヘラケ ズリ→ナデ 接合痕残る	10YR 7/3 にぶい黄橙	SD7上層土器群	
111	甕	17.4	3.8	22.2	口縁部ヨコナデ 体部~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R8/4 浅黄橙	SD7中・上層土器群	
112	甕	18.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	7.5Y R6/6 橙	SD7上層土器群	131と同一か?
113	甕	16.0	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 2条沈線 体部タタキ→ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	SD7上層土器群	
114	甕	17.6	-	3.7	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 2条沈線 体部タタキ→ナデ	10Y R8/2 灰白	SD7土器群	
115	甕	11.2	-	-	口縁部ヨコナデ 口縁部ハケ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	SD7上層土器群	
116	甕	15.0	-	-	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ 口縁部擬凹線	10Y R7/1灰白	SD07上層土器群	
117	甕	14.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	7.5YR8/1 灰白~ 5YR7/4 にぶい橙	SD7上層土器群	
118	甕	14.6	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 肩部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R8/3 浅黄橙	SD7上層土器群	
119	甕	14.8	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→ハケ→ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→板ナデ→ハケ	10YR8/4 浅黄橙色	SD7上層土器群	
120	甕	14.6	3.5	20.2	口縁部ヨコナデ 体部~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部~底部タタキ→ハケ	7.5YR7/6 橙	SD7上層土器群	
121	甕	18.2	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→板ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ→頸部ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙	SD7上層土器群	
122	甕	15.0	-	-	口縁部ハケ→ナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10YR5/4 にぶい黄褐	SD7上層土器群	
123	甕	15.8	1.2	19.3	口縁部ヨコナデ 体部~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部~底部(タタキ)→ハケ	10Y R8/4 浅黄橙	SD7上層土器群	
124	甕	17.1	3.9	24.1	ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ(粗・細)	10YR8/3 浅黄橙色	SD7上層土器群	
125	甕	12.7	2.3	20.7	口縁部ヨコナデ 体部上半ハケ(粗) 体部下半ハケ(密)	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ (粗い) →体部上半ハケ(密)	10YR7/4 にぶい黄橙	SD7上層土器群	
126	甕	16.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07上層土器群	147と同一個体か
127	甕	-	-	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R8/2 灰白	SD7上層土器群 SK1	
128	甕底部	-	3.7	-	ヘラケズリ	ハケ	7.5YR6/2 褐灰	SD7上層土器群	
129	甕底部	-	3.3	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	7.5YR6/3 にぶい黄橙	SD7上層土器群	
130	甕底部	-	2.9	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	7.5YR6/2 褐灰	SD7上層土器群	
131	底部	-	3.7	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R8/3 浅黄橙	SD7上層土器群	
132	甕底部	-	3.6	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ(板ナデ状)		SD7上層土器群	
133	甕底部	-	3.8	-	底部ヘラケズリ 体部ハケ→板ナデ	タタキ→ハケ	7.5YR5/1褐灰	SD7上層土器群	
134	底部	-	5.4	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07上層土器群	0146と同一個体か?
135	甕底部	-	3.3	-	ヘラケズリ→板ナデ・ハケ	ハケ	5YR6/3 にぶい橙	SD7上層土器群	102と同一か?
136	底部	-	5.5	-	ヘラケズリ	ハケ+ナデ	7.5Y R5/2 褐灰	SD7上層土器群	130と同一か?
137	底部	-	5.4	-	ハケ→ヘラミガキ	タタキ→ヘラミガキ 底部木葉痕	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD7上層土器群	
138	甕	10.4	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ→口縁部ナデ	2.5YR6/8 橙	SD7上層土器群	
139	鉢	11.0	3.3	10.3	口縁部~体部上半ハケ→ナデ 口 縁部指頭圧痕 体部下半板ナデ	板ナデ	7.5YR5/1 褐灰	SD7上層土器群	底部穿孔 (径4mm)
140	鉢	26.2	-	-	ヘラミガキ(縦→横)	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ→ ミガキ 口頸部指頭圧痕あり	10YR6/3 にぶい黄橙	SD7上層土器群	

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
141	鉢	30.0	5.3	24.2	口縁部ヘラミガキ→端部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ→端部ヨコナデ 3ヶ所に記号 体部ヘラミガキ(一部ハケ残る)	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD7上層土器群・SD7中層・SK下層	
142	高坏	11.7	8.9	12.1	ヘラミガキ 脚部ハケ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD7上層土器群	
143	鉢?	22.0	-	-	ヘラミガキ	ヨコナデ	10Y R8/3 浅黄橙	SD7上層土器群	
144	壺	19.3	-	-	不明	口縁部刻み目 口縁部~頸部ナデか?一部タタキ?がみられる	7.5Y R7/6 橙	SD07上層	
145	壺	14.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R7/6 橙	SD7上層	
146	壺	7.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ	ヘラミガキ? 2条沈線	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07上層	
147	壺	12.3	-	-	ハケナデ	口縁部擬凹線 頸部ハケ→ナデ	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD7・SD7上層	
148	壺	-	-	-		口縁部刺突文	7.5Y r7/3 にぶい橙	SD07上層	
149	-	-	-	-		刻み目 円形刺突文	5Y R6/6 橙	SD07上層	
150	甕	12.4	-	-	ヘラケズリ→頸部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD7上層・中層・下層・下層土器群	
151	甕	14.3	3.7	14.1	口縁部ハケ 体部板ナデ	口縁部ナデ 体部タタキ→粗いナデ	10Y R8/3 浅黄橙~ 2.5Y R6/6 橙	SD7上層	粘土組接合痕
152	甕	18.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD F07上層	
153	甕	13.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/3 にぶい橙	SD07上層	
154	甕?	14.8	-	-	口縁部ハケナデ	口縁部ハケナデ	7.5Y R7/4 にぶい黄橙	SD07上層	
155	甕	12.0	-	-	ハケ→ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ 頸部ナデ	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD07上層	
156	甕	15.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD07上層	
157	底部	-	7.5	-	ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ 底面ヘラ状痕	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07上層(一括)	
158	底部	-	4.6	-	ハケ	不明	10Y R8/3 浅黄橙	SD07上層	
159	底部	-	4.4	-	ヘラケズリ	ハケ→ヘラミガキ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07上層	
160	底部	-	4.6	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	10Y R8/2 灰白	SD07上層	
161	底部	-	2.6	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R6/1 褐灰	SD07上層	
162	底部	-	2.4	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R6/1 褐灰	SD07中・SD07上層	
163	底部	-	2.0	-	不明	タタキ→ハケ	10Y R8/1 灰白	SD07上層	スス付着
164	底部	-	2.8	-	ヘラケズリ	タタキ 底部穿孔	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD7上層	穿孔0.7
165	鉢	35.6	-	-	口縁部ヨコナデ 口縁部~体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 口縁部~体部ヘラミガキ	7.5Y R7/6 橙	SD07上層	
166	鉢	33.0	-	-	ヘラミガキか?	口縁部凹線3条 調整不明	7.5Y R7/6 橙	SD07上層	
167	台付鉢	-	5.0	-	坏部板ナデ 脚部指頭圧痕	坏部ナデ(一部ハケ残る) 脚部ナデ 指頭圧痕	7.5Y R7/4にぶい黄橙	SD07上層	
168	脚	-	4.9	-	不明	ナデ(指頭圧痕)	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07上層	
169	高坏	-	-	-		ヘラミガキ	10Y R8/2 灰白	SD07上層	
170	高坏	-	-	-		ヘラミガキ	5Y R8/4 淡橙	SD07上層	
171	高坏	-	-	-	脚部ハケ	ヘラミガキ 円形透かし	7.5Y R8/3 浅黄橙	SD07上層	
172	脚	-	11.1	-	脚端部ヨコナデ ハケ	脚端部ヨコナデ ハケ 円形透かし	2.5Y R4/1 黄灰	SD07上層	
173	脚	-	11.5	-	ハケ	ヘラミガキ	5Y R7/4 にぶい黄橙	SD7上層	
174	脚	-	19.1	-	ハケ→脚端部ナデ	ヘラミガキ 円形透かし	10Y r8/2 灰白	SD7上層	
175	脚	-	16.8	-	ハケ→ナデ	ヘラミガキ	10Y R8/1 灰白	SD7上層	165と同一個体
176	脚	-	24.7	-	ハケ→ヨコナデ	ヘラミガキ	210Y R6/1 褐灰	SD07上層	0164と同一個体
177	山茶碗	16.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	H6/0 灰	SD7上層	
178	製塩土器	10.4	-	-	指頭圧痕	指頭圧痕	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07上層	
179	壺	15.6	-	-	口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラミガキ 頸部ハケ→ナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 口縁部~体部ハケ→ヘラミガキ	5Y R6/6 橙	SD07中層一括・SD07中層・SD07下層	
180	壺	11.4	-	-	口縁部ヘラミガキ 体部ヘラケズリ	口縁部ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層	
181	壺	18.3	-	-	ヘラミガキ 連続竹管文	ヨコナデ 口縁部擬凹線4条 円形竹管刺突浮文	10Y R8/3 浅黄橙	SD7中層	
182	-	-	-	-		沈線 円形刺突文	10Y r8/4 浅黄橙	SD07中層	
183	壺	-	-	-		口縁部波状文	10Y R8/4 浅黄橙	SD07中層	
184	壺	-	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ→ナデ 体部上半ナデ 指頭圧痕 体部下半ハケ→ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ→ヘラミガキ 体部ハケ→ヘラミガキ	5Y R6/6 橙	SD07上層(一括)	(結實一括)
185	壺	-	-	-	頸部未調整 体部ヘラケズリ	頸部ハケ 体部ナデ	5Y R6/6 橙	SD07中層・下層	
186	壺	7.8	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層	
187	甕	12.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R7/3 にぶい橙	SD07中層	
188	壺	8.4	-	-	ナデ 指頭圧痕	口縁部ナデ 指頭圧痕 頸部ハケ	5Y R6/6 橙	SD07中層・下層	
189	壺	9.2	-	-	ハケ	口縁部ナデ 頸部ハケ	10Y R6/3 にぶい黄橙	SD07中層	
190	甕	15.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	7.5Y R6/6 橙	SD07中層	
191	甕	17.0	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ+ナデ	5Y R6/6 橙	SD07中層	
192	甕	19.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	7.5Y R6/4 にぶい橙	SD07中層	
193	壺	11.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	10Y R6/2 灰黄褐	SD07中層	
194	甕	13.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R6/6 橙	SD07中層	
195	甕	14.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R8/6 浅黄橙	SD07中層	
196	壺	17.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	7.5Y R6/6 橙	SD07中層・下層土器群	
197	甕	12.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R6/6 橙	SD07中層	
198	甕	14.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ残る	7.5Y R8/4 浅黄橙	SD07中層	
199	甕	15.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R8/4 浅黄橙	SD07中層	
200	甕	16.7	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部擬凹線 口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層	
201	壺	-	2.2	-	ハケ	ヘラミガキ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07中層	
202	底部	-	5.2	-	ヘラケズリ	ナデ?	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層	
203	底部	-	6.2	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	10Y R8/2 灰白	SD07中層・下層土器群	
204	底部	-	3.8	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ 底部周辺ナデ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07最下層・中層一括	
205	底部	-	3.5	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R5/3 にぶい褐色	SD07中層・下層・下層土器群	
206	底部	-	2.1	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R にぶい橙	SD07中層	
207	底部	-	6.2	-	ヘラケズリ	板ナデ(タタキ一部残る)	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07中層一括	
208	底部	-	2.4	-	ヘラケズリ	ハケ	2.5Y R6/6 橙	SD07中層・下層	

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
209	底部	-	2.7	-	ヘラケズリ	板ナデ	7.5Y R6/4 にぶい橙	SD07中層・最下層	
210	底部	-	3.5	-	ヘラケズリ 底部指頭圧痕	ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07中層	
211	底部	-	4.1	-	ヘラケズリ	ハケ+ナデ	10YR8/2 浅黄橙	SD07中層・下層	
212	底部	-	4.2	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R5/2 灰黄褐	SD07中層一括	
213	底部	-	4.1	-	ヘラケズリ	タタキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層・下層土群	
214	底部	-	2.7	-	ハケ	タタキ 底部付近ナデ	7.5Y R7/3 にぶい橙	SD07中層	
215	底部	-	3.2	-	ヘラケズリ 底部穿孔未貫通	タタキ 底部穿孔未貫通	7.5Y R7/3 にぶい橙	SD07中層	
216	鉢	30.0	-	-	ヘラミガキ	口縁部4条擬凹線	10Y R8/4 浅黄橙	SD07中層	
217	鉢	23.4	-	-	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 口縁部擬凹線	10R5/8 赤	SD07中層	
218	高坏	19.9	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.5Y R6/6 橙	SD07中層	
219	高坏	25.5	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	SD07中層	
220	高坏	12.0	-	-	ヘラミガキ?	ハケ→ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層	
221	底部	-	4.1	-	ハケ	ナデ 指頭圧痕	10Y R6/2 灰黄褐	SD07中層	
222	台付鉢	-	-	-	坏部ハケ	坏部ハケ→ナデ 脚部指頭圧痕→ナデ	7.5Y R7/6 橙	SD07中層	
223	高坏脚部	-	-	-	不明	ヘラミガキ	7.5Y R8/3 浅黄橙	SD07中層一括	
224	脚部	-	-	-	脚下半ハケ	ヘラミガキ 円形透かし(4方 径8m)	10YR8/3 浅黄橙	SD07中層	
225	高坏脚部	-	-	-	下半ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5YR6/6 橙	SD07中層	
226	器台?	8.5	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR8/3 浅黄橙	SD07中層	
227	脚	-	12.6	-	ナデ	ハケ→ヘラミガキ	7.5Y R7/6 橙	SD07中層一括	
228	壺	9.5	-	-	口縁部~頸部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→ハケ→ナデ	口縁部~頸部ヨコナデ 体部ハケ+ナデ	7.5Y R6/4にぶい褐	SD07下層土器群・最下層土器群	
229	壺	12.4	-	-	口縁部ヘラミガキ 体部ヘラケズリ 指頭圧痕	ヘラミガキ	5YR6/6 橙	SD07下層土器群	
230	壺	19.2	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ	7.5Y R8/4	SD07下層土器群	
231	壺	13.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 口縁部凹線1条 頸部ヘラガキ状沈線1条	7.5Y R7/3 にぶい橙	SD07下層土器群	
232	壺	12.9	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	
233	壺	11.4	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 体部指頭圧痕	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
234	壺	12.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 指頭圧痕	口縁部ヨコナデ 2条沈線 体部 荒れて不明	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
235	壺	14.8	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ	-	7.5Y R7/8 黄橙	SD07下層土器群	
236	壺	15.5	-	-	口縁部~頸部ヘラミガキ 頸部指頭圧痕 体部ヘラケズリ	口縁部擬凹線 頸部ハケ 体部ヘラミガキ	5YR6/6 橙	SD07下層土器群	
237	壺	13.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R7/8 橙	SD07下層土器群	
238	器台?壺?	(28.5)	-	-	ヘラミガキ	ヨコナデ 口縁部同心円文?	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
239	壺	12.9	-	-	-	-	10Y R8/6 黄橙	SD07下層土器群	
240	壺	-	-	-	ナデ	ヘラミガキ	10Y R8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	
241	甕	-	-	-	ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	SD07下層土器群・中層	
242	壺	9.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R7/3 にぶい橙	SD07下層土器群	
243	無頸壺?	9.0	-	-	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	ハケ→ヨコナデ・ナデ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07下層土器群	
244	壺	10.7	5.4	22.9	口縁部擬凹線 口頸部ハケ 体部ハケ→ナデ	口縁部擬凹線 ハケ	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
245	壺	12.3	3.9	20.3	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ 指頭圧痕	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
246	壺	18.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07土器群	
247	甕	19.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	7.5Y R8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	
248	甕	15.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR7/6	SD07土器群	
249	甕	16.4	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
250	甕	16.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y R6/6 橙	SD07下層土器群	
251	甕	19.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
252	甕	16.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
253	甕	19.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07下層土器群	
254	甕	16.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→頸部付近のみハケ 指頭圧痕	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	5Y R7/6 橙	SD07土器群	
255	甕	13.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
256	甕	12.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ハケ→ヘラミガキ	7.5Y R7/6 橙	SD07下層土器群	
257	甕	16.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	5Y R7/6 橙	SD07中層・下層土器群	
258	甕	20.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部~頸部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	5Y R6/6 橙	SD07下層土器群	
259	壺?	13.2	-	-	ヘラミガキ?	ヘラミガキ?	5Y R6/6 橙	SD07下層土器群	
260	甕	10.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
261	甕	14.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ナデ	10Y R8/2 浅黄橙	SD07下層土器群	
262	甕	15.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07下層土器群	
263	甕	29.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 凹線4本 体部ハケ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07下層・下層土器群	大倉山遺跡・簡江遺跡等青田馬・類例有
264	甕?甗?	-	-	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
265	-	-	-	-	ヘラケズリ	ナデ+ハケ	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
266	底部	-	9.0	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/4 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
267	底部	-	2.2	-	ハケ	ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07下層土器群	
268	底部	-	3.7	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR8/1 灰白	SD07土器群	
269	底部	-	2.3	-	板ナデ	ヘラミガキ	5YR6/6 橙	SD07下層土器群	
270	底部	-	1.9	-	ハケ	ヘラミガキ	7.5YR 8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	
271	底部	-	6.4	-	-	タタキ	10YR8/1 灰白	SD07下層土器群	底面拓本
272	底部	-	4.3	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ→ナデ 底面ハケ	5YR5/4 にぶい赤褐	SD07下層土器群	
273	底部	-	3.7	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	5YR5/4 にぶい赤褐	SD07下層土器群	
274	底部	-	3.5	-	ヘラケズリ	タタキ→ナデ	5YR6/4 にぶい橙	SD07下層・下層土器群	
275	底部	-	3.2	-	ヘラケズリ	ハケ→ナデ 指頭圧痕	10YR7/3にぶい黄橙	SD07下層土器群	
276	底部	-	4.5	-	ヘラケズリ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	SD07下層土器群	
277	底部	-	3.6	-	ハケ	ハケ 底面板目	5YR7/6 橙	SD07下層土器群	底面拓本
278	底部	-	4.3	-	板ナデ	ナデ 底部指頭圧痕	7.5YR8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
279	底部	-	6.7	-	-	底部付近ハケ 体部下半以上ヘラナデ	7.5Y R8/4 浅黄橙	SD07中層・下層・下層土器群	
280	底部	-	2.1	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ→ナデ	5Y R6/6 橙	SD07下層土器群	
281	底部	-	3.2	-	ヘラケズリ (板ナデ状)	タタキ	10Y R7/4 鈍い黄橙	SD07下層土器群	
282	底部	-	-	-	ヘラケズリ	ナデ 底部穿孔 (径5mm)	10Y R7/4 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
283	手焙り形土器	11.6	4.1	-	ヘラケズリ→ナデ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ→ナデ	10Y R8/2 灰白	SD07下層土器群・下層	
284	鉢	15.4	2.6	13.5	板ナデ	板ナデ	10Y R7/6 明黄褐	SD07中層・下層・下層土器群	底部穿孔(径1.0cm)
285	鉢	9.3	5.9	5.5	ナデ	ナデ 底部付近爪形痕	5YR6/6 橙 内面スス	SD07下層土器群・最下層土器群	
286	鉢	8.6	3.3	4.1	ハケ	ナデ 底部指頭圧痕	10YR7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
287	鉢	10.2	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群	
288	鉢	22.3	-	-	ヘラミガキ	ナデ	2.5YR7/6 橙	SD07下層土器群	
289	鉢	28.8	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07下層土器群	
290	台付鉢	-	7.9	-	ナデ	ナデ 脚部指頭圧痕	5YR7/6 橙	SD07下層土器群・下層粘質	
291	台付鉢	-	4.4	-	ハケ	ナデ 指頭圧痕	10YR7/6 明黄褐	SD07下層土器群	
292	鉢	-	4.0	-	ハケ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	SD07下層土器群	
293	脚部	-	4.5	-	ヘラミガキ	ナデ 指頭圧痕	7.5YR7/4 にぶい橙	SD07下層土器群	
294	高坏	29.2	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5Y R7/6 橙	SD07下層(粘)・下層土器群・最下層	
295	高坏	27.8	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ 口縁部凹線	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07中層・下層土器群・下層・最下層	
296	高坏	28.0	-	-	ヘラミガキ	-	10Y R8/3 浅黄橙	SD07下層土器群	
297	高坏	19.5	-	-	ヘラミガキ	口縁部凹線2条 ヘラミガキ	10YR8/3 浅黄橙	SD07中層・下層土器群・最下層	
298	高坏	30.7	-	-	ヘラミガキ	口縁部擬凹線 ヘラミガキ?	7.5YR 浅黄橙	SD07下層土器群	
299	高坏	9.7	-	-	板ナデ→ナデ	ナデ 指頭圧痕	7.5YR7/3 にぶい橙	SD07下層土器群	
300	高坏	13.2	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ?	7.5YR7/4 にぶい橙	SD07下層土器群	
301	高坏	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/1 灰白	SD07下層土器群	
302	器台?	17.9	-	-	ヘラミガキ	-	10Y R8/4 浅黄橙	SD07	
303	壺・高坏?	9.0	-	-	ヘラミガキ	口縁部端部 沈線2条 ヘラミガキ	5Y R7/6 橙	SD07下層土器群	
304	脚部	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5YR8/6 浅黄橙	SD07下層土器群	
305	高坏	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ 円形透かし (3方 径8mm)	10YR8/4 浅黄橙	SD07下層土器群・下層	
306	高坏・器台	-	20.8	-	ハケ	ヘラミガキ 円形透かし孔 (径1.7cm)	5Y R7/6 橙	SD07下層・最下層土器群	
307	高坏	-	19.6	-	ヘラケズリ→ハケ	ヘラミガキ 円形透かし (3方 径2.0cm)	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層土器群・最下層	
308	脚部	-	15.7	-	端部ヨコナデ ハケ	脚端部凹線 ヘラミガキ 円形透かし (径2cm)	7.5YR7/4 にぶい橙	SD07下層土器群・最下層	
309	脚部	-	16.9	-	ハケ	ヘラミガキ 円形透かし (4方 径1.6cm)	10YR 8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	
310	高坏	-	8.4	-	ヘラミガキ	脚端部ハケ→ヨコナデ ヘラミガキ	7.5YR8/4 浅黄橙	SD07下層土器群	
311	脚部	-	11.1	-	ハケ→ヘラケズリ	ヘラ描の鋸歯文	10Y R8/2 灰白	SD07下層土器群	
312	壺	35.4	-	-	不明	不明	5Y R7/4 にぶい橙	SD07	
313	壺	14.3	-	-	ヘラミガキ 口縁部内面波状文	ヨコナデ 円形竹管刺突浮文 (径11.7mm)	10Y R5/3 にぶい黄褐	SD07下層	
314	壺?	-	-	-	-	-	10Y R8/4 浅黄橙	SD07下層	拓本
315	壺	11.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD07下層(粘質)	
316	壺	11.5	-	-	口縁部～頸部ヨコナデ	体部ヘラケズリ ヘラミガキ	7.5Y R5/3 にぶい褐	SD07下層	
317	壺	13.5	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ→ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ	10Y R8/4 浅黄橙	SD07下層	
318	壺	12.3	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部下端ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07最下層	
319	壺	13.4	-	-	口縁部ヘラミガキ 頸部板ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ暗文状ヘラミガキ	7.5Y R7/3 にぶい橙	SD07最下層	拓本
320	壺	13.1	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ	10Y R8/3 浅黄橙	SD07下層土器群	③61と同一個体か?
321	壺	13.4	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10Y R7/1 灰白	SD07最下層	
322	壺	11.0	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ→板ナデ	口縁部～頸部ヨコナデ 頸部下端ハケ	10Y R8/2 灰白	SD07下層	
323	甕?	-	-	-	ハケ	ハケ 三日月形把手	10Y R8/3 浅黄橙	SD07最下層	③82と同一個体か?
324	壺?	-	-	-	ヘラケズリ→ナデ?	ヘラミガキ 胴部の屈曲部下端に2条沈線、凸帯+棒状浮文2本	7.5Y R6/6 橙	SD07最下層	「様式と編年」P58 備前V-2
325	壺	27.4	-	-	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR8/4 朝黄褐色	SD07下層	
326	壺	-	-	-	ヘラミガキ	板ナデ 口縁部端部沈線	5YR7/6 橙	SD07下層	
327	甕	18.7	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07最下層	
328	甕	14.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/6 橙	SD07最下層	
329	甕	15.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07下層(粘質)	
330	甕	14.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R7/6 橙	SD07下層(粘質)	
331	甕	13.8	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	10Y R8/2 浅黄橙	SD07下層	
332	甕	17.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R8/2 灰白	SD07最下層	
333	甕	18.6	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07最下層	
334	甕	16.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y R6/6 橙	SD07下層	
335	甕	12.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07最下層	
336	甕	10.0	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	5Y R6/4 にぶい橙	SD07下層	
337	甕	13.3	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ハケ	10Y R7/3 にぶい黄橙	SD07下層	
338	甕	17.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ?	10Y R8/6 黄橙	SD07下層(粘質)	
339	甕	16.0	-	-	ハケ→ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD07下層	
340	甕	14.0	-	-	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ→ナデ	7.5Y R6/2 褐灰	SD07下層	
341	甕	17.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	7.5Y R6/6 橙	SD07下層	
342	甕	13.5	-	-	口縁部ハケ→ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ→ハケ	2.5Y R6/4 にぶい橙	SD07下層	
343	甕	16.0	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ハケ→ヨコナデ 凹線3条 体部ハケ	7.5YR8/3 浅黄橙	SD07中層	
344	甕	6.8	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部上半ナデ 中～下半ハケ	5Y R7/6 橙	SD07下層	

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
345	底部	-	3.4	-	ヘラケズリ	ハケ+ナデ	10YR7/2 におい黄橙	SD07下層	
346	底部	-	3.7	-	ヘラケズリ	ナデ スス付着	10YR8/1 灰白	SD7下層	
347	底部	-	3.7	-	ヘラケズリ	ハケ	10Y R7/4 明黄褐	SD07最下層	底面ハケ
348	底部	-	3.2	-	ヘラケズリ	ハケ	5Y R6/6 橙	SD07最下層	
349	底部	-	3.8	-	ヘラケズリ	タタキ	5Y R5/4 におい赤褐	SD07最下層	
350	底部	-	3.5	-	指頭圧痕		10Y R7/3 におい黄橙	SD07最下層	底部内面炭化物付着
351	底部	-	2.0	-	ナデ 指頭圧痕	ハケ→ナデ	10Y R7/3 におい黄橙	SD07下層	
352	底部	-	3.2	-	板ナデ	板ナデ 底部穿孔(径0.8cm)	5Y R6/6 橙	SD07最下層土器群	
353	底部	-	1.3	-	ヘラケズリ	ナデ 底部穿孔(径0.9cm)	7.5Y R7/3 におい橙	SD07最下層	
354	底部	-	4.2	-	ハケ	ヘラミガキ	7.5Y R5/1 褐灰	SD07最下層土器群	拓本
355	底部	-	3.2	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	10Y R8/4 浅黄橙	SD07下層	
356	鉢	9.0	4.0	5.2	ハケ スス吸着	ナデ(板ナデ)	10YR8/2 灰白	SD07下層	
357	鉢	11.2	5.1	6.6	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ 底部指頭圧痕	7.5Y R7/6 橙	SD07最下層・最下層土器群	
358	高坏?	11.1	-	-	ヘラミガキ	口縁部沈線2条 ヘラミガキ	7.5Y R8/4 におい橙	SD07下層(粘質)	
359	鉢	19.9	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ 口縁部2条凹線	10Y R8/3 浅黄橙	SD07下層(粘質)	
360	高坏	22.8	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ 口縁部擬凹線4条	5Y R7/6 橙	SD07下層	
361	鉢	38.0	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.5Y R6/6 橙	SD07最下層・最下層土器群	
362	脚台	-	6.5	-	体部ヘラケズリ→ナデ 脚部ナデ	体部ヘラケズリ 脚部ナデ 指頭圧痕	7.5Y R6/4 橙	SD07下層	
363	脚部	-	7.8	-	坏部ハケ 脚部ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ナデ 脚部指頭圧痕	7.5YR5/3 におい褐色	SD07最下層土器群	
364	脚部	-	5.4	-	ハケ 脚部指頭圧痕+ナデ	ナデ 指頭圧痕	10Y R8/2 灰白	SD07下層(粘質)	
365	脚部	-	-	-	ナデ?	ヘラミガキ	7.5YR7/4 におい橙	SD07下層	
366	脚部	-	4.7	-	ヘラミガキ 脚部ハケ→ナデ	ナデ 指頭圧痕	5Y R6/6 橙	SD07中層・SD07下層・SD09最下層	
367	脚部	-	5.7	-	ナデ	ナデ	5Y R6/6 橙	SD07下層	
368	脚部	-	4.2	-	体部ハケ 脚部ナデ	ナデ	10Y R7/3 におい黄橙	SD07下層	
369	脚部	-	12.7	-	脚端部ヨコナデ ハケ	脚端部ヨコナデ ハケ 円形透かし	10Y R5/2 灰黄褐	SD07下層	
370	高坏	-	13.8	-	ヘラケズリ+ハケ	ヘラミガキ 円形透かし孔(径1.5cm)	7.5Y R7/4 におい橙	SD07最下層土器群	
371	脚部	-	11.3	-	ナデ	ナデ	10Y R7/2 におい黄橙	SD07下層(粘質)	
372	脚部	-	16.3	-	ハケ	脚端部ヨコナデ ハケ→ナデ	7.5Y R7/4 におい橙	SD07最下層土器群	
373	脚部	-	20.5	-	ハケ→ヘラケズリ	ヘラミガキ	2.5Y R6/6 橙	SD07下層	
374	脚部	-	14.5	-	脚端部ヨコナデ ハケ	ヘラミガキ	10Y R7/3 におい黄橙	SD07下層(粘質)	
375	脚部	-	21.0	-	ハケ→ナデ	ヘラミガキ 円形透かし(4方 径1.4cm)	10Y R8/2 灰白	SD07下層	
376	脚部	-	15.0	-	脚端部ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R7/3 におい橙	SD07下層(粘質)	
377	山茶碗	-	5.6	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラ切り?	2.5Y R 黄灰	SD07下層(粘質)	
378	短頸壺	9.6(復元)	-	-	口縁部ハケ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 1条沈線 体部ハケ	10Y R7/4 におい黄橙	SD7・SD7中・下	
379	短頸壺	11.2	-	-	口縁部ハケ 頸部ナデ	口縁部ハケ(ヨコ) 1条沈線 頸部ハケ(縦)	10Y R8/3 浅黄橙	SD7	
380	壺	-	-	-	頸部上半ナデ 頸部下端以下ハケ→ナデ	ハケ→ナデ 円形竹管文	10U R8/4 浅黄橙	SD7	
381	壺	19.1	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5Y R7/6 橙	SD07・09合流付近下層	作製時の接合痕
382	甕	12.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	10YR7/2 におい黄橙	SD7	
383	甕	15.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R8/4 浅黄橙	SD07・09合流付近下層	
384	甕	16.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R7/6 橙	SD1・7	
385	壺?	15.0	-	-	口縁部ハケ 頸部~体部ナデ	口縁部肥厚 2条沈線 ヘラミガキ	7.5Y R7/4 におい橙	SD7	
386	甕	14.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/3 におい橙	SD07・09合流付近下層	
387	底部	-	5.5	-	ハケ	ナデ 底面圧痕	7.5Y R7/3 におい橙	SD07・09合流付近下層	底面拓本
388	底部	-	3.6	-	ヘラケズリ	板ナデ	10Y R7/3 におい黄橙	SD07・09合流付近下層	
389	底部	-	4.8	-	ヘラケズリ	ハケ	7.5Y R7/3 におい橙	SD07・09合流付近下層	
390	底部	-	5.3	-	ハケ	ハケナデ→ヘラミガキ	5Y R6/6 橙	SD7	
391	底部	-	2.9	-	ヘラケズリ	タタキ→ハケ	10Y R7/2~5Y R6/4 におい黄橙	SD7	
392	底部	-	2.5	-	ヘラケズリ	タタキ	10Y R7/3 におい黄橙	SD07・09合流付近下層	底部穿孔(径1.4cm)スス付着
393	鉢	18.4	-	-	口縁部ヘラミガキ 体部ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R7/4 におい橙	SD07・09合流付近下層	
394	台付鉢	11.0	4.5	6.8	ハケ	付部 タタキ→板ナデ 脚部 板ナデ 指頭圧痕	7.54Y R6/4 におい橙	SD7	
395	脚部	-	6.8	-	板ナデ	ナデ 指頭圧痕	10Y R8/2 灰白	SD07・09合流付近下層	
396	鉢	-	-	3.6	ヘラケズリ→ハケ	ハケ 脚部指頭圧痕	10Y R7/2 におい黄橙	SD07・09合流付近下層	
397	脚部	-	2.9	-	ナデ	ナデ 指頭圧痕	7.5Y R7/4 におい橙	SD07・09合流付近下層	
398	高坏脚部	-	-	-	ケズリ? 円形透1方向 坏部から脚部まで穿孔(成形時の芯棒か?)	ヘラミガキ	2.5Y R6/6 橙	SD1・7	
399	脚部	-	-	-	脚部ヘラケズリ(掻きとり)	ヘラミガキ	10Y R7/2 におい黄橙	SD7	
400	壺	11.0	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ナデ	10Y R7/4 におい黄橙	SD09最下層	
401	壺	14.3	-	-	ヨコナデ	口縁部ハケ	10Y R8/2 灰白	SD09下層	
402	壺?	13.0	-	-	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ	口縁部板ナデ→ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R7/4 におい橙	SD09上層	
403	甕	11.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	7.5Y R7/4 におい橙	SD09下層	
404	甕	15.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10Y R8/2 灰白	SD09下層	
405	甕	11.7	-	-	-	ヘラミガキ?	7.5Y R8/2 灰白	SD09下層	高坏?

報告書No	器種	口径	底径	高さ	調整等 内面	調整等 外面	色調	出土場所	備考
406	底部	-	4.0	-	ヘラケズリ	ナデ	10Y R6/3	SD09最下層	
407	底部	-	4.1	-	ハケ	ナデ	5Y R6/6 橙	SD09下層	
408	底部	-	4.0	-	ナデ	ナデ 指頭圧痕 底面スス	10Y R7/1 灰白	SD09最下層	
409	脚部	-	-	-		指頭圧痕	10Y R8/2 灰白	SD09下層	
410	鉢	26.7	-	-	口縁部ヨコナデ ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ ナデ	7.5Y R7/3 にぶい橙	第2包含層	
411	高坏脚部	-	-	-	ヘラケズリ	不明	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD09下層	
412	高坏脚部	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD09下層	
413	脚部	-	-	-	ヘラケズリ	不明 円形透孔3ヶ所	5Y R7/6 橙	SD09下層	
414	脚部	-	14.2	-	ハケ→ヘラケズリ	脚端部ヨコナデ 脚部ヘラミガキ	10Y R8/1 灰白	SD09下層	
415	脚部	-	16.9	-	ハケ	ナデか?	7.5Y R7/4 にぶい橙	SD09下層	
416	坏	13.5	10.6	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転ヘラ切	10Y R8/3 浅黄橙	SD09下層	拓本
417	脚部	-	19.0	-	ヘラケズリ→ハケ→ヨコナデ	-	7.5Y R5/2 灰褐	SD08	
418	底部	-	2.0	-	板ナデ	タタキ	10Y R7/2 にぶい黄橙	SD08	スス付着
419	壺	12.2	-	-	口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 1条沈線 頸部～体部板ナデ状のハケ	7.5Y R7/6 橙	第2包含層	
420	壺?器台?	17.4	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5Y R6/6 橙	第2包含層	
421	甕	13.8	-	-	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ→ナデ	10Y R8/2 灰白	第2包含層	
422	甕	12.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	10Y R6/3 にぶい黄橙	第2包含層一括	
423	甕	16.9	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ→ナデ	5Y R6/6 橙	第2包含層	
424	甕	20.8	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	7.5Y R6/3 にぶい褐色	第2包含層一括	
425	甕	12.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ヨコナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	
426	甕	13.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	
427	甕	717.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 口縁部擬凹線 (3条)	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	
428	甕	20.4	-	-	ハケ→ヨコナデ	ナデ	2.5Y R6/6 橙	第2包含層	
429	甕	14.6	-	-	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	5Y R7/4 橙	第2包含層	
430	甕	11.2	-	-	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	7.5Y R7/2 明褐灰	第2包含層	
431	底部	-	3.3	-	-	ヘラミガキ	7.5Y R7/2 明褐灰	第2包含層・SD09上	
432	底部	-	2.3	-	板ナデ→ハケ	タタキ→ヘラミガキ 底部板圧痕	10Y R7/3 にぶい黄橙	第2包含層一括	拓本
433	底部	-	8.7	-	ヘラケズリ	ハケ→ナデ	10Y R6/3 にぶい黄橙	第2包含層	
434	底部	-	4.6	-	ヘラケズリ	ハケ	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	
435	底部	-	5.1	-		ハケ→ナデ	10Y R6/1 褐灰	第2包含層	
436	底部	-	3.3	-	ハケ	タタキ→ハケ	7.5Y R7/3 にぶい橙	第2包含層	
437	底部	-	4.2	-	ハケ	タタキ→ナデ?	7.5Y R6/4にぶい橙	第2包含層	
438	底部	-	3.9	-	ヘラケズリ	ナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	スス付着
439	底部	-	1.8	-	ヘラケズリ	タタキ 底部穿孔 (径4mm)	7.5Y R6/4 にぶい橙	第2包含層	
440	底部	-	-	-	ヘラケズリ	ハケ→ナデ 底部穿孔 (径5mm)	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	
441	高坏	24.7	-	-	ヘラミガキ	ナデ	10Y R8/3 浅黄橙	第2包含層	
442	高坏	18.7	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5Y R6/4 にぶい橙	第2包含層	
443	高坏	12.0	-	-	坏部ヘラミガキ 脚部ナデ	坏部ナデ 脚部ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	SB04一括	
445	器台	27.8	-	-	口縁部ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層	
446	-	-	-	-	ヘラミガキ	ヨコナデ 口縁部3条凹線	7.5Y R7/3 にぶい橙	第2包含層	
447	脚部	-	4.8	-	-	-	7.5Y R7/3 にぶい橙	第2包含層	
448	脚部	-	6.6	-	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層一括	
449	脚部	-	7.9	-	ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ	脚端部ヨコナデ 脚裾部ハケ→ナデ	7.5Y R7/4 にぶい橙	第2包含層一括	
450	脚部	-	9.2	-	脚部ヘラケズリ 脚端部ヨコナデ	脚部ハケ 脚端部ヨコナデ	10Y R7/2 にぶい黄橙	SB04	
451	握鉢	-	10.0	-	ヨコナデ	体部ヨコナデ 凹線1条 底部ヘラケズリ	5P B6/1 青灰	第2包含層	内外面釉付着
452	製塩土器	11.1	-	-	板ナデ	指頭圧痕	2.5Y 6/3 にぶい黄 2.5Y R 5/6赤褐色	第2包含層	
K-1	平瓦	-	-	-	ナデ	ケズリ	N6/ 灰	第1包含層	
K-2	道具瓦	-	-	1.6	板状工具ナデ	ミガキ		第1包含層	
K-3	平瓦	-	-	-	布目	斜格子タタキ		第1包含層	
K-4	平瓦	-	-	-	布目	格子タタキ	5B6/1 青灰	第1包含層	
S-1	砥石	5.1(残)	3.4(残)	1.8(最大)				SD1	
S-2	切り目石錐	4.2	5.5	1.5				第1包含層	

報 告 書 抄 録

ふりがな	たのくち・へらまちいせき							
書名	田野口・箆町遺跡Ⅲ							
副書名	－中町東線建設に係る文化財発掘調査－							
シリーズ名	多可町文化財報告							
シリーズ番号	6							
編著者名	安平 勝利							
編集機関	多可町教育委員会							
所在地	〒679-1134 兵庫県多可郡多可町中区茂利20 TEL 0795-32-2385							
発行年月日	西暦 2007年（平成19）3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
たのくち・へらまちいせき 田野口・箆町遺跡	ひょうごけん たか郡 たかちょう なかくち あざ 多可町 中区田野口 へらまち	2833	中区番号 449	35度 04分 01秒	134度 55分 36秒	2006.08.22) 2006.12.07	約600㎡	中町東線 (道路)建設 に係る 事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
田野口・箆町遺跡	集落跡	弥生時代～ 中世	竪穴住居址、 掘立柱建物、 溝、土坑	弥生土器、須恵器、 土師器、鉄器		弥生時代終末期の竪穴 住居跡、溝のほか、大 量の当該期の土器。 平安時代後期～鎌倉時 代前半の掘立柱建物 群。		

圖 版



多可町中区北部平野航空写真（南から）



調査前全景



第 I 遺構面全景 (西側)



第 I 遺構面全景 (東側)



SB01・02・03



SB04



P4



P6



P10



P11·12



P15·16



P17·18



P24



P54



P84



P88



P90



P28



SK01



SK01 土層



SK02



SK02 検出状況



SK02 土層



SK02 遺物出土状況①



SK02 遺物出土状況②



SK03



SK03土層



SK04



SK05



SK05 土層



SK05 出土遺物



SK06・SD01 土層



SK07



SK07 土層



SD01・02・03



SD01



SD01土層



SD02土層



SD03土層



第2遺構面全景（西側）



第2遺構面全景（東側）



SD05



SB05 遺物出土状況



SB05 遺物出土状況



SB05 遺物出土状況



SB05 土層 (南北)



SB05 土層 (東西)



SK08 遺物出土状況



SK08 完掘



SK09



SD05・06・07



SD05土層①



SD05土層②



SD05土層③



SD05 上層土器群 (真上から)



SD05 上層土器群 (東から)



SD05 上層土器群 (北から)



SD05 上層土器群細部①



SD05 上層土器群細部②



SD05 下層土器群



SD05 下層土器群細部①



SD05 下層土器群細部②



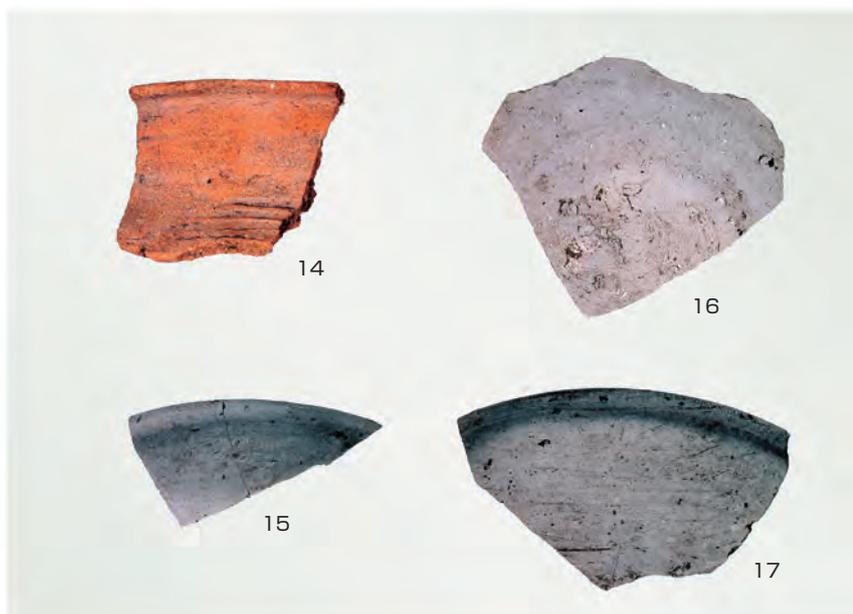
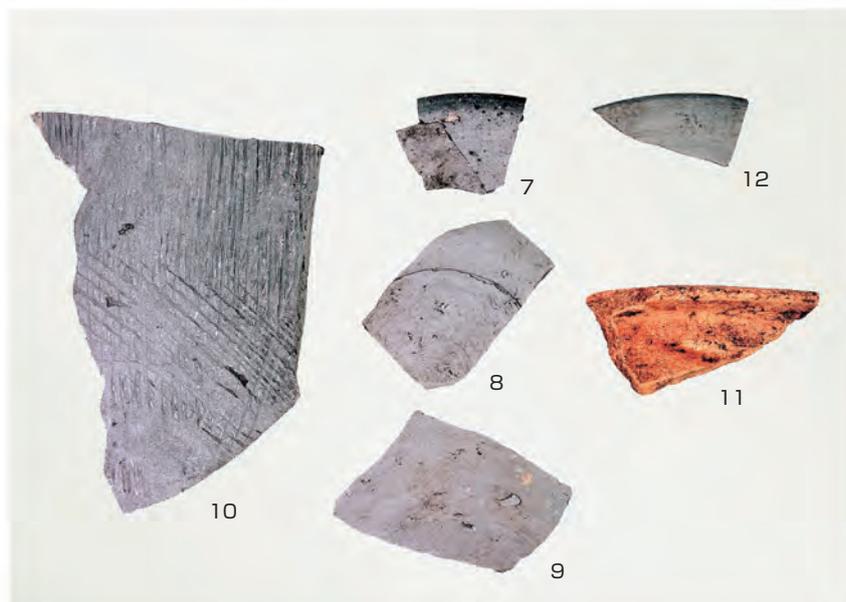
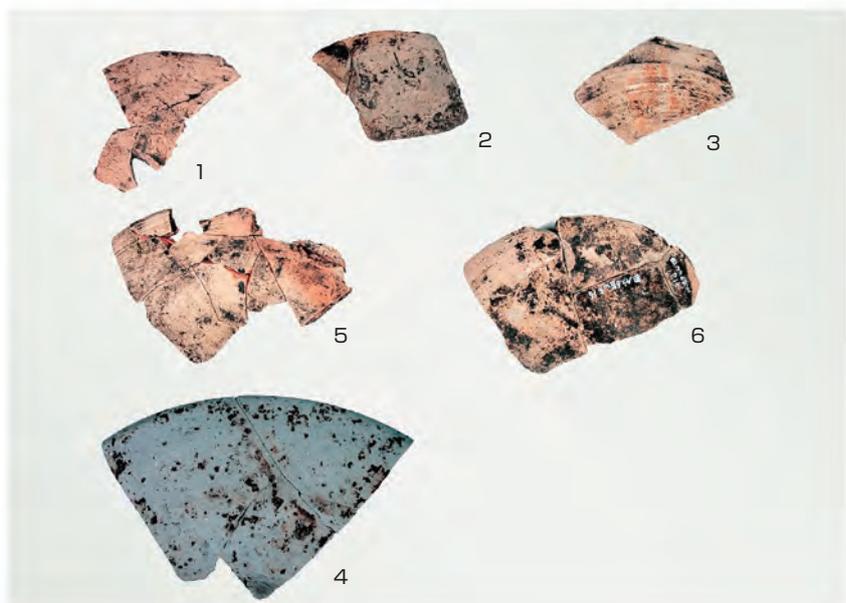
SD06土層



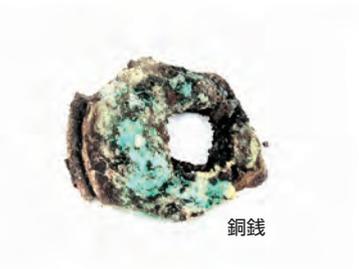
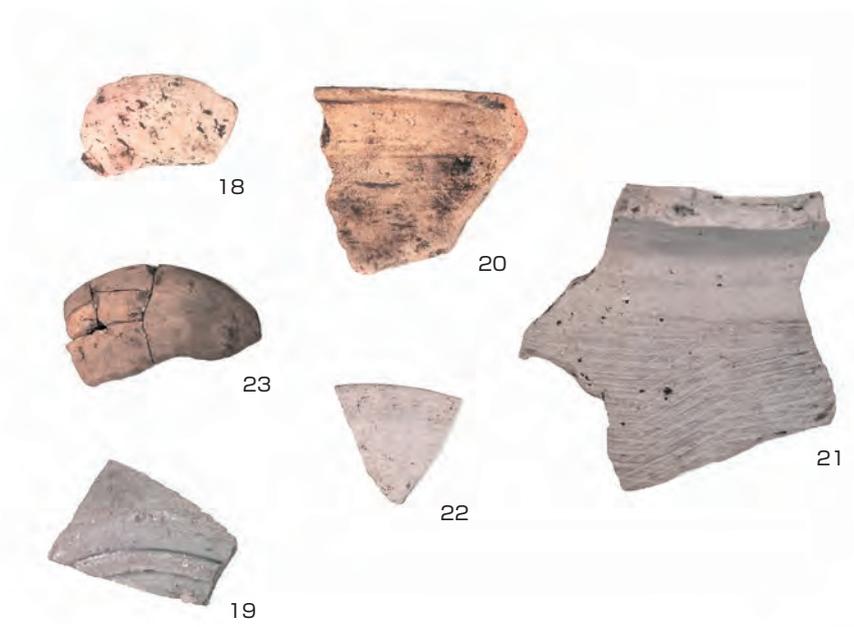
SD07土層

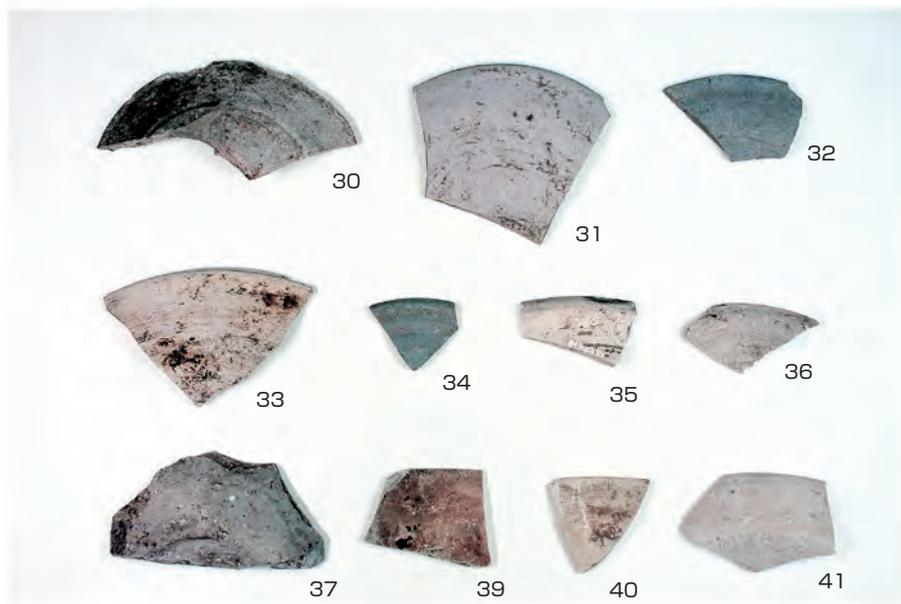


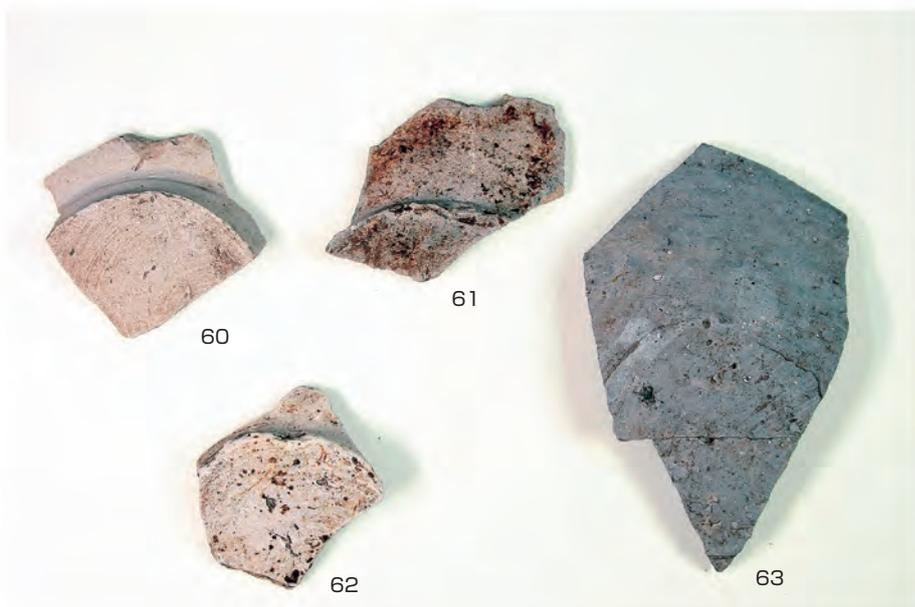
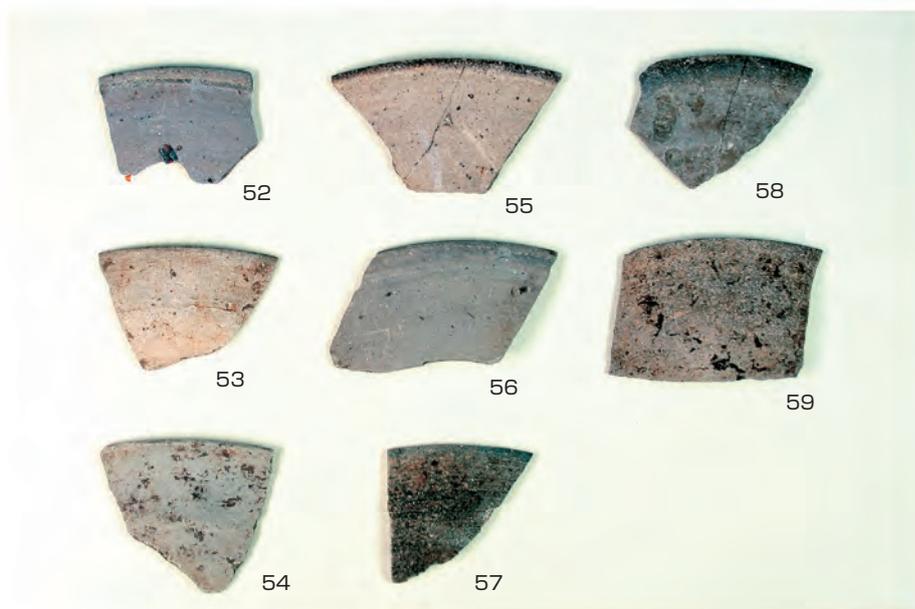
SD06 · 07

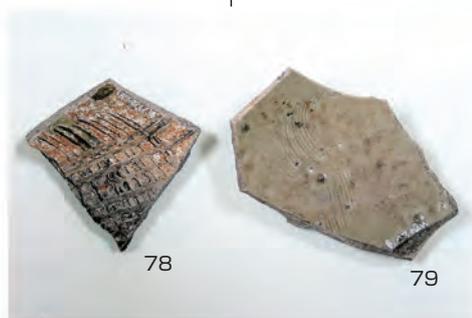
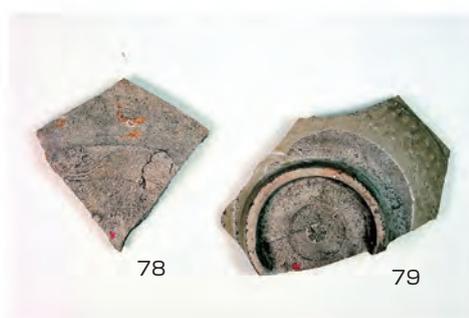
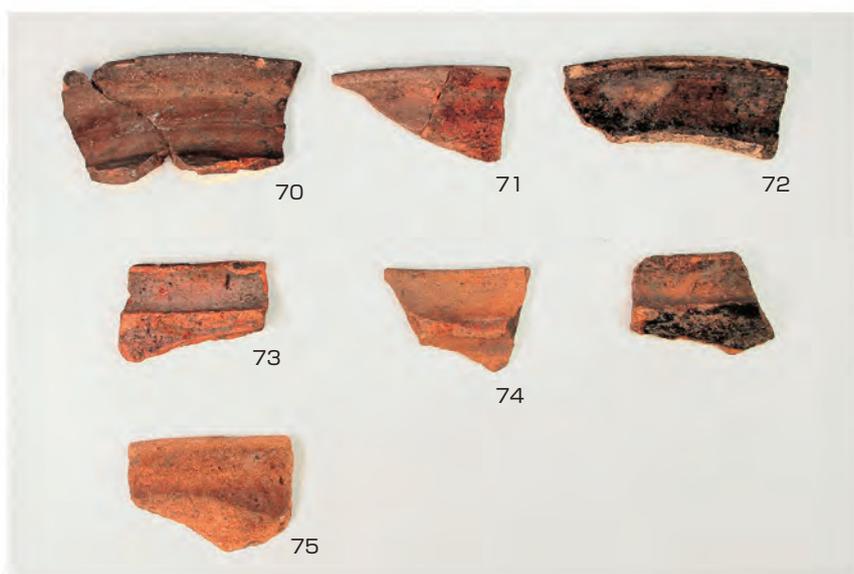
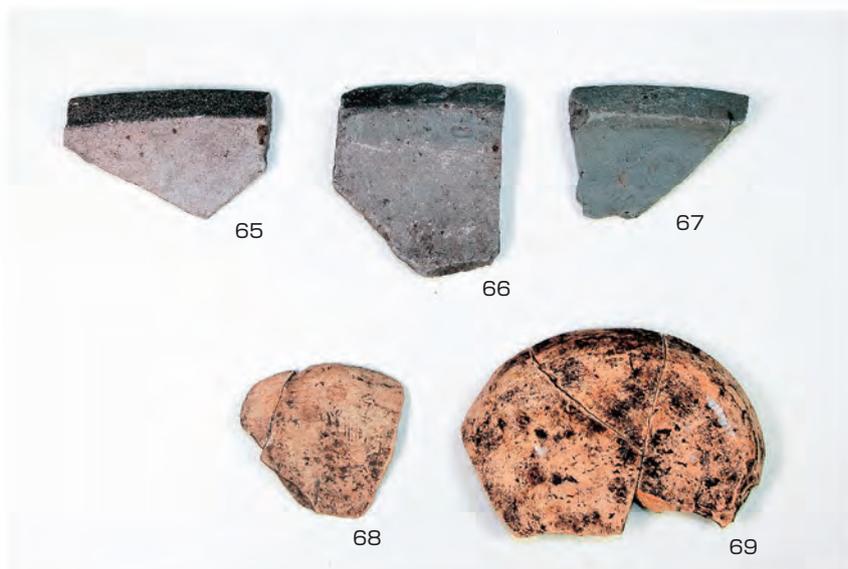


図版20
出土遺物

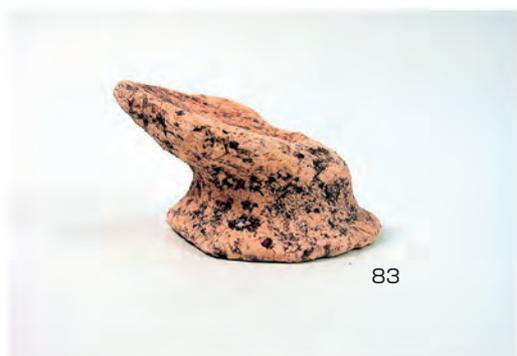














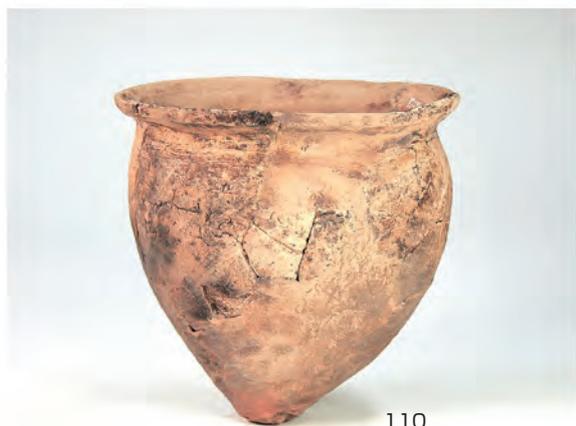




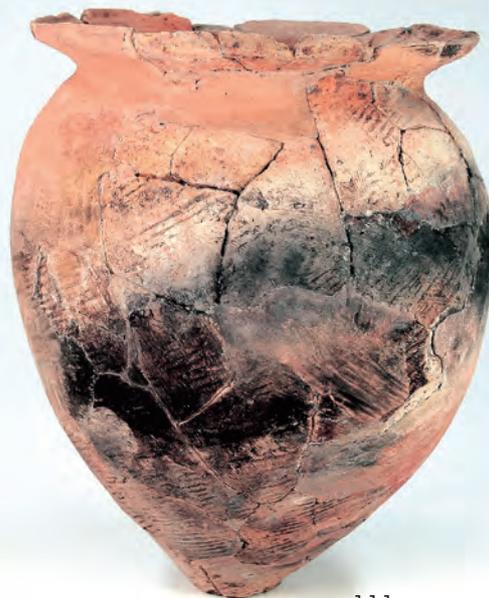
108



109



110



111



112

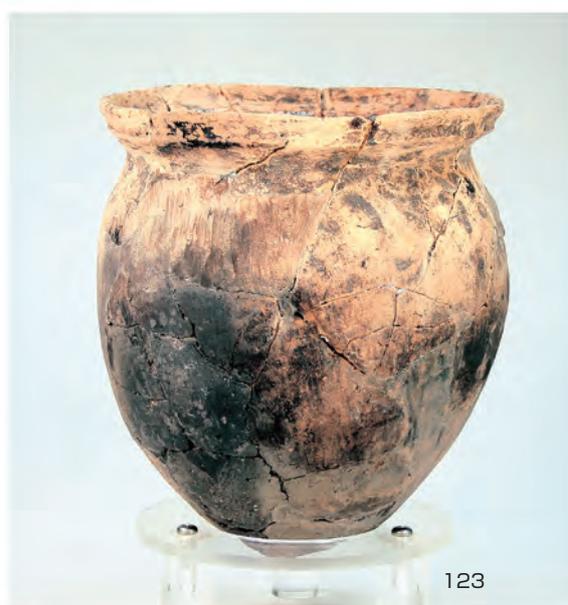


113

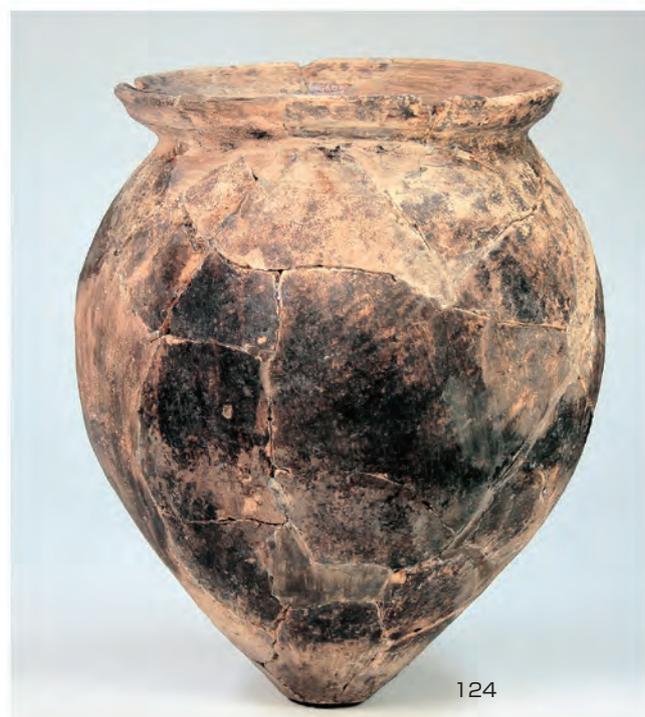




122



123



124



125

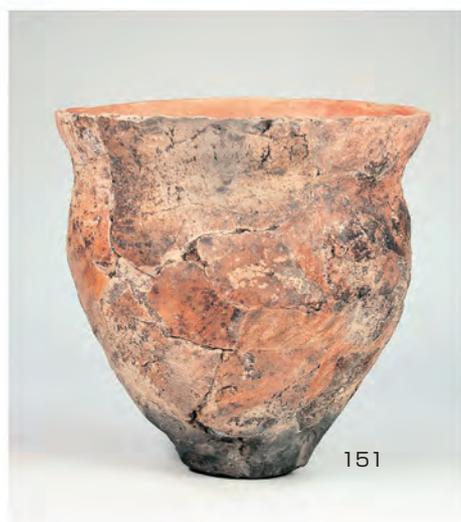


127



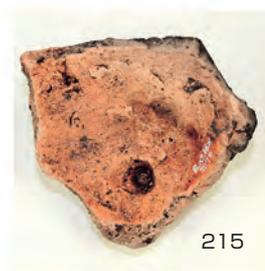
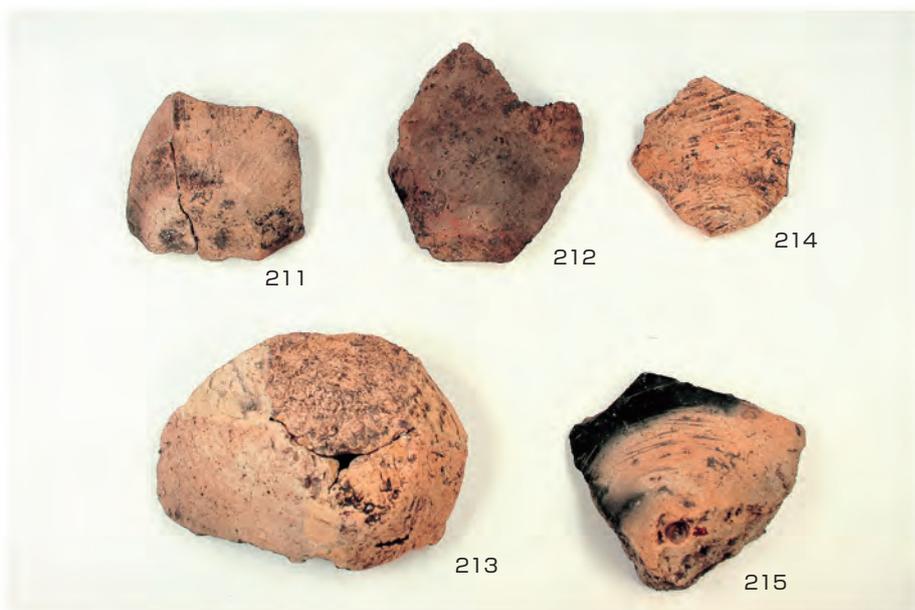
126





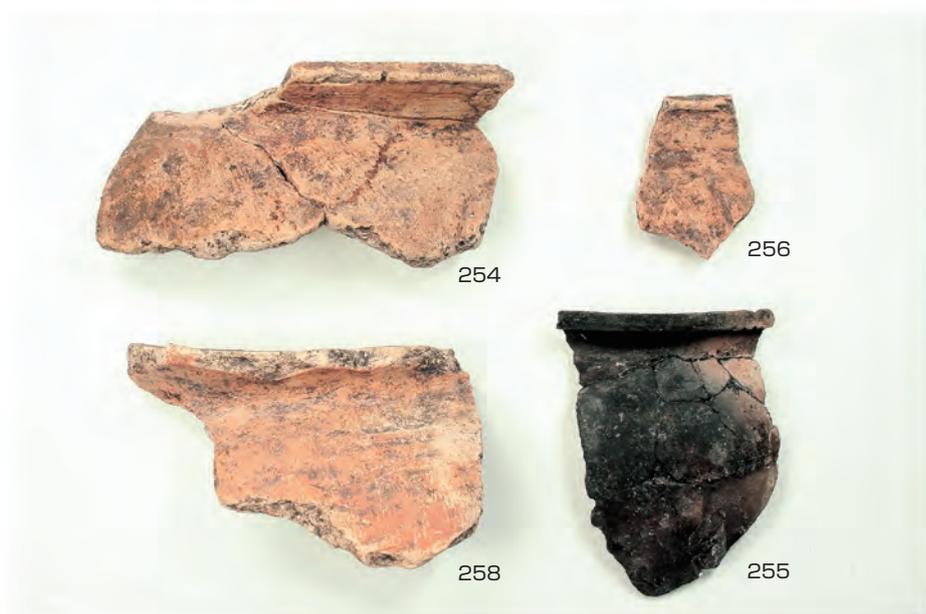










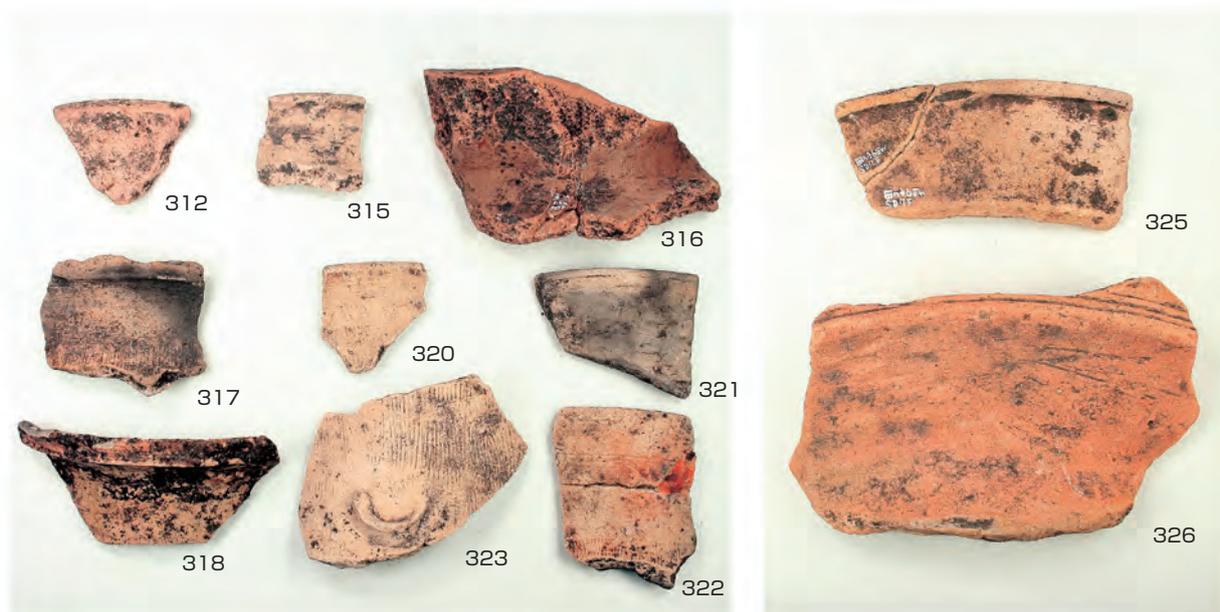




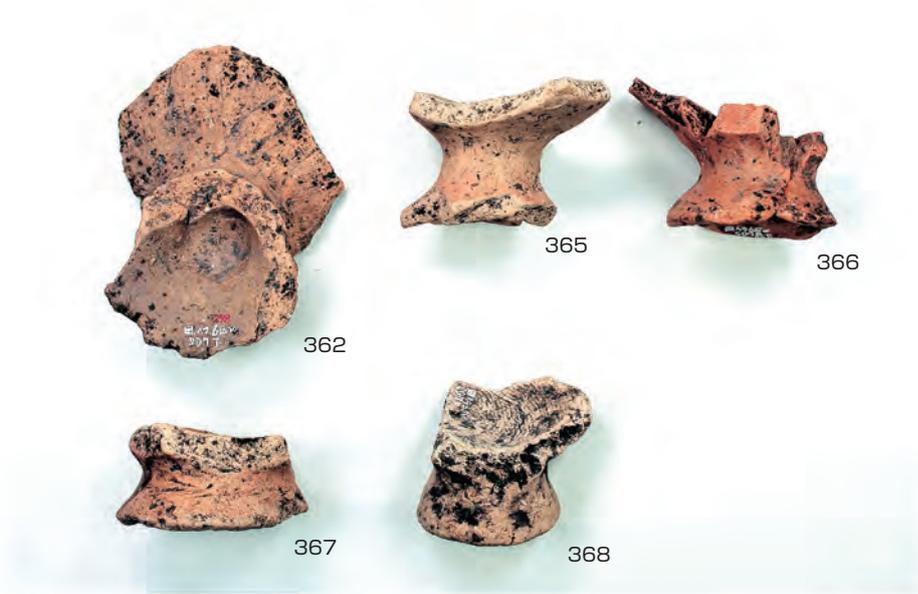




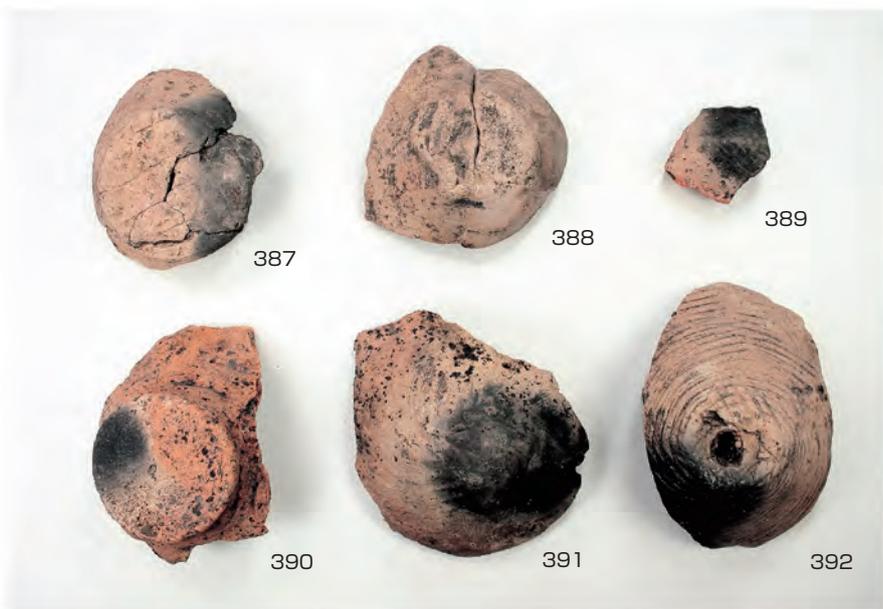












図版48
出土遺物







多可町文化財報告 6

たのくち へらまちいせき
田野口・笹町遺跡Ⅲ

2008年3月
発行 多可町教育委員会
〒679-1134 多可郡多可町中区茂利20番地
TEL. (0795) 32-2385
印刷 ウニスガ印刷株式会社

■データー 紙質 表紙 アートポスト 220kg
見返し 色上質 藤色 特厚口
本文 クリームキンマリ 57.5kg
カラー図版 アート 93.5kg
文字 モリサワ 14級
写真 スキャナー分解
製本 無線トジ